つとも固定資本價額を切下げることによつて生產費を切下げるとの、最初の目的は評價增により相當困難にされた樣である。しかし、とにかく、日本の銑鐵生產の八〇%、鋼生產の五一%を獨占する大會社が、國家の支配下にうつゝたのだ。その絕大な資本力をもつて、充分國家的見地から統制を實行すべきである。ところがこゝに大きな困難が生じた。それは鋼材需要の增大につれて、原料に不足が生じ始めた點である。鐵鋼生產を統制するには、民間事業の競爭を排除する必要がある。その見地から、新會社設立と同時に、從來の奬勵金——銑鋼一貫作業はトン當り六圓、鋼材用銑は五圓、鑄物用銑は三圓——を全廢し免稅の恩典も昭和十一年限り、廢業されることゝなり、新設も許可しない方針となつた。だから、日鐵が・增大する原料需要を供給しえない場合には、鐵鋼價格は騰貴せざるを得ない。それは本來の目的に反する。昭和九年秋になつて、この現象は顯著となつて來た。銑鐵共販はその不足分を消すために、四萬トンの印度銑輸入を企てたが、うまく行かず、やむなく、共販建値よりも約三圓高で、ロシア銑を購入することゝなつた（十一月十二日契約）。かうした原料不足を緩和するため、政府はつひに、最初の方針を改めて、春から懸案になつてゐた、日本鋼管の日產三百五十トン爐の建設を許可することゝなつた（十月十八日）。原料不足を補ふために民間製鋼會社に熔鑛爐の新設を許可すれば、自然原料供給を通じての製鋼業統制が困難になる。だから、統制方針を强行するためには、それと並行して、日鐵生產力をも增加して、自由競爭を激化することによりより以上の獨占へと進むの外ない。日鐵は、八幡に千トン爐、輪西に七百トン爐、釜石に五百トン爐の增設計劃をたて、製鋼部門においては九月末條鋼分野協定を中止し、ついで約二十五萬トンにのぼる各種鋼材增產計劃を發表した。民間會社の增產計劃と合せて、二年後には六十萬トンの增產が豫想されてゐる。日鐵側は、カルテルの解散を主張したが、民間側は自由競爭において、自己の陣營の壞滅に陷ることを虞れて極力反對したゝめ、解散は保留され、一ヶ年のカルテル機能中止で納まつた。だが、日鐵の鐵鋼部門獨占强化のためには今一度猛烈な自由競爭は必至であらう。

5 產業統制の强化

石油統制 產業保護と國防上の要求とが競合して、國家統制の成立したもつとも顯著な例は石油業法の實施である。業法通過の直接の動機となつたものは、松方蘇油の侵入による油界の混亂であつた。昭和八年六月から、九年同月にかけて、揮發油は二八%輕油は二四%、モビール油は二四%下落した。油價の低落は消費者には利益を與へたが、國產石油諸會社は急激な利潤の減退を來した——日石の利益率は八年上期の一六・七%より九年上期の一〇・六%へと減少。油界統制の必要は切迫した。第六十五議會を通過した石油業法は『輸入の調整、事業亂立の防止、供給量の確保』の目的をもつて、精製業及び輸入業を許可制度にした（『第六十五議會とその業績』の章參照）これによつて從來の如き價格競爭がさけられる。國產石油保護政策は、同法による商工省の內外各社販賣割宛に明瞭に示されてゐる。昭和九年八月末に發表された、同年七月より十二月迄の割宛數量はさきの六社協定（六月二十二日）に比し、ライジングサン（ロイアルダッチ・シエル系）ソコニーヴアキユーム（スタンダード系）、松方日蘇が據置かれたに反して內地各社のそれは、一五から二〇%以上も增加してゐる。國防的見地は、同法の、政府販賣價格決定、政府石油買上權の確保、輸入量半ヶ年保有義務强制にあらはれてゐる。最後の半ヶ年貯油義務は——三ヶ月分は昭和十年三月迄、殘り三ヶ月分は六月迄——精油會社にほゞ、精油作業に要すると同額の資本固定を要求するので、經常費の補償が求められたが、結局ガソリン價格引上によつて消費者に轉嫁されるだらう。問題は、英米資本が、かゝる貯油負擔と、露骨な外資排斥を甘受するか否かにある。政府部內には、鐵鋼等におけると同樣に、合同によつて半官半民の大石油會社設立の意見もあつた樣だが、それにしても、巨大な外國資本を如何にすべきかゞ問題となるだらう。原料資源を殆んどもたない日本にとつては、精油工業の統制はともかく、石油自給は困難である。

重要産業統制法の誕動　恐慌克服等の非常時對策としての産業統制政策は、昭和六年三月制定された、『重要産業統制法』によつて具體化されてゐる。同法はカルテル助成法と云はれてゐる。しかし、獨占による暴利を取締るために、『統制協定が公益に反』する場合には主務大臣はそれの『變更又は取消を命ずる』（第三條）權限を與へられてゐる。また、同法第一條の『同業者二分の一以上の加盟』なる言葉も巨大資本を押へる意味をもつてゐる樣である。既に昭和七年十一月迄に指定産業とされたものは、紡績、製紙、セメント、鐵鋼等二十一事業にわたつてゐたが、昭和七年四月に到つて新たにビールが統制産業に指定された。ビール界は昭和八年六月大日本會社と麥酒鑛泉とが合併したので、總生産の七七%、能力は優に内地總需要を凌駕する（八年度の消費八十五萬石、大日本の能力は百二十萬石）大獨占體が成立した。そこで、同社は九年に入つて、割戻金（一箱三十錢）を廢止し、更にビール値上を策したが、値上の方は商工省の反對で中止になつた。政府も時節柄、かゝる獨占體を放置する譯に行かないので、重要産業に指定したのである。

ついで、五月十日に石炭鑛業も指定された。それも、炭價の騰貴が顯著になつたことゝ基礎産業としての重要性の認識が、重要産業指定を決行させたものである。だが、別に炭價引下の强要は行はれてゐない。この産業について興味のあることは、『二分の一以上の加盟』が一つの問題を惹起した點である。從來聯合會加盟會社は二十五社であつて、もし小炭坑をも同業者とすれば、二分の一に不足する。そこで、もし、すべての同業者をこめれば、大會社の統制が困難である。遂に、年産十五萬トン以上を『重要なる産業を營む者』に限定して、三十一社を同業者として、指定を與へた。もつとも、この三十一社で、總生産の九三%をしめてゐるから統制は完全である。たゞ、二分の一なる平等主義は實際においては大會社支配に轉換されることを指摘すればたりる。

セメント・カルテルの經驗　カルテルが、巨大獨占體に支配されてゐる場合には、重要産業法は別にその機能を發揮する程のこともない。カルテル内において、資本の對立が生じたとき始めてそれは發動する。セメント・カルテル内

に生じた紛騷は、同法の一つのテストとなるだらう。對立は現狀維持を求める會社と、設備擴張を要求する會社との間に生じた。現狀維持を利益とするものは、擴張困難の舊式設備をもつ大會社（淺野）と、既に新設備をほゞ完了した會社、（窯業、宇部、磐城、秩父等）であり、擴張を要求するものは能力增加によつて生産費を切下げんとする、小野田、大分（小野田の子會社）である。淺野は既に老朽し、秩父、磐城等の新勢力が次第に擡頭して來たが、一方では、小野田は三井の經營にうつつてから俄かにセメント界の覇權獲得に乘出して來た。設備擴張によつて、廉賣競爭を行ひ、舊勢力を打倒しようと云ふのだ。昭和九年七月に到つて、商工省は、兩者の間に調停に立つたが、增産計劃の中止は小野田側が反對し、セメント建値一袋十錢の引下げは十三社側の反對に遭つて、調停は成功しなかつた。何分にも、窯業は昭和五年から見れば二七五%—宇部は一七七%—秩父は一〇八%だけ能力を增加してゐるのに、小野田は四二%だけしか增産できてゐない。擴張はこれからである。これに反して、三社から見れば、今後小野田の强大な資本的背景をもつて、增産廉賣をやられれば、セメント界は混亂に陷り、ひいては自社の安危にかゝはるわけである。商工省としても、この紛爭をいつ迄も放任して置くわけにゆかないので、ついに、十月二十七日に到つて、統制法第二條を發動して、アウトサイダーにも拘束力を及ぼすことにした。六月廿五日より向ふ一年間增産中止、限産年五・七割、一袋につき六錢値下は、たとひ小野田がカルテルを脱出しても强制されるわけになつた。增産中止では小野田側が敗退した樣である。だが、六錢の値下（小野田の主張は十錢）はむしろ小野田側の勝利であり、しかも最高價格しか決定してゐないから販賣戰は中止されない。統制法は、セメント等における鬪爭を阻止することはできない。小野田が一時利益を顧みず、鬪爭を繼續するなら、恐らくは金錢的背景をもたない淺野の陷落を促す事だらう。統制が成功するのは、鬪爭がいづれかの勝利に終つてからの後であらう。そして、それは、統制法がその機能を果す必要のない樣になることを意味する。

獨占强化　獨占資本は、昭和八年から九年にかけて、株式公開、プレミアム穫ぎによつて莫大な資金を獲得した。

勿論、その一部分は、社會事業に注入したかも知れないが、その多くは生產事業に投下されねばならない。生產設備の擴張は早いほど利益である。またそのことは大資本の支配のためにも必要である。カルテルをもつとも強固ならしめる方法は特定產業部門が、大獨占體で占められることである。その條件のない場合には、國家すらもなんら統制力をもたない。獨占强化のための自由競爭はむしろ奬勵される。製鐵部門における日鐵の活動、セメント部門における小野田對十三社の對立の如きその一例である。紡績業部門においても、大紡績業者の間には操短緩和または全廢の意見すらあらはれてゐる。ときとして、自由競爭による集中化が、國防上その他の理由から喜ばれない場合があるのでやむを得ず國家により、統制が行はれる。石油業法の如きその一例である。だが、そこでも、できうれば、なほ一層の集中化、國家の指導による大合同の實現が要求されてゐる。

株式崩落　東株上期上場株は九年十月初めから、十一月初にかけて、六・四%、三億七千圓の崩落を示した。暴落の動機は藤井藏相の特別利得稅案であると云はれてゐる。

しかし、僅か三千萬圓の增稅案のみで、かゝる株價暴落が惹起されるとは考へられない。そこには、將來の生產過剩、猛烈な價格競爭が懸念されてゐる。產業統制政策にあらはれた、顯著な現象は、むしろ、自由競爭の阻止ではなかつた點は注意する必要がある。勿論、多くの株式を大衆化した獨占資本には、今度の株價下落は大した打擊ではないだらう。だが、いづれにせよ、將來の產業界は益々多難であらう。重要產業統制法が活動するのは今後のことである。しかし、それは果して効果をあげうるであらうか。最近、カルテル助成からカルテル取締へと統制法の意義は轉換したと云はれてゐる。しかし、今日において、大資本は價格吊上よりも、引下げによる競爭を要求してはゐないだらうか。そこで、統制經濟强行下においても膨脹するものは獨占資本であり、それの××資本との結合である。それこそは產業統制の眞の目的ではなからうか。

十三　窮乏する農村

1　試練下の米穀統制法

出發點——昭和九年度の米穀需給事情　米穀年度といふのは、前年十一月からその年十月までの一ヶ年を云ふのであつて、昭和九年米穀年度は昭和八年十一月に始まる一年間のことである。そこで、この九年米穀年度における米穀需給事情はどうなつてゐたかと云へば、農林省發表（二月一日）によると次の如くであつた。

昭和九年米穀年度米穀需給事情

供給		需要	
前年度よりの持越高	九、〇〇七千石	消費（本米穀年度における一人當り消費量を一石一斗とし、之に本年四月末推定人口六六、八六一千人を乘じたるもの）	七三、五四七千石
產米實收高	七〇、八四七	移出	五〇〇
鮮米移入見込	八、〇〇〇	計	七四、〇四七
渡米移入見込	四、五〇〇	差引次年度への持越高	一八、三〇七
計	九二、三五四		

豐作の八年度　この表はそれだけで實に色々のことを語つてゐる。第一に、八年產米が七千萬石を突破し、全國平均段當收穫高は二石二斗三升二合に當り、『總數においても段當り收量においても有史以來の新記錄をだした』ほどの豐作だつたこと、第二に、朝鮮においてもまた大豐作で千八百萬石の實收があり、小作米の納入も例年より廿日も早く完

了し、巨額の内地移入が豫想されたこと（八年度の鮮米移入は七百廿萬石）。第三に、そして最も重要なことは、前年度の持越高が九百萬石に上つてをり、翌年度への持越高が實に千八百萬石以上に上ると見積られてゐることである。所謂端境期を安心して越すがためには、一定量の持越米を必要とするが、その理想的持越高は通常五百萬石と稱せられてゐるから、この理想的持越高を差引いて考へてみても、既に八年度には四百萬石からの過剰米があつたことが分かる。それが九年度になると一躍千三百萬石以上の過剰米となり、これでは到底、米價高を望むことは全く絶望だ。實際、こゝ數年間は作柄の良否にかゝはらず、常にこの過剰米の壓迫のため米價はとかく下押しで、農村の窮乏も畢竟かゝる米價の伸び惱みの結果だと、政府やブルジョア農業政策家が考へるのも一應は至極尤もであつた。實際、米は安い。昭和元年頃には石卅圓叫ばつた米價が茲數年間は政府の必死の米價維持策を尻目にやつと廿圓前後を上下してゐる有樣だ。石廿圓前後といへば、大正元年頃の相場である。そんなに安い米が何故賣れ剩るのか。日本人は米を雪辱食つて食ひ剩してゐるかといふに、さうではない。陸軍省の調査（東朝、九・一一・二〇）では『米を食はぬ村』が全國で百八十二ヶ村もあつて、『年々筋骨薄弱の壯丁が激增し』てゐることを報じてゐる。否、遠く山間の僻村にゆかなくとも、大都會のイースト・エンドには毎日三度の米を喰べられぬ失業者や自由勞働者が蝟集してゐる。缺食兒童の數だつて、年々夥しい數を示してゐるのだ。だから當り前なら、何故米は安いか、その安い米が何故剩るかを考へるべきだらうが、政府にとつては、どうして米價を吊上げるかが問題なのだ。さうして第六十四議會で代議士諸君と政府委員との關葉を絞つて出來上つたのが米穀統制法（昭和八年三月廿九日發布）であつた。

最低米價の確定——米價吊上げの試み　米穀統制法の骨子は、『米穀ノ數量又ハ市價ヲ調節シ米穀ノ統制ヲ圖ル爲』、『毎年米穀ノ最低價格及最高價格ヲ公定シ』、この公定告示の米價を維持するために政府が、『最低價格ニ依ル賣渡ノ申込又最高價格ニ依ル買入ノ申込ニ應ジテ米穀ノ買入又ハ賣渡ヲ爲ス』點にある。そこで第一に問題となるのは最低價格及

び最高價格の公定である。例へば最低價格が一圓高く公定されただけでも、七千萬石の產米の四〇%を自家用飯米と見て、農家の收入は四千萬圓からの增加となるはずだ。かゝる重大なる利害關係を有する最低價格及び最高價格公定の方式は、米穀統制法實施時期たる昭和九年米穀年度の開始が迫つてきた八年十月廿一日附の米穀統制法施行令をもつて決定された。

米價公定の方式は頗る複雜であるが、要點だけを同施行令によつて說明すると、最低米價は米穀の各銘柄及び等級毎に定められ、この各銘柄及び等級毎に定められる最低價格を總平均したものが標準最低米價であり、これは農林大臣が定める。それでは標準最低米價はどうして定めるかといふと、一方には當該年產米穀の生產費に運賃諸掛りを加へた額と、他方には米價指數と物價指數との關係より算出したる價格（率勢米價又は物價參酌値とも云はれる）に基き農林大臣が恒の定むる價格とを、この二つの値の範圍內において之を定める。この後の場合の、所謂率勢米價に基き農林大臣の定むる價格はどうかといふに、それは率勢米價（卽ち物價參酌値）の下値一割に相當する價格と下値二割に相當する價格との範圍內において『經濟事情ヲ參酌シテ』之を定めることになつてゐる。つまり大ざつぱに云へば、生產費（運賃諸掛りを含む）と率勢米價下値二割との間において、經濟事情を參酌して之を定めるわけである。

最高價格の公定方式も右と大體同樣であつて、たゞ生產費の代りに家計米價を、率勢米價下値一割乃至二割の代りに上値二割乃至三割を置き換へて考へればよい。だから最高米價は家計米價と率勢米價上値三割との間において經濟事情を參酌して之を定めるのである。だが最高價格の方は、同施行令付則によつて、當分のうち、家計米價を無視して、率勢米價の上値二割乃至三割の範圍で之を決定しうることとされた。

實際には米價公定は、生產費の集計が遲れ、十一月には暫定的公定價格が發表されたばかりで、本格的の米價公定は十二月十七日に至つて始めて本極りとなつた。今、その時の事情を少しく立ち入つて見てみると、最初農林省が米穀統

制委員會に提出した原案では

標準最低價格	二十三圓廿錢
標準最高價格	三十圓五十錢

となつてゐた。米價安の折柄であるから最高價格の方は問題でない。重要なのは最低價格だ。荷見米穀部長は同委員會でこの農林省原案の標準最低價格の算定の基礎を次の如く說明してゐる。卽ち

最低價格算定の根據(單位圓)

平均生產費	二二・一七
運賃諸掛り	一・一七
計	二三・三四
物價參酌値	二四・四一
同下値一割	二一・九七

右の物價參酌値下値一割廿一圓九十七錢と平均生產費に運賃諸掛りを加へたもの廿三圓三十四錢との間で廿三圓廿錢と算出した。

これで見ると農林省原案が既に生產費(運賃諸掛りを加ふ)に甚だ近い數であつたが、二三の有力委員は之で滿足せず『廿四、五圓が相當程度の最低價格と思ふ故、政府案は反對である』と强硬な反對態度を示して、會議は大混亂に陷つた。併し幾ら廿四、五圓を相當程度の最低價格と思ふと主張したところで、生產費(運賃諸掛りを加ふ)が廿三圓卅四錢と出た上からは、法文上それを越した額で最低價格を定めることはできるものでない。況んや、その農林省案の生產費についてさへ、『農林省も目下のところ目安を廿三圓におき新生產の集計に際し或る程度の政治的手心を加味して粉飾することになるものと見られてゐる(東朝、八・一二・一三)』と云れてゐる位だ。そこで結局、懇談の上で公定米價として

次の結果に到達した。

標準最低價格	二十三圓三十錢	一	標準最高價格	三十圓五十錢

卽ち最低價格は生產費プラス運賃諸掛りの合計額にギリ〳〵のところまで引上げられた。

最初の困難——賣渡申込殺倒す　これと同時に政府は米價維持のための第二段の工作を行つた。九年度米穀需給事情に現はれた大過剩米の重壓に脅びえた政府は米價吊上げに必死の活動だ。元來、我國の米穀需給から見ると、年末には農民が換金を急ぐ餘り、新米の出廻りが一時に殺到して、たゞさへ米價を押下げる事情にある。そこで米穀統制法(第四條)にも、內地米、臺鮮米を通じて、出廻り調節買上げの途を拓いてあるわけだが、十二月六日には早くもこの規定に基いて、本年度において內地米百七十萬石、臺鮮米百五十二萬石、合計三百廿萬石餘の季節買上げを發表し、第一回分として內地米卅五萬石、臺鮮米廿五萬石の買上げを實施するに至つた。續いて同廿日には、鮮米の移入が愈々旺んで、內地米價格を大いに壓迫するといふ事實に鑑みて、矢つぎ早やに鮮米五十萬石の買上げ實施の擧に出た。

然るに、かゝる好條件と好材料とに拘はらず、とかく米價は伸惱みで、淸算米市場では『八十一錢方の不合理な採算無視の相場』が展開され、就中、皮肉なことには第二回季節買上げ發表と同時に、淸算米當限(大阪)が公定相場より遙に下値の廿二圓六、七十錢に沈むといふ有樣であつた。何が米價の昂騰を押へてゐるかといふに、東朝紙(八、一二・二〇)は『廉賣依然として熄まず』との見出しの下に、次のやうな記事を揭げてゐる。

『本格的公定米價が意外に高値に決せられたことは農村には可なりの好印象を與へ、纏つた大量の市場目當の正米の賣物は委をかくすに至つたが、內容を點檢すると中農以上の耐久力ある階級こそ賣控へるものの、年末を控へて右から左に現金の必要に迫られてゐる小作小農としては、農會や組合の斡旋を求めて政府に賣渡したのでは現金を手に入れるまでには小一ケ月の日數を要し焦眉の急に間に合はぬ所から不利益を承知の上でやはり廉賣の跡絕たず、深川神田川正米

問屋に對し一車又は二車といふ端數の實物の買付を促しくるもの少なからず、又正米蓆値相場も公定相場より七〇—八〇錢安となつてゐる……』

小農貧農は公定價格にも拘はらず、安値で換金を急いでゐるのだ。それでは『最低價格ニ依ル賣渡ノ申込』が少ないかといふに、同月十九日正午より翌廿日正午までのまる一日間に八十二萬六千六百十五俵（三十三萬石餘）といふ驚異的な賣渡申込があり、十一月一日統制法施行後の累計は一擧に九十萬石に近づいた。その翌日の廿一日正午までには更に四十二萬石餘の申込みがあり、年内（廿八日締切）には既に二百萬石を突破し、越えて一月六日には三百萬石に垂んとし、酒田米穀事務所では倉庫充滿の理由で、賣米受付けを拒絶するといふ騒ぎである。東朝紙の云ふ通り『統制法の一六勝負は愈々本舞臺に入つた』のである。

公定最低米價の吊上げで誰れが儲けたか　ところで、この巨額の米賣渡が誰れの手で申込まれてゐるかといふに、三百萬石の賣渡米のうち、米商人の手を通じた申込米が巨大の分量を占めてゐる。これに反して本來、賣渡代行の勞をとつて農村のために活動すべき產業組合や農會の取扱數は少ない。此理由は從來組合より低資の融通を受けたまゝ、農村不況の深刻化から負債整理を遷延してゐた者に對しては、組合はその取扱に關する農民の賣渡米代金を組合に對する負債整理に充當し殘金だけを交付するため、農民は組合を利用して賣米すれば渴望する現金の受納が不可となるので、みすみす數人に賣米するの不利益を直感しながらも、從來の庭先相場で賣却をしてゐる場合が少なくないからである。

これによると、米を賣り放たなければならぬ事情の下にある、貧農、小農、借金農は、本來農業救濟のために最低價格が生產費一つぱいに吊上げられた利益を、米商や正米師に『みすみす』奪ひ取られてゐる。してみると、米穀統制法で利益を現實に受けた者は、米を賣り急がなくともよい富農や大地主と、それから『從來の庭先相場で』買つてきては政府に『最低價格に依る賣渡の申込』をして値鞘を稼ぐ米商と正米師とであると云へよう。併し富農や大地主の利益は

そればかりでない。といふのは米はやがて『統制法の威力』で後になるほど次第に昂騰したから。同時に小農貧農は彼等の窮乏事情のために單に統制法の利益を享けえなかつたといふにとゞまらない。なぜなら、彼等は統制法の保護外に安値に賣りはたかざるをえなかつた米を、後に昂騰した價格の下に飯米として買入れなければならなかつたから。そして、それは今春の繭安の事情も伴つて、彼等を遂に豐年にも飯米飢饉に生存を脅かされるといふ窮乏に突き落した。窮乏が窮乏を生むといふ生きた事實を我が小農貧農は早くも三四ヶ月後に自ら體驗せざるを得なかつたのだ。

統制法の一六勝負　一月に入つての米賣渡申込は愈々急である。廿四日には本米穀年度の買上豫定數量たる六百萬石を完全に突破し、二月廿三日には累計八百五十萬石、三月七日には九百萬石、四月十日には遂に一千萬石の大關門を突破して一千二萬石に達した。今、米穀法實施の十一月以來の一日當平均申込數量を調べてみると次の如く十二月、一月、二月當時の猛烈さがハツキリと窺はれる。

最低價格に依る米賣渡申込一日當平均石數

昭和八年十一月一日平均	一・二萬石	昭和九年　二月　〃	七・九萬石
昭和八年十二月　〃	一〇・八	昭和九年　三月　〃	三・七
昭和九年　一月　〃	一九・五	昭和九年　四月　〃	二・五

五月に入つて漸く申込はその跡を絶つたが、併しこの間においてなほ籾貯藏奬勵規則による內地籾六百萬石の貯藏が行はれ、それに內外地米季節調節買上二百萬石があり、合計四月七日の農林省發表によれば、結局、統制法實施後半年にして、封印濟の米が實に一千八百萬石に上るといふ結果になつたのである。この大量の棚上げによつて、從來出盛期の本賣として產地及び正米市場とも米價が依然落調をつゞけ、とかく統制法による公定價格と市場價格とが或る程度まで沒交渉と化してゐたのを、漸く調整することに成功し、四月初旬には東京濟算米先物も廿五圓を突破することとなり、

どうにか米穀統制法の面目を保つことができた。

2　米穀統制法の補綴

米穀統制法資金の強化　ところで一千萬石にも上る大量の米を封印するに政府は如何に之を金融したかといふに、米穀需給特別會計資金は第六十四議會で四億八千萬圓から七億圓に增額されたが、從來の米穀法運用による支出を差引くと昭和八年十一月一日現在で四億二千五百萬圓の餘力を剩してゐた。ところが、九年一月廿四日には先にも述べた如く、統制法による本米穀年度の買上豫定數六百萬石を突破し、これがために買上資金も一億四千萬圓を費やした。之に季節調節買上げの百五十萬石の分を加へれば、合計一億八千萬圓に上る。だから今後なほ二、三百萬石を買上げる必要があるとすれば、――そして實際においては尙四百五十萬石の買上げをしなければならなかつた――之に金利保管料（二千五百五十萬圓見當）を加へて、十月末の本米穀年度末までには總額三億圓以上の資金を要し、資金餘力は一億二千萬圓位に減少するものと見られ（そして三月中旬荷見米穀部長の見積りでは資金餘力は九千二、三百萬圓に減少すると云はれた）、米穀統制法資金は統制法實施後僅に一年にして早くも枯渴するといふ問題が生じてくる形勢にあつた。しかも當時にあつては一日平均の賣渡申込が廿萬石にも上り、市場相場は公定價格とは或る程度まで沒交涉化するといふ有樣であつて、統制法の威力が大いに疑問視されてゐる時にあたつて、統制法運用の資金自體に枯渴問題が憂慮されることとなつては、統制法の面目は全るつぶれである。そこで政府では意地でも米價を吊上げて、統制法の威力を示してみせると考へたか、米穀需給調節特別會計法の一部を改正して、資金七億圓を八億五千萬圓に改め、なほ『政府は必要ありと認むる時は』之を最高三億圓の範圍内において增額することを得と定め、尊氏論や五月雨演說で花を咲かせた議會でも、これに關しては一つの大きな反對の聲も聽かれず、愴惶として之を可決した（『第六十五議會とその業績』の項參照）

これで米穀統制法資金はそれ以前と較べて一擧に二倍半に膨脹することゝなつたし、政府は過剩米全部をさへ買上げてみせると意氣込むことができた。

外地米の勝利　統制法の無力については、今一つ、米穀問題の「權威者」たちの間に、外地米、特に鮮米の內地奔流の結果だとの意見が有力であつた。十年も前には朝鮮には產米增殖計畫が行はれ、當局者は巨費を投じて產米增殖に狂奔したものだが、今度は出來すぎた鮮米が內地米を壓迫するといふのだ。なるほど、九年度は臺鮮ともに豐作で、それに統制法によつて最低米價が吊上げられたから、安い臺鮮米を食つて高い內地米を政府に買上げて貰ふ者が增加したことに不思議はない。內地の勞働者は勿論、米を耕作する小農貧農が自分で作つた米は賣つて、鮮米落葉米を買つて飯米としてゐることは、何も今年に始まつたことでない。そして內地の勞農大衆が臺鮮米の消費者と化するにつれて、朝鮮の大衆の米消費は年々に減少する。

朝鮮における最近五ケ年一人當米消費

	米（石）	合計（粟、大豆、麥を含む）（石）
昭和三年	〇・五四〇	一・五九八
昭年四年	〇・四四六	一・四二二
昭和五年	〇・四五一	一・五三四
昭和六年	〇・五三五	一・五三四
昭和七年	〇・四一二	一・三八一

朝鮮に產米增殖の結果、米收穫が增加しても、それは朝鮮で消費されるよりも、內地移入の增加となつて現はれる。過去六ヶ年の臺鮮米の移入數量を示すと次の如くである。

過去六年間の臺鮮米移入數量及び價格

	朝鮮米	石當價格	臺灣米	石當價格（蓬萊米）
昭和四年度	五、三七七千石	二七・二五円	二、二五三千石	二一・二六円
五年度	五、一六七	二五・五四	二、一八五	二〇・二六
六年度	七、九九二	一六・〇八	二、六九八	一二・五〇
七年度	七、一九八	一九・四九	三、四一八	一六・七一
八年度	七、五三一	二〇・六九	四、二一六	一五・八八
九年度	三、九六五	二〇・八一	一、四五三	一六・〇五

〔備考〕昭和九年度の鮮米は三月中旬、灣米は二月までの移入量、價格については鮮米は群山、灣米は基隆におげる三等石當り相場。

九年度の移入量は三月中旬までの分であり、この向きだと、本年度の移入は見積の八百萬石を越し、九百萬石に上るだらうと見られた。内地米の賣渡申越が殺到してゐる上に、臺鮮米が内地に奔流してきては、米價の吊上げは統制法の威力をもつてしても思ひも及ばぬ。だから豪鮮米、卽ち外地米の移入を制限しなければならぬといふ意見が、帝國農會は云ふに及ばず、農林省内においても擡頭してきた。併し之には外地當局及び拓務省が絶對に反對である。玆に内地米保護主義と外地米差別取扱反對との對立が、農林省對拓務省の對立となり、一時は内閣の重大問題と化したが、結局、後藤農相の讓歩で、(一)外地米の内地移入は全く自由とす、(二)現行の米穀特別會計限度を七億圓から十一億五千萬圓に引上げ外地米買上げにより需給を整調することとなつて解決した。そして單行法として外地米買上げ法案を提出した。

外地米の問題はその移入統制又は制限の目的から出發したものであつて、現在の米穀統制法資金の運用では徒らに國費を散ずるのみだから、移入米の源泉地たる外地において適當の方策を講ずる必要があるといふにあつたが、妥協案では、移入統制の方法は講じないで、買上げによつて需給を調整するといふ逆の結論に達したわけである。だから事あれ

かしと待つてゐた代議士諸君は、『臨時米穀移入調節法』案に對して喰つてかゝつた。代議士諸君の議論の主旨はかういふ點にあつた。内地米生産費に比して外地米生産費は少なくとも石五圓見當の大割安と見做され、これが一般の常識である。現在、内地米が統制法によつて最低價格を維持されることゝなつてゐるので、外地米の内地賣は極めて有利となり、ために外地米は奔流して内地へ際限なく流入し、内地米價を壓迫する。これは内地米の保護よりもむしろ外地米の保護を意味するといふにあつた。ところが之に對して朝鮮總督は鮮米の生産費石當廿圓九十八錢と發表し、また拓務省は灣米庭先生産費十七圓二十六錢と公表し、少なくとも鮮米については内地米の生産費（農林省發表によれば廿二圓十錢）に對して、僅に一圓十七錢の開きしかないことを明にした。そして玆に「米生産費討論」が開始されたが、議會の討論の結果は、米生産費に關する『政府の發表には全く信頼できぬ』（東朝三・八）といふ代議士諸君の確認に達した。代議士諸君の政府案攻撃の内容よりも、我々はこの結論を尊重して、よく今後とも記憶しておくべきだと思ふ。

3 飯米飢饉

統制法の救濟か、農民の救濟か　さて、米穀統制法を中心に内地米價吊上げ策の擴大强化の結果は果して何か。農民は之によつて果して救濟されたであらうか。最初、本米穀年度の米穀需給事情によると千八百萬石に上り、これだけの大量の米が悉く棚上封印されたのであるから、早然るに、四月初めには政府所有米合計千八百萬石の過剩米があつた。くも内地米穀界には有ガスレの狀態が現出するに至つた。これに對して世間の意見はかうだつた、——

『米穀統制法施行により主として自作農、地主、商人等は擧つて政府への賣渡を急ぎ、殺貯藏についても奬勵金目あてに飯米まで手放して換金を急いだため昨今は必要以上に浮動米が吸收され盡した傾向にあり、新潟、秋田、北海道その他幾多の米産地においてすら飯米不足のため逆に地方的移入の珍現象が起つてゐる。

『元來、米穀政策の常として小作農、貧農は收穫前に賣放ち出盛期以後は買米する立場にあり、政府は十一月から二、

三月頃まで米價釣上のため出動するので高い米を食はされるのが常だが、今年は地主及び自作の中農階級も右の如くにして飯米まで手放したので手持飯米不足し小作農、貧農等と共に政府に對し拂下米の申請を續々寄越して來てゐるが、この調子で見れば飯米欠乏による拂下米申請は今夏にかけての重大なる問題となつてくるであらう。しかも公定價格による政府への賣渡米は依然盡きず、從つて今後の政府の米價釣上政策の恩惠を受けるものは現在米を持つてゐる大農、大地主乃至商人に限られるわけである。かくしで政府の米價政策の犠牲者は從來の小農及び貧農の範圍から今年は特に擴大して一般地主乃至中農までもいれて、全農民の大部分が含まれてくるやうになつた。米餘つて却つて品ガスレとなり、飯米に窮せんとする模樣が見えるのは由々しき問題で、政府は米穀政策を全體的な社會問題として再考すべしとの議論が有力に起つてきてゐる』(東朝九・四九)

しかし、農林當局は『米價が昂騰したとはいふものの事實は統制法の威力が今にして漸く現はれ、理想米價たる廿五圓に達したるにすぎないのであるから、生産者たる農民にとつても喜ぶべき現象である』として、むしろ『統制法の威力に滿足』してゐる有樣で、有ガスレ狀態についても、『農民が飯米に苦しみ有ガスレの狀態を現出せんとする事實がよしありとするも、それは統制法の關知する所にあらず』と見てゐる始末である。これでは農林當局の救濟の目標が米穀統制法にあつて、農民にはないと云はれても、云ひ逃れはできない。

五月になつては有ガスレ狀態は愈々濃厚となり、例へば新潟北蒲原郡一帶などでは、農家の飯米は例年の六月半ばの缺乏期に等しく、農民は早くも飯米飢饉に追ひ詰められ籾貯藏解除か、季節買上米並びに古米の拂下をしきりに待つてゐるといふやうなことも傳へられた。そして、それも待ち切れぬ貧農は、既に四月廿四、五日頃から、單俵五圓八十錢乃至六圓の卽金で、黒田を賣り飛ばし、飯米代と肥料資金に當てゝゐる悲慘な狀態も現れた。また秋田酒田米穀取引所調査によれば『五月一日現在の庄内米は民間手持米十三萬四千石、政府米化したものが五十萬三百廿七石で、著しい有ガスレ狀況を示してゐる』とある。然るに農林當局は、五月一日現在の民間在米が昨年同期に比し百十萬石見當の減少

に過ぎないのを理由に、飯米有ガスレを否認し、目下の情勢では季節調節買上米の拂下も容易に行へぬ、と稱してゐた。依然として『統制法の威力』に陶醉してゐるかの如くである。

各地の飯米飢饉の實狀　しかし、これに對しては、こゝに極めて興味ある東朝社調査の實情報告がある。それによると、次の如くである。

鳥根。籾の貯藏奬勵と米穀統制法に基く數次の政府買上げで一部大米穀商、大中地主級を除いては所有米殆んどなく、市場出廻りも品ガスレを唱つてゐる。

山形。山形縣民の三割約十万戸は毎年端境期飯米不足を告げるが、最近數年來庄内米が蓬萊米に壓迫されて端境期の米價安から飯米不足の農家も息をついたが、本年は米穀統制法の威力でヂリ高步調をたどり、地主階級は約八十四萬四千圓の增收に躍り上つてゐるが、他方、消費者は全體として十月の端境期までに既に五十五萬五千圓餘昨年より高い飯米を購入しなければならぬことになり、この打擊は相當多い見込みである。

青森。五月一日現在の同縣下農家手持米は約五十三萬石で昨年同期と殆んど大差ないが、右は大部分地主の手持であり、貧農の飯米有ガスレ狀態は昨年同期に比し一層甚だしさを加へてゐる。

長野。大地主は何れも賣り惜んでをり、中以下の農家には飯米が相當に不足してゐる模樣である。

事態かくの如くであるに拘はらず、農林當局は米價吊上げに執着して、飯米飢饉には頑固に眼を閉ぢてゐる。元來、當局が米價政策の寶刀としてゐる米穀統制法によつても、米價が最低公定價格を五分以上、上廻つたときは季節調節買上米二百萬石の拂下をなしえられ、また一割以上に上廻つたときは籾貯藏玄米換算三百萬石の解除をなしうること然なつてゐるが、當時米價は完全に五分以上に上廻つてゐたから、當局は季節買上米の拂下げをなしえたのである。然るに當局は、『當時の米價高は未だ眞の跳躍力をもたず、若干の弱材料にも直ちに騰勢を減殺される狀態であるから、今後暫くはひたむきに米價吊上げに邁進し少なくとも最低公定價格と最高公定價格との眞中に引上げるべく努力する方針——何んの目的かはついぞ分らないが——だ』といふのである。また貯藏籾については、昨冬來醉を大にして地方農民から

手持籾を騙り集めて、『最低公定價格を一割以上、上廻つたときは解除に應ずる』といふ契約で政府の米價引上策に參加協力せしめたのであるから、もし最近のうちに米價が昂騰すれば、政治的道德的立場からしてもまづ最初に籾貯藏契約の農民に貯藏解除の恩典を施してやるべきであり、それ以前には季節調節買上米の拂下の如きは絕對に行ふべきでないとの建前であるといふのである。これでは窮乏農家は全く助からぬ。

折柄六月廿一日、正米標準中米が淀川廿五圓六十錢、神田川廿五圓八十錢と、今や完全に統制法施行令に云ふ米價（第十二條）が最低公定米價の一割上値に到達したとき、農林省に恐るべき情報が舞ひ込んだ。『福島縣某所で農民が飯米飢饉のため籾貯藏の……があつたとの說が行はれ、また秋田縣……では村の顏役數名が同じく飯米飢饉のため……貯藏籾をかつぎ出した』（東朝、九・六・二二）といふ悲しむべき情報である。かねて世上で深く憂慮されてゐた事實が突發したわけであるが、飯米飢饉の說を否定する建前にあつただけに農林當局の驚愕は大きかつた。この情報の眞僞は判明しないが、とにかくこれは一大警鐘であつた。

ところが、六月廿六日に朝鮮總督府が『飯米飢饉を見るに忍びず』として單獨で籾貯藏の一部解除を發表した。これで農林當局の方針にも轉換が生じた。六月卅日には流石に頑固であつた當局も、『飯米飢饉の救濟のため』解除申請に應じ順次に査定を行ふ方針に一變し、七月一日から實施することゝなつた。

4 繭安米價

アメリカの景氣に弄ばれる蠶糸業　繭價は糸價によつて定まる。ところが糸價はアメリカの景氣で左右されるので、毎年眼まぐるしいほどの動きだ。昭和八年について見ても、年初九二五圓に生れた現物標準糸價は三月のアメリカ恐慌で忽ち六三〇圓に陷沒したが、恐慌後にはアメリカ・インフレ景氣を織込んで忽ち回復した。この糸高から沼津初繭取

引は豫想外の高値に爆發し、六月には糸價一〇九〇圓、繭價は一貫目七圓に鰻上り、この春繭高で農村は實に一億八千萬圓の增收となつた。七年の春繭貫二圓五十錢に比し、『隔世の感』があるといふ好景氣。ところが、六月天井を衝いた糸價はその後の惡材料にヂリ安を示したが、十月中のアメリカ消費が二萬五千俵といふ大正十三年來の最低記錄を示したのを眺めて、低落は加速度を加へ、十一月には五一〇圓臺に激落。蠶絲業における『昨日の喜悅は今日の悲涙と變る』有樣となつた。全國製絲業組合聯合會緊急評議員會では自發的操短を可決し、十二月一日から昭和九年三月末まで長野外十四縣は全休を決議。かくて八年歲末にかけて『女工列車がうらぶれた歸農女工を故鄕に運んだ』

第六十五議會と製糸業の統制　かういふ狀態では蠶者は勿論製絲家も安心してゐられない。だから、蠶絲業統制の要望はいつも議會會期中はなかなか熾んであるが、六十五議會は二つの點において蠶絲業統制へ一歩を進めた（『第六十五議會とその業績』の項參照）。

（一）原蠶種國家管理法。骨子は昭和九年から準備に着手し、昭和十三年度から完全な國家管理に入り、現在の六〇〇餘種に上る蠶品種を優良一〇種類程度に整理し、先づ國家で原々蠶種を製造、之を道府縣に配布し、道府縣は之によつて原種を作つて一般に配布する。但し一〇の中三は農林大臣の許可を得たる設備適當なる民間原蠶種製造業者に原種製造を委すといふにある。この統制は養蠶家（優良品の多收穫による生産費の低下）にも製絲家（製絲能率の向上、絲質の均一の利益）にも利益であり、その利益は概算年一億圓に上ると云はれる。が、それはとにかくこれは昭和十三年度から本格的に實施されるので現在の問題ではない。

（二）輸出生絲取引法。政府原案では（イ）輸出生絲問屋の免許制度、（ロ）輸出生絲販賣統制機關の設置、（ハ）輸出生絲取引登錄制度の三項目からなつてゐたが、輸出生絲販賣統制審査會にかけられるや輸出商及び問屋筋からの反對を喰ひ、結局、骨拔案となり、名稱も輸出生絲販賣統制法から輸出生絲取引法と變つた。取引法の骨子は、次の三點にある。

(イ)輸出生絲問屋の免許制度。免許資格は一ヶ年の取引數量五〇〇〇俵以上たること及び流動資金二〇萬圓程度以上たること。これによつて現在の神戸横濱の生絲問屋の八〇%は失格する。但し現在營業の問屋は向ふ五ヶ年間免許を受けたものと見做される。その後は免許資格を具へなければ失格する。之によつて群小問屋を整理し不當の賣急ぎ、不正の取引を廢せしめようといふのである。

(ロ)輸出生絲登錄制度。製絲業者の委託を受けた輸出生絲問屋と輸出商との間に行はれる取引内容を公明にする爲に、公の機關において輸出生絲につき賣買取引當事者又は輸出をなす者に生絲の内容及び賣買價格等を登錄せしめる。

(ハ)主務大臣が輸出生絲販賣統制上必要なる命令又は處分をなしうること。

以上二法律が第六十五議會がなした蠶絲業統制の業績である。製絲業者には幾分の利益はあらうが、さしあたつて養蠶農家には大した利益はない。

掃立制限の提唱　いよいよ春蠶掃立の時期が近づくにつれて、既に春繭價についての無氣味な不安が漂ひはじめた。生絲出荷三割制限の聲にも拘はらず、事實上においては制限はあつてなきに等しく、絲價は早くも五〇〇圓臺割れを演じ、七年六月以來（補償糸賣出直後の安値以來）の安値に落ち込むといふ不安人氣。この絲價からすれば春蠶相場は三圓揃みとなり、八年の春繭に對して丁度半値、養蠶農家の收入は一億五千萬圓の減收となると見られた。そこで政府は乾繭共同保管奬勵として、短期七〇〇萬貫、長期八〇〇萬貫、合計一五〇〇萬貫に對し二六五萬圓を助成金として交附すること丶し（第六十五議會で協賛）、繭價三圓五〇錢以下のときは發動し、四圓五〇錢以上となれば停止すること丶定め、繭價引上策の準備にとりかゝる一方、地方長官を通じて一般養蠶家の自覺によつて自發的に今春蠶及び夏秋蠶の掃立制限を勸奬した。併しこの養蠶家の自覺による自發的掃立制限は、全國養蠶組合聯合會から次の三點によつて反對された。

(一)桑園は米麥作と異つて永年作物であり、しかも自然の狀況によつて收穫が增減する。

(二)我國農家の勞力は極めて零細であり、しかも古來勤勞主義に訓致されてゐる。從つて代るべき仕事を與へずして、

その勞作に制肘を加へんとするは、事實上不可能である。

(三)二百萬養蠶大衆には未だ完全な統制がない。從つて現在のまゝの組織では統制の實績を擧げることができない。

そしてかへつて『強力な國家權力の發動によつて補償の方法を講ぜよ』と要求した。事實、蠶業地を巡る新聞記者の報告によると、群馬では掃立三分減とは云はれるものの、蠶種屋は曰く『今年ほど種の出る年は珍しい』と、又老農は曰く『繭が安い年に減らしてたまるかい。桑があるだけ掃いてみるだ。去年の春だつて後から値が出たでねえか』と。

惨落する繭價　待たれた沼津の初繭市場が開いてみると、やはり期待した以上の惨たる相場だ。御祝儀相場が「なれ」で白繭二圓九二錢、黄繭二圓六六錢。これは豫想外の惨澹たる安値だ。今、最高相場について昨年と比較すると、

	本年（九年）	昨年（八年）
白繭	三・〇九円	五・五七円
黄繭	三・二六	五・四一

否、御祝儀相場に二圓の買叩きが現はれる有樣で、いくら低く踏んでも、右の相場では繭生產費を完全に一圓以上割るものと推算された。ところでこの繭生產費である。これがまた頗る奇妙にできてゐる。生產費の中、桑代が四〇%、勞賃が三五%見當であるから、養蠶家の實際を覗いてみると、現金支出は平均一圓二〇錢程度、福島あたりでは、五、六十錢にまで切つめた實例さへある。そこを狙つて製糸資本家から、飢餓勞働に馴らされてゐる農家は足許を見られて、現金支出をカバーする程度までを目標に繭價を叩かれて、しかもなほ彼等は生產費割れの繭安にも養蠶をやめることができないのである。

繭恐怪は深化してゆく　かくて白繭廿四掛、黄繭廿二掛の安値に始まつた春繭の取引は一時やゝ引戻したが、外電の不良を入れて糸價の下押すと共に各地の繭取引相場は一齊にます〳〵惡化し、各地とも殆んど十八、九掛に崩落、廿掛樂を保つ市場は數ふるにすぎぬ有樣となり、加ふるに六月十四日には糸價は遂に各限とも五〇〇圓の大關門を割る新

安値に崩れたため春繭相場の前途は一層暗澹となつた。たとへ今後繭價が持直して廿掛臺に戻しても糸量平均十二匁五分とすれば、貫當り二圓五〇錢からみとなり、之を昨年春繭六圓二四錢平均値と比較すればなほ三圓六四錢の安値である。今、春繭の收穫を昨年同樣五千萬貫と掬へれば、本年春繭による農家（全國養蠶家二〇〇萬戸）の收入は昨年（八年）に比し一億八千萬圓の大減收となり、繭販賣を主要なる現金收入とし且つ之によつて飯米を購入すべき立場にある養蠶家は次第に重大な危機に直面するに至つた。この危機が米高によつて、一層切迫した姿をとるに至つたことは、こゝに指摘するまでもない。

借金モラの種類　農村、特に養蠶地方における窮迫はまた農村負債整理の成行にもハッキリと現はれ始めた。勸銀、農銀、その他地方銀行の不動産融資、養蠶資金の借出、匡救的諸貸出は昭和七年下期から八年上期にかけて相當良好の回收率を示し、中間據置設定や償還期限の延長による年賦金の減額等により大體農村負債整理の正常な軌道に乘つてきた觀があつたが、八年下期から今年上期にかけて、この形勢は漸く變調を告げ、この下期に入つては、この傾向は益々顯著となり、下期の回收は一段と惡化しはじめた。この理由はかうである。『農村諸融資回收の良否は大體、蠶價、米價及び政府の匡救資金の散布狀況の如何にかゝる。昭和七年下期から八年上期に回收成績がよかつたのは繭高のためで、その後漸次惡化したのは八年の夏秋蠶から繭價が低落を始め、今春繭が特に崩落し農村の收入狀態が極端に窮迫してきたからである。』そして實際、かゝる窮迫は再び長野、山梨等の養蠶地帶を中心として窮狀打開のために借金モラトリアムの要求を叫ばしめるに至つた。併しこの要求には當てのものとは異る性質が含まれてゐた。當てのものが小作組合、農民組合の思想的主唱者によつて指導されてゐたのと異り、大體、市町村議員等自治體の中心勢力が主動分子となつてゐる模樣であるだけに問題が深刻な切實味をもつものとして成行を注目されてゐる（東朝、九・八・一六）

5　窮乏農村の集中的表現

九州の旱害、近畿の風水害、東北の冷害　米高繭安による挾擊的重壓に今や農村恐慌は新な段階へと急速に進みつゝあるところへ、更に東北北陸の雪害、九州の旱害、北陸の水害、近畿の風水害、東北の冷害が加はつた。就中、東北の凶作は窮乏農村にいよいよ文字通りの……を現出せしめたもので、特派員の報道によつてみても、今では翠、稗はもちろん樣の實、蕨の根を食ひつくし、人間が鼠や雞の飼料で辛うじて露命を繋ぎ、家財や牛馬はとつくの前に手放し、今では最愛の娘をさへ金にかへなければ飢を凌ぐことができぬといふ悲慘事が至るところで見うけられるといふ。確に東北凶作地は本年度における農村恐慌の發展の頂上を示すものであつて、農村における矛盾と窮乏とは茲にその集中的表現を見出してゐる。東北の窮乏を單に凶作に歸し、凶作を單に自然的冷害や、播種や施肥に關する農民の無知に歸するが如きは、東北の凶作による窮乏あるをのみ見て、……が全日本の農村に通じてゐることを故意か無意識かとにかく之を見落してゐるものだ。

本年度における我國農村經濟の總決算　このことは、茲に本年度における農村經濟の總決算として示さうと思ふ農林省發表（十月五日）の次の數字が之を自ら擧證してゐる。

各地農村被害狀況

旱害	一四〇（百萬円）	春蠶減收	一八〇（百萬円）
北陸水害	三四	夏秋蠶減收	九〇
東北水害	五		
東北冷害	九〇	計	二七〇
關西方面風水害	二五〇		
計	五二九	總計	七九九

即ち農村は合計約八億圓の收入減をみたことが分かる。疑ひもなく、この數字は過少評價である。併し八年度の全國農家收入が二七億圓であつたこと（砂田代議士の推算）を思ひ合はせば、これだけの收入減でさへ、既に約三割の大減收となる。八年度においてさへ農家收支狀態が八億五千七百萬圓の赤字（同上）を示してゐたことからして、農家の窮乏を窺ふことができるが、その窮乏の上に更に平均して三割の減收が加はるのだ。それも決して平等に分散されないで、米高において現はれてゐる如く、窮乏の小貧農の上にはより加重されて落ちるから、窮迫の上に一層の窮迫が重ねられることを知らねばならぬ。今、內務省が救農土木事業を行ふに當つて因作地及び饑饉地方における「要救濟」農家戶數を調査した結果を見るに、次の如く總數七十六萬戶に達してゐる。

要救濟農家戶數

旱害地方（九州、愛媛、香川）	二二六、一八一戶
因作地方	一一九、九四一戶
饑饉地方（山梨、群馬、長野、埼玉、愛知、三重、岐阜、滋賀、島根等）	四一二、九二六戶
合　計	七五九、〇四八戶

こゝに「要救濟」農家と云はれてゐるのは、『減收五割以上の農家』を指すのであるから、七六萬戶の數は、如何にその背後に尨大な窮迫農家數が押しかけてゐるかを暗示してゐる。しかるとき昭和九年の產米は第二次豫想では五千萬石危しと見られ、明治四十三年後の大因作と見られてゐる。七千萬石の豐年において窮乏に窮乏を重ねた我が農民は、來る十年度においてこの因作をもつて如何なる段階に置かれるであらうか。東北因作農民の現實の苦惱が、やがてまた三四ヶ月後の……の來るべき形相であると云ふものがある。或はさうかもしれぬ。少なくとも飢米飢餓が……に且つ著しく早期に……を蔽ふであらうことは殆んど確實であるといつてよいであらう。

十四　勞働者・農民の狀態とその運動

1　就業者の增加

昭和九年の經濟界は、輸出はなほ增加し、生產は益々增大しつゞけてきたのだから、その限りでは、勤勞大衆に對して有利な結果を齎らした點があることは疑ひない。すなはち勞働者就業人員の增加がその著しい現はれである。これを日本銀行の就業統計によつてみれば、第一表の如く、就業者數の增加は昭和九年を通じて前年度より益々好轉の傾向を示し、月毎にひたすら增大の一途を辿つた。八月の九二・一は昭和二年平均（九四・八）に次ぐ高位である。

男工の就業增加が著しい　この增加大勢を男女別、事業別についてみると、勞働者の狀態にも現在の景氣の性質が如何に反映してゐるかゞ判る。

第一表　就業者指數
（日銀調、大正十五年平均、100

昭和 5.（平均）		82.0
6.（〃）		74.5
7.（〃）		74.7
8.（〃）		81.9
8.	1	77.4
	2	78.5
	3	79.5
	4	81.1
	5	81.5
	6	81.6
	7	82.0
	8	82.3
	9	83.5
	10	84.3
	11	85.2
	12	85.8
9.	1	86.2
	2	86.7
	3	87.8
	4	90.5
	5	91.0
	6	91.2
	7	91.6
	8	92.1

第二表はこれを示したものだが、九年一—八月平均の總指數は八年に對して七・七點の增大となつてゐる。だが、男工のみをとれば八年に對し九・六點、女工については六・一點といふ增大割合に

なつてゐる。現在の勞働需要が男工の方に強く向つてゐるのが明瞭であらう。

特に勞働者數の增大した産業　更に事業別にみると、八年に比べて就業數の減少したのは第二表中製糸業あるのみ。その他のうち、增加の著るしいのは機械製造、器具製造、製藥金屬品製造、染色整理の諸部門であり、金本位停止前の昭和四年に對しても、ゴム製品、車輛製造、製藥、器具製造、機械製造等は相當著しい就業增加をみてゐる。これらの部門は軍需工業か輸出工業かの何れかである以上、當然の現象といふべきだらう。

第二表　勞働人員指數

（日銀調、大正十五年平均 100）

	9年1—8月平均	對昭和4年增減	對昭和8年增減
總指數	89.6	＝ 1.5	＋ 7.7
男	96.6	－ 2.0	＋ 9.6
女	82.9	－ 0.9	＋ 6.1
製糸	60.7	－33.9	－ 1.1
紡績	68.3	－14.0	＋ 3.8
織物	75.1	－ 5.6	＋ 3.1
染色整理	102.2	＋ 2.7	＋11.7
組物編物	88.6	＋ 9.0	＋ 7.4
機械製造	163.8	＋12.0	＋30.2
船舶製造	89.2	＋24.3	＋ 4.0
車輛製造	102.0	＋19.8	＋ 1.5
器具製造	124.7	＋17.2	＋24.2
金屬品製造	114.3	＋ 6.8	＋13.8
窯業	80.8	－11.7	＋ 7.6
製紙	79.9	－10.7	＋ 4.4
製藥	121.9	＋19.2	＋15.4
ゴム製品	148.3	＋29.8	＋ 1.6
人造肥料	81.8	－ 4.6	＋ 5.6
飲食物工業	83.6	－ 3.1	＋ 2.1
印刷製本	94.8	－ 5.7	＋ 1.5
製材家具	75.5	－13.9	＋ 0.9

就業減少の産業部門　これに反し、昭和四年に比べて就業數をかなり著しく減少したものに、製糸をはじめ、船舶製造、紡績、製材家具、窯業、製紙等がある。このうち造船および紡績の減少は事業界の趨勢に反するかの如くであるけれども、前者は昭和四、五年に稀有の好況にあつた部門であり、後者においては特に合理化の進展著しきことに由來するものと思はれる。

二年間の勞働者增加數八十三萬人　かうした就業增大の傾向は內務省社會局の失業者推定數（極めて信憑しがたい統計であるが）にも現はれてゐるし、更に注意すべきものとしては、半年毎に社會局から發表される『工場鑛山等勞働者數調』（昭和九年六月末現在）の結果がある。（第三表參照）。これによると、昭和九年六月末の勞働者總數は五百四十四萬九千といふ最高數で、最近二年間の增加八十三萬人に達した。この增加はやはり陸海軍需工廠を主とする官營工場にはじまり、また男女別にみても八十三萬人のうち約七十萬人は男工增加の分である。今回の增加が男工を主要勞力とする軍需工業ないし化學工業に集中され、婦人勞働の優勢な纖維部門に少かつたことが推測されよう。

第三表　就業勞働者總數（內務省社會局調、單位千人）

	昭和6年12月	昭和7年6月	昭和8年6月	昭和9年6月	7年6月對比增加
官營	94	123	141	141	18
公營	12	12	13	19	7
民營	1,892	1,842	1,987	2,189	347
工場勞働者合計	2,026	1,977	2,141	2,349	372
鑛山	196	188	195	241	53
運輸交通通信	507	512	538	522	10
日傭其他	1,942	1,943	2,009	2,337	394
總計	4,670	4,620	4,882	5,449	829

新産業地帶の勃興　勞働者數からのみ推斷することはやゝ性急にすぎる處れがないでもないが、同じ統計から今度の景氣が如何なる工業地帶に最も強く刺戟したかを窺ふことができる。次のごとし。

京濱地方が阪神地方より增加の大きかつたことは注目に値ひする。恐らくそれは京濱地方には纖維工業より重工業、化學工業の密集せるためと橫須賀海軍工廠の擴張が原因であり、阪神は我國重工業の中樞ではあるが、紡績、製絲が同地方に多く、その減員が多少なりとも全體の增勢を緩和させたのであらう。吳工廠、八幡製鐵所、小倉工廠等を擁する中國九州地帶の增加も著しく、裏日本方面も人絹を筆頭として新工業地帶

たる擡頭ぶりを示した。製絲地帶の停頓ぶりは當然としても、名古屋地方の減少は意外といはねばならぬ。これも繊維工業、窯業等の合理化が影響したのであらうか。かうしてみると、軍需工業に比べて、輸出工業の躍進は勞働者就業數の増加には比較的惠ぐむこと少かつたと考へられる。

地方別工場勞働者數の增減

	七年六月	九年六月	比較增(△減)
京濱地方(東京、神奈川、埼玉)	三六九、〇二七	四八九、六二七	一二〇、六〇〇
阪神地方(大阪、兵庫、京都)	四八〇、一二七	五五九、五八九	七九、四六二
中國、九州地方(廣島、山口、福岡)	一四六、六四一	二〇〇、六〇一	五三、九六〇
寒日本工業地方(福井、石川、富山)	八一、六六一	一〇一、五八六	一九、九二六
製絲地帶(長野、山梨、群馬)	一三七、四四八	一三七、五六五	一一七
三名古屋地方(愛知、重、岐阜)	二六一、一〇六	二四六、七三三	△一四、三七三

2 賃銀の動きと臨時工問題

第四表 定額賃金指數

日銀調、大正十五年平均 100)

昭和 5,	(平均)	96,2
6,	(〃)	91,3
7,	(〃)	88,1
8,	(〃)	85,1
8,	1	86,5
	2	86,3
	3	86,0
	4	85,5
	5	85,2
	6	85,1
	7	85,0
	8	84,9
	9	84,7
	10	84,5
	11	84,0
	12	83,9
9,	1	84,1
	2	83,7
	3	83,5
	4	83,0
	5	82,8
	6	82,7
	7	82,8
	8	82,7

就業數の增加　はたしかに勞働者の狀態の好轉を思はせるものがあるが、その反面にはこれを打消させるやうな事實が決して少くないのである。

賃銀はさらに低落した　まづ第一に名目賃銀——日銀統計では定額賃銀——は、累年低下のあとをうけて、昭和九年にも殆んど月々下落しつゞけた。九年八月の指數は八二・七といふ低さである。第五表のごとく昭和九年一—八月平均の總指數を四年のそれと比較すれば、一五・四點の低落となつてゐる。この同じ期間に、男工では一二・四、女工では一九・二といふ激減であり、產業部門別にみても例外なく一般的に低落した。特にその著しい部門としては、製絲、紡績、組物編物、製紙、織物、製材、家具等があげられる。女工が大多數を占める我國繊維工業の主要部門において、如何に輸出全盛の最中でさへ賃銀のみは低下しつゞけてきたかを示して餘りあるといへよう。

第五表 定額賃銀指數

(日銀調、大正十五年平均 100)

	昭和9年1-8月平均	對昭和4年增減	對8年增減
總指數	83,2	−15,4	− 1,9
男	84,3	−12,4	− 1,9
女	78,2	−19,2	− 1,7
製絲	59,9	−34,4	− 1,4
紡績	68,4	−30,7	− 1,7
織物	71,7	−23,7	+ 0,1
染色整理	83,8	−13,0	− 1,8
組物編物	73,2	−24,7	− 2,1
機械製造	81,8	−16,3	− 3,9
船舶製造	89,9	−11,0	− 2,1
車輛製造	81,6	−15,4	− 4,7
器具製造	82,0	− 6,2	− 3,3
金屬製品製造	86,9	−13,5	− 1,2
窯業	84,6	−13,9	− 1,4
製紙	79,0	−21,8	−12,3
製藥	90,4	−10,7	− 2,8
ゴム製品	82,7	−14,2	− 1,6
人造肥料	99,0	− 4,6	−
飲食物工業	91,8	− 3,8	− 1,8
印刷製本	81,4	−14,3	− 1,6
製材家具	76,4	−21,7	− 1,7

就業增加と賃銀低下の背反　軍需インフレ、輸出景氣の漸やく全面化しはじめた昭和八年と比べても、九年八月までの平均賃銀は減少してゐる。各部門のうち、繊物業における僅かな增加を唯一の例外として、一樣に賃銀は低下し、殊に製紙、車輛製造、器具製造、等では相當著しいものがある。かうした事實を前述の就業數增加の傾向と對照させてみると、一面には從來我が國の失業軍がどんなに大量だつたかといふこと、從つてまた他面には就業

數の增加となつて現はれた新採用勞働者は勿論、一般既就業者の狀態も、必らずしも景氣の上昇に惠まれなかつたことが推定されよう。日本銀行の實收賃銀指數だけは、昭和九年三月まで前年夏頃から多少の續騰を示してきた。尤もその後は停頓ないし低落氣味となつてゐるがそれでも昭和八年平均と比べれば、九年八月までの平均實收賃銀指數は極めて僅かながら（一・五ポイント）騰貴してゐる。この實收賃銀は『各工場ノ月中賃金支拂高ノ合計ヲ職工出勤日數累計ノ合計ニテ除シタル日額』であるから、昭和九年における生產增大と就業增加とを想ひ合せればこの位の勞働者實收額の增加はむしろ意外だといはねばなるまい。然るに次頁の第七表でも判る通り、機械製造、器具製造、車輛製造等の最近繁榮しつゝある諸工業でさへ實收賃銀は却つて低落した。況んや就業者減員を伴ひつゝ輸出の躍進をみた纖維工業では、實收賃銀の水準は定額賃銀以上に惡化してゐる。賃銀からみた勞働者の狀態は昭和九年において決して好化したとはいはれないのである。

第六表　實收賃銀指數
（日銀調、大正十五年平均、100）

昭和 5,	（平均）	98,7
6,	（〃）	90,7
7,	（〃）	88,1
8,	（〃）	89,2
8,	1	89,5
	2	91,0
	3	91,6
	4	88,5
	5	88,1
	6	88,4
	7	87,4
	8	87,0
	9	88,6
	10	89,2
	11	89,5
	12	91,6
	1	87,8
	2	92,9
	3	94,0
	4	90,7
	5	90,7
	6	90,5
	7	89,6
	8	89,7

臨時工の狀態　なぜ就業狀態は好轉したのに賃銀はよくならなかつたか。これに答へるには、『農村の窮乏と相俟つて、いかに新規採用の勞働者が臨時工といふ名の下に低賃銀・長時間の條件で働らかされ、軍需工業ないし輸出品工業における增產の大部分を生み出したかを留意すれば足りるであらう。（『貿易狀態とソシャル・ダンピング』の項および『輸出品產業と軍需工業』の項參照。）

そのことは、數字等をとつて事態を確かめるといふわけにはいかないが、例へば次の、勞働總同盟系の『勞働經濟』誌、昭和九年四月號所載の『軍需工場の景氣と勞働問題』座談會の記事によつても、充分に窺ふことができる。そこでは多くの從業員は語つてゐる——。

第七表　實收賃銀指數
（日銀調、大正十五年平均100）

	昭和9年1-8月平均	對昭和4年增減	對昭和8年增減
總指數	90,7	−13,2	+ 1,5
男	95,8	− 6,8	+ 0,7
女	67,1	−29,3	− 1,3
製絲	60,5	−33,7	− 1,2
紡績	61,1	−29,3	− 0,4
織物	66,1	−35,3	− 1,4
染色整理	81,2	−14,1	− 2,1
組物編物	68,1	−25,3	− 2,1
機械製造	96,1	− 6,2	− 4,5
船舶製造	97,7	− 3,9	+ 0,6
車輛製造	88,1	− 8,5	− 3,0
器具製造	85,2	−12,2	− 4,2
金屬品製造	97,3	− 6,4	+ 6,0
窯業	81,6	−17,2	− 2,0
製紙	91,8	−10,7	− 0,6
製藥	78,1	−23,5	− 4,6
ゴム製品	85,1	−19,5	− 1,2
人造肥料	94,9	− 6,8	+ 0,5
飲食物工業	92,6	− 9,1	+ 0,1
印刷製本	89,8	− 9,7	+ 1,3
製材家具	72,1	−24,4	+ 1,1

【東京瓦斯電氣從業員立川氏】　この頃は特殊の仕事で一寸忙がしい。しかも單價は去年一圓三十錢だつたものが、一圓位に下りました。今尙下る傾向にあります。勞働時間は十二時間乃至十三時間です。臨時工は割の良い仕事がないから、收入が少いのです。私の工場の全從業員は約三千人ですが、その中約二千人が臨時工です。賃銀制度は大概請取で日給は一時間二十錢から二十五錢で、一日二圓の日給は良い方です。

【日本電氣從業員中野氏】　注目すべきことは女工の深夜業です。夜九時までもやらせてゐます。收入は本職工なら一ヶ月百五六十圓、二百圓前後です。本職工の下と雖も百圓を下ることはありません。ところが、臨時工は慘めで、請取

でなく全部日給です。それも一圓八十錢もやるところを、一圓三十錢位にしておいて、後は恩に着せて歩をやるのです。勞働時間は十二時間のうち、休憩時間を除いて正味十一時間です。そのうち八時間が定時間で殘業になれば三分の歩がつきます。臨時工は時間は普通並に働かされて、收入は精々六十圓位のものです。女工でも請負でやつてゐる者は一ヶ月百圓以上のものがあります。單價は一定の仕事に對する確定單價は下げはしませんが、それは古く定められたのですから、今日は安くて引合ひません。

従業員は全部で千五六百人ですが、そのうち八百人は臨時工です。去年は臨時の又臨時つまり人夫の名目で大分入れたが、人夫にも機械を扱はせます。ところが、不熟練なものだから、臨時工が今年に入つて三人も指をやられてゐます。人夫から臨時工になるにはメンタルテストがあり更に臨時工から本職工になるのにも矢張りメンタルテストがあるのだから、本職工にはなかなかなれません。人夫名義の者が二百人もゐます。之等は親方が入れて、頭を刎ねてゐます。

【日本鋼管従業員佐藤氏】 従業員が全體で三千人。そのうち本職工は二千四百人位、後は全部人夫名義による臨時工です。人夫は親方が入れるのですが、その親方に又親方があるといふ風で、二段三段に頭を刎ねられます。それで會社は一人に付一圓八十錢位の日給を出すのですが、人夫が貰ふのは一時間十錢位です。一日十時間働いても一圓になるかならないかです。（註。この前に――『本職工の一ヶ月の收入は低いのが七十圓、多い人は二百圓以上にもなります』といふ話あり）。それも毎日仕事があるといふ譯ではない。會社では必要なだけその朝傳票を出すので、之に有り付かうと、競爭で朝早く出掛ける。

【池貝鐵工従業員三田村氏】 私の方は人夫はゐません。その代り本工二百六十名のところ、臨時工が二百八十名もゐます。臨時工は三ヶ月乃至六ヶ月で契約を切替へます。運が良ければ何回目かの切替へのときに本工になれますが、それは僅かのものです。

これらの斷片的な言葉を通じても、繁榮を誇る代表的軍需工場の勞働者にもピンからキリまであり、しかも「キリ」の方がなかなか少くないことが明瞭である。

生計費の昂騰　前にのべた如く、定額賃銀は低落し、實收賃銀の騰貴も極めて僅かであるのに對して、勞働者所得の購買力――實質賃銀はむしろ收縮氣味であつたから、この方面からも勞働者の狀態は惡化こそすれ、決して改善されたとはいひ難いであらう。これは種々の計數について推測される。こゝに一々數字を並べることは煩を恐れて避けるが、消費財物價、小賣物價が昭和八年夏以來ヂリヂリと騰勢をとつてきたことは事實である。殊に九年夏以後、凶作饑饉の喧傳されるにつれ、米價の騰貴著しく、少からぬ影響を與へた。朝日新聞社調査の全國生計費指數によつてみても、八年秋から九年秋にいたるまで上騰の一途を辿つてきた。九年九月の指數一七六・四は前年同期の一六八、前々年同期の一六三・五に比べて、かなり著しい騰貴である。

3　勞働爭議の新傾向

昭和九年經濟界の情勢、勞働者の狀態はまた當然に勞働爭議の上にもその反映を現はしてゐる。

爭議の件數、規模は減少した　内務省社會局の發表にかゝる『昭和九年上半期における勞働爭議の概況』によつて最近の狀態を考察してみよう。爭議の發生件數および參加人員は第八表の示す如く共に昭和六年を最高として逐年遞減の傾向にある。九年上半期には八二一件の發生をみたが、前年同期に比べて更に二二件の減少であつた。參加人員も九年上半期の總數四三、九六四人で、平均一件につき五三人强が參加した割合となる。これを八年同期の六三人、七年の五一人と對比すれば固より若干の消長はあるが、昭和三年の一〇六人、同四年の一二六人等に比べれば多大の開きのあることは明らかで、いはゆる爭議の規模が著しく縮少したことを示してゐる。かうした傾向に對して社會局は次のやう

第八表　上半期勞働爭議

	爭議件數	參加人員	一件當リ參加人員
	件	人	人
昭和1	489	35,236	72
2	562	47,012	84
3	371	39,217	106
4	485	61,267	126
5	728	76,791	105
6	1,079	84,344	78
7	944	48,366	51
8	843	53,247	63
9	821	43,964	54

る。第九表の示す如く、昭和七年上半期で特に要求されたのは、解雇反對又は解雇者の復職を筆頭として、賃銀增額、解雇退職手當の確立又は增額、賃銀減額反對、賃銀支拂の順序だつた。これは賃銀增額の一五二件をのぞけばすべて消極的要求である。然るに、九年上半期には賃銀增額要求が二一九件で總數の二六・六%を占め、之に反して減額反對は僅かに三五件、四・二%にすぎない。この現象は八年からの傾向で、七年上半期（增額一六%、減額反對一五%）に比して著しい變化といはなければならぬ。この外、時間短縮、組合權の確認、工場設備又は福利增進、監督者の排斥などの積極的要求も增大してをり、前記の賃銀增額要求と合せて總數の三三%に達してゐる。消極的要求と目されるものは總數の五三%を占め、この双方とも昭和七年同期の夫々一八%および七三%に對比すれば、大きな變化である。たゞ八年（三九%および四二%）に比較すると、九年度には積極的要求の減少、消極的要求の增加をやゝ認められる。これは工業繁榮のやゝ停頓したのを早くも反映するものだらうか。だが、注目すべきことは、恐らく臨時工の劣惡な勞働條件な解釋を與へてゐる。『要するに過去數年に亘る深刻な經濟界の不況と之に隨伴する失業者群の增大とは勞働條件の維持改善のための運動には適しなかつたと解されてゐる。一面滿洲事變を契機として我國最近の社會情勢は著しく變動し所謂日本主義乃至國家社會主義の勃興となり之等が爭議に對して直接間接に相當影響を及ぼしたことも看過できないことであらう。』（『勞働時報』、昭和九年七月號、二〇頁）

爭議の要求原因の推移　しかし、爭議の要求事項を分類してみると多少ながら景氣の昂進を反映したかの動きを認めることができる。

第九表　要求事項別爭議件數

	昭和7年上半期	昭和8年上半期	昭和9年上半期
賃銀增額	152	289	219
賃銀減額反對	137	54	35
賃銀算定支給方法變更又は反對	31	45	57
勞働時間短縮	28	13	18
公休日の設定	2	3	–
作業方法規則の變更又は反對	4	13	11
組合の自由又は確認	1	2	2
工場設備其他福利增進の施設	1	3	6
解雇退職手當の確立又は增額	146	104	135
監督者の排斥	9	15	18
賃銀支拂	122	73	93
休業反對	45	19	16
休業手當の支給又は增額	21	11	11
解雇反對又は解雇者の復職	220	151	148
雜	47	48	52

別世人の注目を惹くやうな大爭議はなく、強いて擧げれば土肥金山、大阪タクシー、ライジングサン及びスタンダード石油、ジエネラル・モーターズ等の爭議などであつた。比較的規模の大きかつたものとしては、神戸ダンロップ極東會社、東京乘合自動者會社の爭議である。所が、下半期に入つて大阪機械工作所と東京市電との二つの注目すべき大爭議が起つた。前者は兵器・紡績機械等の製造に當る代表的軍需工場の爭議として注目すべき點が少くなかつた。爭議は臨時工の解雇に端を發して、臨時工勞働條件の改善を主體に七月上旬から六十三日間に亘つて繼續された。その間、職工を反映するものとして、時間短縮、賃銀支拂方法、解雇手當、等に關する要求が九年度において更に增加しつゝあることである。

軍需工業に爭議多し　爭議の業態別をみると、飲食物製造、鑛業、瓦斯電氣、土木建築以外では概して減少した。だが、七年上期には、染織、雜工業、機械器具製造、化學、運輸の諸部門に最も爭議が多かつたのが、八年から變化して、九年上半期には機械器具製造および化學工業が最高であり、次いで染織工業、雜工業の順序であつた。

大阪機械工作所爭議と東京市電罷業　以上の統計の包括する昭和九年上半期には格

七六〇名の六一日間に及ぶ高野山籠城があり、これに對する極右の國粋諸團體による爭議排擊粉碎行動は極めて猛烈であり、いはゆる國家社會主義諸團體の勞働者經濟鬪爭に對する斷壓・妨害の端的な現はれとして、最も注目すべきものであつた。結局において、この爭議は勞働者側の慘敗に歸したとみられる。

一方、東京市電の總罷業は、經營行詰りを主として從業員の犠牲によつて打開しようとする『市電更生整理案』に對抗して九月上旬より二週間續行され、更に强制調停案に反對して十月上旬再罷業に入つたが一週間にして打切られた。この爭議については、爭議原因が雇主側の全員解雇・新規採用といふ『暴案』にあつたゝめか、社會各方面では比較的同情的態度を以て爭議を傍觀し、殊に內務省首腦部をはじめ、藤沼警視總監、吉田書記官長（當時協調會理事）等には東京市長を非難する樣子さへみうけられた。又、爭議團側も軍部や警視廳方面と頻りに陳情協調的戰術に出たことも注目された。新聞等に現れた輿論も爭議團側に對して大分に同情的であつた。しかし强制調停發動後は爭議團の情勢はとみに非となり、妥協解決案の條件は從業員側の讓步せる部分の方が遙かに大きかつた。

4　不振の勞働組合運動

メーデーに現はれた組合勢力の消長　毎年五月一日行はれるメーデーも、昭和九年には第十五回を數へるやうになつた。我々はこの年中行事の中に、組合勞働者の數的勢力、組合の動員力、從つてまたその組織と鬪爭とに對する組合員の自信と熱意とを、もとより必ずしも正確にではないが、認めることができよう。全國におけるメーデーの參加人員は多少の動搖はあつたが昭和二年までは年と共に增加した。それが昭和三年の共產黨事件に關聯して左翼的組合の彈壓にまづ一頓座を來し、更に昭和六・七年に始まる現在の非常時情勢の下に、組合運動がいかに喘いでゐるかは、第十表の數字が如實に示してゐる。

第十表　全國メーデー參加人員
（內務省社會局調）

	運動個所數	參加人員	（內女）
大正 9	1	1,000	（？）
10	4	4,150	—
11	6	8,030	—
12	12	10,780	—
13	13	15,516	—
14	21	25,629	—
昭和 1	45	42,330	—
2	48	42,110	(1,500)
3	38	24,400	(1,000)
4	23	23,000	(1,050)
5	51	37,500	(2,000)
6	51	39,300	(1,900)
7	70	41,000	(2,000)
8	37	25,490	(1,600)
9	36	21,600	(1,800)

たゞに參加人員の問題だけではない。山川均氏の言葉によれば、『今年のメーデー行進に見たやうな、隊伍の中でも女工とふざけたり、オフイスの窓から首を出す女事務員にからかつたり、正宗のびん詰をぶら下げてゐないといふだけで、さながらお花見團體の行列みたいな示威行進は、階級的威力の表示ではなくて、現在の時期における組合運動の極度の志氣頽廢の暴露であることは爭はれぬ』（改造、昭和九年六月號）。

日本勞働祭と分裂メーデー　勞働組合統計によると、組合運動の勢力はそれほど消衰してゐない。昭和五年を境に、組合員數の增加は下火となつたとはいへ、六年にはなほ一萬四千、七年には七千の增加を見、八年になつてはさすがに減少したが、それでもなほ六年の水準を保ち、組合數は却つて增加した。組織率も昭和五年の七・五%から六年の七・九%と增加し、七年八年はやゝ低下したが、五年の七・五を維持してゐる。だが、最近の組合運動の樣相を知るには、かうした數字よりも所謂指導精神を中心とした組合勢力の配置關係の變化に求めなくてはならぬ。それがメーデーに關しても、四月三日の日本勞働祭の誕生となり、また昭和八年に引續いて分裂メーデーの擧行となつて、現はれた。

日本勞働祭は東京深川公園から靖國神社に至る市中行進を行つたが、その參加者約三千二百人、參加組合の主なるものは自彊組合、日本運信從業員組合、日本交通從業員組合、日本產業軍等であり、これに組合會議加盟の總聯合東京聯

合會も加はり、後のメーデーには參列しなかつたのは注目された。當日の宣言にいはく、『我等愛國勞働者は國家產業の發展によらずして勞働者の幸福なきを確信し、勞働者の運命は國家の運命と共にすることを確信する。從つて國家產業を破壞する階級鬪爭主義を排擊し、階級利益にのみ拘泥し國家全體の利益を顧みざる非國家的利己主義を擊滅せんとするものである。國家非常時に當り我等は產業報國の旗の下に益々一致團結して國家產業發展に貢獻し併せて勤勞大衆の生活權確立に努力し、以て祖國日本の興隆に微力を盡さんことを誓ふ。』

東京におけるメーデー祭は、一方では總同盟、全國勞働、東京瓦斯產業、海員組合、港灣從業員等の組合會議派により約三千七百人が動員せられた。そのスローガンにいはく、『一等國らしく勞働賃銀を引上げよ』『政府は軍需工業の不當利得を取締まれ』、『全產聯團體保險絕對反對』、『一日八時間一週四十八時間制の實施』、『勞働組合法を制定せよ』、『暴壓諸法令の改廢』、『失業者の生活保證』、『自主的船員保險法の實施』、『反動諸勢力の粉碎』、『健全なる勞働組合主義の確立』。

他方、反組合會議派では、東京交通勞働、總評議會、全勞統一全國會議等の左翼組合と、全國勞働組合自由聯合會のアナルコ・サンヂカリズム派とが約二千名を動員して行進した。この派のスローガンは次の如くである。『勞働者農民の敵ファッショを粉碎しろ』、『植民地の勞働者農民と手を握れ』、『民族、性、年齢を問はず同一勞働に同一賃銀をよこせ』、『臨時工を即時本工にしろ』、『物價は上つた。賃銀を三割値上しろ』、『首切り、賃下げ、勞働强化絕對反對』、『失業者に飯と仕事を與へよ』。

組合運動の分野　昭和九年春における組合運動の分野は第十一表の如くであり、組合會議の成立による『大右翼結成』は數の上では壓倒的優勢を持してゐる。(カッコ內の%は組合員總數四十二萬人とみて、これに對する百分率)

昭和九年においても、この『大右翼結成』の傾向は更に進むと共に、所謂左翼組合間にも漸やく戰線統一の機運が具體化するに至つた。この間、國家主義的な諸勢力は離合集散の華々しさはあつたとしても、實質的には大した伸張を示

第十一表　勞働組合の分野一覽

(會議派、又は右翼)		
日本勞働組合會議加盟組合		275,000人 (65.4%)
(「左翼組合」)		
日本勞働組合總評議會	(15,000)	24,000(5.9%)
全勞統一全國會議	(9,800)	
(アナ系組合)		
全國勞働組合自由聯合會		4,000(0.9%)
(國民主義の組合)		
日本勞働同盟	(24,000)	42,800 (11%)
日本產業勞働倶樂部	(13,000	
自本產業軍	(3,000)	
日本逓信從業員組合	(3,000)	
逓友同志會	(2,500)	
(其他の組合)		
海軍勞働組合聯盟	(38,800)	70,000(17%)
日本交通勞働總聯盟	(12,500)	
神奈川造船勞働聯盟	(4,200)	
製陶勞働組合同盟	(2,900)	
東京市從業員組合	(1,100)	
其他		

に、書記長米窪滿亮氏を主事に推すことに決定した。十月廿日には、組合會議第三回年次大會が開かれ、この席上で後藤內相の祝辭が中野社會局勞政課長によつて代讀せられた。これは我國勞働運動史上に前例のないことであり、頗る注目を惹いた。なほこの組合會議派の主力たる日本勞働總同盟と國家社會主義を奉じ勤勞日本黨支持を表明する日本勞働同盟との合同問題が、六月における後者の年次大會以來擡頭してきたことも注目すべきであらう。

右翼組合の國家主義化　かうした右翼勞働組合の國家主義的轉向はしきりに現はれてきた。前述した勞働組合總聯さなかつたと考へられる。

日本勞働組合會議の行動　組合會議の主なる歩みを顧みてみるならば九年三月から四月にかけては、國際勞働局次長モーレット氏の來朝を前に、ソシアル・ダンピング問題を取り上げ(後述)六月の國際勞働會議には菊川代表を送つて、その途中、コロンボにおいてアジア勞働會議の結成に當らしめた。これはアムステルダム・インタナショナルのアジヤ版ともいふべきものであるが、組合會議ではその顧問鈴木文治氏を議長

合の日本勞働祭參加があり、いままた日本勞働同盟と總同盟との接近がつたへられた。海軍勞働組合聯盟も九年五月、『宗祖建國の國是と三千年の民族的傳統に遵ひ勤勞階級としての道義と規律を重んじ團結戮力して識見と德操の涵養に努め技能の向上發達を計り、以て勞働報國の實を擧げんことを期す』といふ國家主義的新綱領を決定するに至つた。勞働組合總聯合、勞働同盟の年次大會における宣言にも、夫々『日本國家の健全なる發達』ないしは『祖國日本の磐石の安きと國威の發展を阻害するものとして資本主義の排擊が强調され、國内的には平和的、現實的に、『日本の國情に卽せる勞働組合主義』ないし『國家社會主義』に立脚すべきことが宣明せられた。

このやうな情勢も與つてゞあらうか、いはゆる愛國團體、國粹社會主義團體に關しては、日本勞働同盟からの分派として日本産業軍が二月下旬に結成されたりしたが、その外格別の注意すべき發展は認められなかつた。

ソシアル・ダンピング問題　別項でもふれてある通り、(『貿易狀態とソシアルダンピンク』の項參照)、九年春に至り、日本商品の海外進出が劣惡なる勞働條件に基づく、といふソシアル・ダンピング問題が矢釜しく論じられた。これは、本來ならば勞働組合の好個の鬪爭題目とみられるのに、これに對する組合側の、殊に日本勞働組合會議の態度は終に曖昧なるまゝに終つた。すなはち四月中旬、組合會議執行委員會は次の如き態度をとることに決定した。

『一、國内的には別項聲明書記載の如き態度をとること(聲明書省略。これは、一方では我國商品の進出原因が單なる低賃銀・長勞働時間のみでなく、「勞働者の勤勉、優秀なる生産技術」にもよることを指摘し、他方では政府および「使用者」に向つて社會立法制定の怠慢を非難したものである。)

一、ジュネーヴ(國際勞働會議)に於て非公式の場合には我國勞働條件の眞相を率直に說明すると共に我國の當面せる難問題卽ち高率關稅、過剩人口、海外移住制限等に就ても諸外國の考慮を促すこと。

一、ジュネーヴに於ける公式の場合にはなるべく消極的態度に出で進んで眞相を發表することを差控へる。併しそれ

は政府及雇傭主代表の態度如何に關するので、彼等に豫め警告的提議を行ひ、それにも拘らず彼等がこれに應ぜざるときには已むを得ず眞相を發表すること。(詳細には「組合會議時報」、第七號參照)

このジュネーヴ會議をめぐるソシアル・ダンピング問題は、正に現段階における勞働運動の國際性の喪失を最もよく示すものであつて、我國組合運動における右翼的偏向もある程度までかうした情勢の必然的なる反映と看做さるべきであらう。

5　小作爭議、農民運動

米高繭安の農村、引續く風冷害に惱まされた農民の狀態が如何に窮迫を告げてゐるかは既に上述した如くである。生活の窮乏が特に鋭い飯米確保となつて現はれたのに應じ、小作爭議の方も單に數が殖えたといふばかりでなくて、その質がきはどくなつてきた。

小作爭議は增加した　小作爭議の發生件數は大正十年一躍一千臺を越え、十四年には早くも二千臺を突破したが、昭和五年に入ると共に增加の勢を加へて、六年三、四一九件、七年三、四一四件、八年には遂に四、〇〇〇件と新記錄に達した。これが、九年になると一段と激化の傾向に進んでゐることは、上半期だけの計數からさへも十分窺ひ知ることができる。卽ち九年上半期の爭議件數は二、五九四で前年同期の二、二〇七に比し一七・五%餘の增加になつてゐる。(實際はもつと殖えてゐる、九年上半期の數は七月十日迄に報告到着の分で、全部が到着するのはなほ半年以上を要するのであつて、その上の決定數はかゝる暫定數を越ゆること二割に達するのが普通である。)

小作地引上げに基く爭議多し　だが、數が增えたことよりも一層注意すべきは爭議の性質における變化である、それは一言にして云へば、露骨に土地問題を繞くる爭議の增えたこと、農務局の分類によれば『小作權關係又は小作地引

上』に基因する爭議の數が甚だ大きな比重をもつに至つたことである。恐慌の深化は、生活苦の加重を通じて一方には小作料の滯納を呼び起し、他方には小作人間に猫額地を繞る競爭の激化を齎らす、中、小地主は過剩勞力の存在を前にして或はより有利な自作經營に移らんとし、或は諍爭を利用して轉貸を企てる。その結果、種々の名目で積極的に小作地返還を要求するものが增加し、これに對して小作人は小作契約の繼續、小作權の確認、作離料の支給等を主張して爭議となる。從來、小作爭議の大部分を成してゐた小作料大小中心の爭議は、次第に深刻化し、量より質への轉換を遂げて、今や小作權中心の爭議となつたのである。地主、小作人間の土地爭奪を中心とする爭議へ重心が移れば、勢ひ爭議參加人員及び關係土地面積の減少が起るのは當然であつて、場合によつては一人對一人の『爭議』すらも起ること稀れでない。以上を簡單に表示すれば第十二表の如くである。

第十二表　最近小作爭議の狀況

年次	爭議發生件數	内、土地返還關係爭議數	同上割合	一爭議當り人員參加 地主	一爭議當り人員參加 小作人	一爭議關係土地面積
			%	人	人	町
昭和 1	2,751	316	11,5	14,4	54,9	34,8
2	2,052	432	21,1	11,8	44,5	28,8
3	1,866	461	24,7	9,4	34,3	21,3
4	2,434	704	28,9	9,6	33,7	23,3
5	2,478	1,002	40,4	5,7	23,6	16,1
6	3,419	1,307	38,2	6,9	23,7	17,7
7	3,414	1,520	44,5	4,9	18,0	11,4
8	4,000	2,275	56,9	3,6	12,0	7,6
9 上半期	2,594	1,798	69,3	2,4	7,5	4,2

農民組合運動　農村における生活の窮乏化はいろいろの形で農民組合運動を刺戟してゐる。それによつて、本年においては『全國農民組合』等を中心とする農民は以然より活氣づいてきたことが認められる。殊に、組織農民の間において政治的關心が高まりつゝあることは注意すべきであらう。しかし、さきに述べたごとく、鬪爭が土地取り上げを中心として、深刻化し、

從つて運動が行はれにくくなつた結果は、かつての小作料引上げ鬪爭の時代ほど、農民組合運動の華々しき展開は示されないことは事實である。

昭和九年における全般的な農民組合運動の注目すべき事實としては、農民生活權擁護聯盟の結成があつた。これは飯米飢饉に對する要求と鬪爭とを組織化しようとする農民諸團體の試みの結集せられたものである。鬪爭目標は消極的ながらも飯米差押禁止法の獲得に向けられてゐる。八月末、全國農民組合新潟縣聯合會、北日本農民組合の主唱により東京赤坂三會堂に上記聯盟の結成大會が開かれた。參會せるもの農民自治協會二七名、北日本農民組合一〇名、全國農民組合九名、農民自治聯盟二名、農村協同組合協會四名、南蒲原勞農協議會一名で、大要左の如き協議がなされた。

(一)運動の目的――農民の事實生活に卽した利益の擁護を目的とする。

(二)實行方法――農民食糧一ヶ年差押禁止法の議會提出、等。實行委員は各縣代表として關係閣僚を訪問陳情すること。

(三)實行委員――委員長、長野朗。委員、稻村隆一、玉井潤次（新潟）外十二名。

6　勞働者・農民と政治

無產政黨の沈滯　昭和九年を通じて、無產政黨の沈滯は更に甚しかつた。社會大衆黨の活動としては、二月上旬東京協調會館に開かれた非常時大衆黨會議と七月上旬岡田内閣成立直後に『無產大衆當面の政治的緊急要求』を書記官長あてに提出したこと、の二點がまづ擧ぐべき事柄であつたらう。共產黨も一月中旬いはゆるリンチ事件の騷ぎがあつたのを最後にその動靜は殆んど社會の表面から消滅しようとしてゐる。國家主義黨にも、昭和八年七月の日本國家社會黨の分裂のあとを承けて、二月に『愛國政治同盟』と改稱した小池四郎氏一派の勢力整備、四月に松谷與二郎氏以下の動

勞日本黨の結成などがあつたが、その實勢力そのものには伸張の傾向を認められないやうである。

等閑に附せられた社會政策　一方では賃銀增額、時間短縮を要求する工業勞働者があり、他方では農民の窮迫があるのに、昭和九年において實施された社會政策立法は僅かに健康保險改正法を數へる程度にすぎなかつた。第六十五議會には更に勞働者災害扶助法の提出も豫定されながら遂に實現されるに至らないで過ぎた。他方、治安維持法改正法案は兩院協議會で審議未了に終つて成立しなかつた。（『第六十五回議會とその業績』の項參照）。

このやうにして、勞働者農民の利益は、無產政黨の活動を通じても、政府や民間の社會政策的施設——全產聯が四月から創設した團體生命保險計畫は鄕誠之助會長が福利增進施設として誇るところであるが、これには組合會議も反對してゐる——に俟つても、何ら助長されることなき一年だつたといふ外はない。

十五　展　望

以上、各部面における分析を總括するに、その基本的傾向は次の如くであつて、そこに一九三五年への展望は自からの與へられてゐる。

世界政治經濟の動向　世界經濟の好轉の聲が喧しいに拘はらず、全體としての情勢には好轉と云ふべき兆候は見出されない。景氣指標について云へば、一つの指標に好轉の徵候が見られるかと思へば、他の指標には惡化の傾向が見られるといふ風に、互に好轉と惡化の諸徵候が交錯して、全體としてのコンソリデーションは未だ見られない。このことは世界の失業狀態にも反映してゐる。ドイツ統計局の調査（斷つておくがこれは世界失業の最少限の數である）によれば、この數年間の世界の失業は次の如くである。

一九三一年中葉　二、〇〇〇萬人

一九三二年中葉　二、五〇〇萬人
一九三三年中葉　二、六〇〇萬人
一九三四年中葉　二、〇五〇萬人
一九三四年九月　二、一五〇萬人

世界景氣の好轉を叫ぶものが常に眞先に揭げる生產回復の指數に現はれた好調に拘はらず、一九三四年中葉の失業狀態は未だ一九三一年の狀態よりも惡く、しかも九月には既に早く增大的傾向にさへ轉じてゐる。恐らくかゝる尨大な失業群が現在では既に慢性的現象と化しつゝあるのだ。たゞこの一點からしても、世界經濟の狀態が容易に恐慌前の水準に復歸しうるとは考へられない。

むしろ今日では世界の情勢は、個々の國々の景氣指標の總計と平均とでは、その現實の形相を示しがたいほどまでに不均等性の支配するところとなつてゐる。不均等なる發展は近代社會を特徵づける一法則であるが、この傾向は恐慌によつて急速化され、今や勢力關係の觸るれば破れんばかりの不均衡にまで推移してきてゐる。こゝに現狀打破の新勢力の結成と、現狀維持の舊勢力の連衡とをめぐつて、めまぐるしい勢力關係の集團編成替へが行はれてゐる。一九三四年ほど國家間に公然又は秘密の條約が結ばれたことは、戰後かつてその比をみないところである。これ、明に世界の政治的危機の成熟に對する準備工作にほかならないのであつて、それ自身、成熟のバロメーターたるものである。

これら一切の情勢は最も端的に軍縮問題の展開に具現されてゐる。軍備平等權の要求と云ひ、比率主義の固執といひ安全感を脅かされぬ獨立自主の國防の要求といひ、そこには根柢に生じた勢力關係の推移を語る尖端が鋭く現はれてゐるのだ。日本がワシントン條約廢棄を通告した後の、來るべき一九三五年の世界は、卽ちこの尖端の上をめぐつて、內には國內的政治勢力の推移、外には列强間の離合集散を移して、愈々はげしいショーヴィニズムの舞臺と化するであ

う。これは云ふまでもなく、意識的に又は無意識的にたゞ一つの歸着點に、そしてまた或る出發點に邁進しつゝあるのである。

日本の政治經濟情勢、(一)經濟部面　日本經濟は謂はれる所の『世界經濟の好轉』の先頭に立つてゐる。その意味において、またかゝる『好轉』のもつ光明と暗黑とを集約的に表現してゐるとも見られる。輸出工業と軍需工業とには最後未だ見られなかつた殷盛が現はれてをり、時には狂熱に近いブームを示してゐるが、それも時々襲つてくるガラにに不安定性を蔽ふべくもない。

殊に農村には恐慌が層一層と激化し、本年緊要なる問題となつた飯米飢饉の新段階は、出來秋五千萬石の凶作をもつて、十年度には一層の重壓を全日本に加へるだらう。農村ではもはや景氣が良い惡いの問題は通りすぎてゐる。それは米價吊上策が吊上げに成功して、農村匡救に失敗した、否、ある意味では農村窮乏をかへつて深刻化ならしめた事實に徵して明かである。我が人口の半ばが農民である事實は、屢々力說されたところであつたが、この事實を力說した人々は、今、農民が飯米飢饉の新な恐慌段階に押しつけられた時に、……。しかし恐らくこれらの人々にも、日本の農村を匡救せずしては、日本經濟のコンソリデーションが困難なることは十二分に判つてゐることだらう。だが農村の匡救が單に巨額の匡救費を要するとか、またその結果が勞働力の供給、農産物價格の騰貴を通じて繁榮の工業部面にブレーキを與へるとかいつた問題のほかに、尙より基本的な問題を含んでゐるだけに、彼等はたゞ自力更生の僥倖を萬が一に頼んでゐるのだ。農村の更生はたとひ今後「一時の息つき」はあつても、本質的には期待できない情勢にある。そこに常に底流として不安の空氣が醸成されるのは、今後とも避けがたい。

加ふるに國內勞働大衆の地位も、工業の繁榮とは似もつかず、かへつて惡化してきてゐる。就業率の改善をもつて、勞働大衆の狀態の好轉を樂觀する者は、就業率の增加が臨時工の就業によるものであり、その結果、かへつて本工の賃

銀引下げを招來してゐる事實を忘れてゐるのだ。しかもこの『好轉』を支へてゐる一方の基本支柱たる輸出景氣の前途に漸く大なる不安の影が差しはじめた今日において、この事實は漸く現實的重大さをもちはじめんとしつゝある。なぜなれば、輸出景氣に頓挫が起れば、まづ臨時工は再び街頭に投げ出されるであらうし、本工にはたゞさへ引下げられた賃銀に更に引下げの重壓が加はつてくるだらうからである。さういふ事態を遠い將來に漂ふ一抹の暗雲と、單に雲烟過眼視して、もはやすまされない狀態に既に當面してゐるのである。

輸出景氣が崩るれば、ひとり軍需景氣のみでは日本經濟の繁榮は維持しがたい。否、既に財政狀態には惡性インフレへの轉換を必至ならしめる諸要素が充分に含まれてゐる。健全財政への復歸の努力は世人嘲笑のうちに水泡に歸したとはいへ、財界に惡性インフレ危惧の念が次第に濃厚を加へつゝある事實は疑ふべくもない。事實、十年以降に俟つものが建艦競爭であることに間違ひないとすれば、農村匡救費、滿洲事件費と共に財政の負擔は一層過重となつても輕減することはない。しかも之を聲援するが如くに、公債經濟の恐るべき結果には全く盲目で、ひたすらその一時的な刺戟と昂奮の有難味に陶醉せる一派の政治勢力が次第に强力となりつゝあり、またそれを助長するが如き客觀情勢に進まんとしつゝある今日の狀態である。昭和十年の日本經濟を蔽ふ不安と動搖とは、九年度よりも遙にその重味を增し、より神經的に、より頻繁に、襲來しなければやまないであらう。

(二)政治部面　こゝでも次第に、日本經濟の好轉と歩調を合はせて、コンソリデーションへの過程を進んでゐるが如く見えたが、それも結局、經濟部面における跛行的景氣の進行に禍ひされて、未だ外見ほどに內實には整理されてゐない。これは底流から時々間歇的に勃發する反正統派的勢力の活動に僅にその尖端を窺ひうるが、その底流が相當の擴がりを有してゐることを知るには充分である。これは軍縮問題とか滿洲國の育成とか全國家的問題の展開が世界的非常時の局面に遭遇せんとするにあたつて、經濟部面における光明界と暗黑界の層一層の背反對立の過程が、やゝもすれば國論を

二分せんとする情勢に胚胎すると思はれる。かゝる全國家的問題の發生と恐慌の畸形的な深化とは偶然の一致とも見られるが、また相互關聯的でもある。世界恐慌が軍縮問題を全國家的問題たらしめ、全國家的問題の解決を遂行する時にあたつて、恐慌が畸形的な深化の形態をとつて、恰も國民的遂行を妨げるが如き情勢を現出したことは、洵に歴史の進行における矛盾そのものである。ハツキリした形はとらないまでも。この矛盾の解決をめぐつて、正統派勢力と反正統派的な改革派とが對立してゐる點に、今日の政治的不安定の基礎があるとすれば、政黨が政黨として、新官僚が新官僚として、軍部が軍部として、いづれもそのまゝの姿勢では問題の中心から外れた陣形である。政黨の無力も、新官僚の無能も、軍部のやゝもすれば陥らんとする孤立狀態も、これがためであつてみれば、全國民的問題の解決が切實となればなるほど、この陣形に展開が起り、やがて勢力の編成替が起るであらう。それにしても恐慌の畸形的な進化が訂正されなければ或は訂正するに足る實力が具はらなければ、わが政治過程における不安定の空氣は解消しないであらう。してみれば、むしろ全國民的問題は當面まづ我が經濟過程の畸形的な發展の是正にあるとも云へよう。

廣田外相の多面的外交はその限りにおいて徐々に外交關係の緊張をもみほぐしつゝあるやうに見られ、その點においてともかくも焦土外交より立ち直りつゝあるやうであるが、しかしこの立ち直りによつて、基本的對外關係が根本から改善されるわけにはゆかない。軍縮問題にしてもはや外交部面の折衝の如何にあるのではなく、全國家的問題にまで昂揚してゐるからだ。だから問題は外への働きかけよりも、内への働きかけが重大となつてきてゐる點にある。昭和十年には、人民の眼は、經濟部面にも政治部面にも、先づ國内に向けられなければならぬ。然らば、彼等はこゝ二三年間餘りにも被等の眼が外に奪はれすぎてゐたことを知るであらう。

思想・文藝篇

A、わが國の一般思想界

1 マルクシズムの退潮と自由主義の再登場

前年よりの續續　一時、わが國の一般思想界を全く風靡する觀のあつたマルクシズムは、滿洲事變を機緣とする社會情勢の變化によつて急激に下り坂に向つた。

この傾向は本年度においても同じであつた。マルクシズムを主張する雜誌論文の一般雜誌に掲げられるもの著書譯書の刊行せられるものは、その數が著しく減少してきてゐる。

特に本年度において注意をひく事實は、檢閲が益々嚴重となつてきたために、政治的なる方面においてマルクシズムを正面から述べるものゝ殆んど見當らなくなつたことである。後に觸れる如くマルクシズムの他の分野に赴くか、或は具體的なる政治的なる問題を取り扱ふ場合には僅かに裏から說くことが餘儀なくされてゐる。

さらにマルクシズムの退潮を語るものとしては、廣くプロレタリア運動自身に關する論文、著書が影を潛めたる觀あることである。雜誌論文としては、山川均氏『非常時に喘ぐ勞働組合運動』（改造、六月號）が見られるくらゐである。

これは、プロレタリア運動そのものが萎縮し振はざることに基くものであるか、一つには右の如き論文、著書等が人々の興味を湧かさなくなつたためであらう。

しかし、マルクシズムの退潮は豫期せられたるが如くには甚しくない。もし文學をも一般思想を表すものとして考へるならば、プロレタリア文學の衰頽は激しいものがあるが、狹い意味の思想界、論壇にあつては然かも甚しくないと云はなければならぬ。知識階級のかなり大なる部分は、依然、理論としてのマルクシズムを要求しつゝあるのであらう。ために、『改造』、『中央公論』、『文藝春秋』、等の高級一般雜誌には、本年においてもまた、猪俣津南雄、大内兵衛、山川均、有澤廣巳、向坂逸郎、大森義太郎、鈴木茂三郎、平野義太郎、戸坂潤、石濱知行氏等の、マルクシスト或はこれに近い思想の評論家が主なる寄稿者を爲してゐる。なほ、これらの中にはその著書の本年度に刊行せられたるものも少くない、――主なるものを擧ぐれば、猪俣津南雄『踏査報告、窮乏の農村』(改造社)、向坂逸郎『統制經濟總觀』(同じく)、大森義太郎『まてりありすむす・みりたんす』(中央公論社)、鈴木茂三郎『日本財閥論』(改造)。その他である。

いま、本年度の論壇を紹介する意味からも、試みに『改造』『中央公論』の毎月、卷頭論文及びその次に位する論文の二つづゝを掲げれば次の如くである。

改造 (十六頁)

一月 佐々木惣一『言論の自由』
　　阿部賢一『國防費と財政』
二月 向坂逸郎『資本主義「修正」論の擡頭』
　　平貞藏『フランスブロックの世界的勢力』
　　(卷頭は座談會)
三月 高橋龜吉『世界資本主義の新轉向』
　　佐多忠隆『貨幣の危機』
四月 鈴木茂三郎『日本資本主義の新動向』
　　河合榮治郎『現代の學生に與ふ』
　　(卷頭はアインシユタインとロマンロランの寄書)
五月 猪俣津南雄『ブルジョアジーの國家改造案』
　　關口泰『文敎關係の行財政改革』
六月 小泉信三『價値、價格、勞働』
　　向坂逸郎『ソシアル・ダンピング論』
七月 宮澤俊義『官僚の擡頭』
　　小泉吉雄『滿洲景氣の跛行性』
八月 長谷川如是閑『嘘の心理と倫理』
　　岡田宗司『日本資本主義の基礎問題』
九月 上田貞次郎『我國の人口構成と職業問題』
　　三木清『シエストフ的不安について』
十月 牧野英一『文化國理念と三權分立主義の展開』
　　高橋龜吉『滿洲經濟の現狀と前途』
十一月 大森義太郎『現代知識階級の困惑』
　　石原純『自然科學と唯物論』
十二月 美濃部達吉『國家主義の思想と其の限界』
　　鈴木茂三郎『增稅論』

中央公論

美濃部達吉『我が議會制度の前途』
平野義太郎『解體を前にせる舊支那の經濟社會』
河合榮治郎『渾沌たる思想界』
宮澤俊義『獨裁政治理論の民主的扮裝』
森戸辰男『社會主義思想の進展』
平貞藏『フランス暴擾事件の新動向』
矢内原忠雄『民族と平和』
栗生武夫『法律學の轉落』
田中耕太郎『ナチス的法理論の思想史的分析及び批判』
石濱知行『日本資本主義はいづれに轉換するか』
牧野英一『法律現象に於ける解體と構成』
伊藤正德『「對支聲明」功罪論』
平野義太郎『日本における低賃銀』
土方成美『ジヤーナリズムと「大衆」獨裁』
猪俣津南雄『インフレ日本の今迄と今後』
阿部賢一『高橋財政の檢討』
有澤廣巳『戰爭と銀行』
伊藤正德『ブラット海將の五・三・三比率を毀す』
佐々木惣一『政府の力と國策審議機關』
稻原勝治『北鐵交涉は何故停頓したか』
平野義太郎『自然災害と無產階級』
竹内謙二『獨占テロリズム批判』
猪俣津南雄『「惡性インフレ」が來る迄』
中川善之助『現代民法と女子の生活權』

いま、向坂逸郎、佐多忠隆、鈴木茂三郎、猪俣津南雄、岡田宗司、大森義太郎、平野義太郎、森戸辰男、石濱知行、有澤廣巳氏をもつてマルクシスト或はこれに近き思想家とすれば、これらの人の執筆にかゝる論文は十六である。全數四八に對して、三三%である。なほ、これを改造と中央公論に分ければ、兩者は各々八である。

もちろん、これを以前に比べれば減少してゐることは確かである。しかし、三割といふ數は小さくはなからう。いはんや、もしこれを英米等の先進資本主義國に比べれば、驚くべき大なる數字である。そこでは、一般雜誌へのマルクシストの寄稿の如きは極めて稀れである。

マルクシズムを批評し攻擊するものも、學術的價値あるものは、本年度にいたつて盛んであるといふことはない。反對に、本年度は極めて稀であつた。僅かに論文として小泉信三氏『價値、價格、勞働』(改造、六月號)、著書として高田保馬博士の二書『マルクス經濟學論評』(改造社)、『國家と階級』(岩波書店)を見たのみであるが、前者は講演であり後者の二書は以前に論文として發表されたものをたゞ纏めたにすぎない。

マルキシズム自身のうちの變化については、本年度、多少注意すべきものがある。

マルクシズムの純粹理論に關する研究は乏しい。かゝるものが一般的雜誌その他の發表機關から喜ばれないためもあるが、それ以外においても眼をひくものは見當らなかつた。中で、哲學に關して、以前からの『唯物論研究會』が存續し、その機關紙『唯物論研究』は舊の如く刊行せられつゝあり、若干の研究論文が載せられた。

經濟分析のものは、やゝ理論的なものから時評風のものまで、數は最も多い。主なるものを擧げれば、猪俣津南雄氏『日本統制經濟の進展』(改造、一月號)、向坂逸郎氏『資本主義「修正」論の擡頭』(同、二月號)、鈴木茂三郎氏『日本資本主義の新動向』(同、四月號)、有澤廣巳氏『世界經濟の現段階』(同、五月號)、石濱知行氏『日本資本主義はいづれに轉換するか』(中央公論、五月號)、猪俣津南雄氏『インフレ日本の今迄と今後』(同、八月號)、有澤廣巳氏『戰爭と銀行』(同、九月號)等である。これについては、純粹に經濟的分析に限らうとする傾向がいくぶん見られるくらゐで、從前と比べて、さして變りない。これに反して、わが國のマルクシズムが歷史研究に向つてきたことは、本年度の一の特徵とせらるべきであらう。德川時代の研究、明治維新研究から進んで日本資本主義の發展史の研究にまで進んできてゐる。これを活發に行つてゐるものはいはゆる極左理論家の一群であり、その雜誌として『歷史科學』および『經濟評論』がある。本年度に刊行せられた山田盛太郎氏の『日本資本主義分析』(岩波書店)、平野義太郎氏の『日本資本主義社會の機構』(岩波書店)、の二書はこの派の代表的作物である。特に山田氏の意見はわが國のいはゆる極左翼の、日本主義に關する根本見解を示すものとされてゐることくである。

これに對して、わが國のマルクシズムにおいて極左翼に對立するいはゆる『勞農派』からは岡田宗司氏の『日本資本主義の基礎問題』(改造、八月號)が書かれた。

兩者の對立は、日本資本主義における封建制的殘存性の意義に關してゐる。山田・平野氏は、日本主義は極めて多くの封建的殘存物を含んでをり――特に農村において――、從つて日本資本主義は英米のそれとは別の型に屬するといふに對して、岡田氏は、日本資本主義のうちには封建制的殘存物は存するとは云へ、必ずしも多量ではなく、且つ資本主義によつて同化されてをり、日本資本主義は英米のそれと根本的には異らないとしてゐる。

別に、いはゆる極左翼とは異つた、しかし進步的な立場からの歷史研究が東大助教授土屋喬雄氏によつて試みられてゐる。『維新史研究の中心論點』(改造、一月號)、『新地主論の再檢討』(同、六月號)、『維新前後日本農業に於ける賃勞働』(同、十二月號)『幕末武士の階級的本質』(中央公論、十月號)はその主な作品である。これに對しては、また、いはゆる極左翼から服部之聰、小林良正氏等の、前記の彼等の雜誌に據れる反駁があつた。

總じて、一般理論の研究から、これを具體的なる問題に移すといふことが本年度のマルクシズムの發展において見ら

れると云ふことができよう。右に述べたところもさうであるが、本年度、マルクシストの間に日本の農業問題が好んで扱はれたことも、そのひとつの現はれといふことができる。もちろん、こゝには、わが國において特に、農業問題が甚だ重要且つ緊切なるものとなつたことが(『窮乏する農村』の項參照)根本原因をなしてをるのであるが、マルクシズム自身の新たなる展開も考へられるであらう。まづ理論的なものとして、十一月にはかに逝ける櫛田民蔵氏の『米の生産費』(大原社會問題研究所雜誌九、九月號)、向坂逸郎氏の『農村工業化の問題』等はそのうち最も注意すべきものであつた。

櫛田氏は、地代論の研究、わが國小作料の問題、米の生産費と、こゝまで進んできてゐられたもので、從來から種々なる意見が出されなんら根本的の決定を見てゐない米の生産費を徹底的に究明せんとしたもので、中途にして逝つたのは惜しむべきである。向坂氏の論文は、農村の難生策として本年ある方面から盛んに唱導し始められた農村工業化なるものを、その矛盾、難生策としての無意義、結局農業プロレタリアートの增大策たること等にわたつてマルクス經濟學の立論から理論的暴露を試みたものであつた。

さらに、農村農業問題を別な方面から扱つたものとして、農村實地踏査記的のすぐれた作品が、本年はいくつか見られた。まづ、豬俣津南雄氏の『農村昨今の困り方』(改造、七月號)を第一として三ヶ月連載されたものがあり、さらに大内兵衛氏の『農村飛びある記』(同、十月號)、が出で、最後に、東北の冷害飢饉を具さにそして的確に調査した山川均氏の『東北飢餓農村を見る』(同、十二月號)が發表された。

自由主義の再登場　かゝるマルクシズムの退潮は、本年度、自由主義の再登場を促すことゝなつた。

自由主義は、わが國において、大正年代、デモクラシーの運動として、開花しかけたのであるが、間もなくマルクシズムの擡頭に遭ひ、これから完膚なき批評を受けることによつて、忽ち挫折した。以後、マルクシズムが日本の一般思想界を完全に支配し續けたからして、自由主義は長く逼塞してゐたものである。重ねていへば、マルクシズムの退潮はこの自由主義を復活さした。

しかし、自由主義の再登場の原因は、これのみではない。最近の保守的な政治情勢は、マルクシズムをして本來のプロレタリア的要求から自由主義的要求の方へ少なからず後退することを餘儀なくすると同時に、この自由主義的要求を意義あるものたらしめた。こゝにおいて、自由主義はその存在理由を再び得たのである。

さらに、特に本年度において、自由主義が注目するにたる再登場を示したのは、次のごとき理由によると見ることができる。マルクシズムの退潮の主要原因たる保守政治は、最初、自由主義をも容れなかつた。しかるに、この社會情勢は、本年において、前年度或は前々年度と比べれば、著しく緩和されるにいたつた。人々がいはゆる非常時に慣れると共に、實際にも反動勢力はかなりにその力を減じた。そこで、マルクシズムは未だ伸張の餘地がないにしても、自由主義は言論的活動の可能性を與へられたのである。

さきの一覽表(三頁參照)は本年度いかに自由主義者の文筆的活動が盛んであつたかを示してゐるが、こゝにその他のものを併せて掲げれば、主たるものは、次のごとくである、――美濃部達吉氏『我が議會制度の前途』(中央公論、一月號)、『國家主義の思想と其の限界』(改造、十二月號)、佐々木惣一氏『言論の自由』(改造、一月號)、『政府の力と國策審議機關』(中央公論十月號)、宮澤俊義氏、『獨裁政治理論の民主的扮裝』(同、二月號)、『官僚の擡頭』(改造、七月號)、『獨裁的政治形態の本質』(中央公論、十一月號)、牧野英一氏『文化國理念と三權分立主義』(改造、十月號)、河合榮治郎氏『國家主義の批判』(同)矢内原忠雄氏『民族と平和』(中央公論、四月號)小川鄕太郎氏『軍事費論』(改造、十月號)等々。

これに加へて、關口泰、馬場恒吾、清澤洌、芦田均その他の諸氏によつて數多くの時論風のものが書かれてゐる。

これらのものゝ内容を見るに、ファッシズムに對する批評、國家主義への疑問、議會主義、立憲主義の擁護、言論の

自由の主張、國際問題における平和主義、國際主義の力説となつてゐる。經濟上の自由主義の主張は、その本來的な形においては、見當らない。また、これを代表する經濟理論家は出てゐない。しかし、資本家により、軍事的統制經濟に反對するといふ意味のものとしては、多くの機會に述べられてゐる。或は、前記小川氏の論文に見られるやうな軍事費に對する財政主義の擁護といふやうなものは、これと見ることができよう。

最後に、かゝる一般的な自由主義の新たなる擡頭に伴つて、文藝理論上において自由主義が唱へられ始めてゐる。これは、自由主義と云つても甚だ曖昧なものであり、のみならず後述するいはゆる知識階級の絶望と結びついて知識階級の新たなる獨自的イデオロギーとして主張されたものではあるが、一應注意すべきであらう。

しかし、自由主義の再登場は決して力强いものでない。それは先きに說明したるところから明かであらう。今日、自由主義の存在理由は極めて限られてゐる。加ふるに、すでにマルクシズムによつて批評し盡されてゐるからして、その理論的並びに實際的能力は人々によつて見透かされてをり、人々を根本から動かす力をもつてゐないものゝごとくである。

2 ファッシズムの展開

ファッシズム的思想の繁榮　先年來急激に勢力を得てきたファシズム的思想は、本年度においても、依然として盛んである。

いまファッシズム的思想と稱したが、これは主義の最も廣い意味においてゞある。ファッシズム自身が、本來、思想として決して純一でなく體系的でないものであるが、我々がこゝでファッシズム的思想のもとに包括せんとするものは實に多種多樣のものを含んでゐる。

第一に、ファッシズム或はトイツ的なる國民社會主義をそのまゝに受け入れ、これを名乘るものは、重要なるものとしては、本年においても依然現れてきてゐない。內容においては根本的にこれと同じであるにかゝはらず。この點については、本年度、特に注目すべき事實がある。

新官僚のイデオロギー　從來、わが國においてファッシズム的思想の擡當者の中心は軍部にあるとされた。しかし、この場合には、わが國において一のギルド的存在たる軍部が、從來政治舞臺においてブルジョアジーによつて殆んど全く押し退けられてゐたに對して、新しくその位置を取戻すといふ意味をもつてゐた。その意味において、多分に軍國主義的思想の現れであつた。ファッシズムは、そのうちに、一應の社會主義的思想を藏するものであるが、かゝるものは右の場合に缺けてゐた。

しかるに、滿洲事變以後、軍部がわが國の政治を著しく支配したことによつて、いま云つた思想は實現されると共に、この思想は新しく分化していつた。軍國主義的思想は依然としてある。が、さらに、これに加つて、先きの一應の社會主義的要求を濃厚にした思想が漸時勢力を得てきた。

この思想はいはゆる新官僚によつて代表される。先きの思想が軍部權力を中心とし、しかしこれに他の多くの勢力が結びついてゐたごとく、こんどの場合においても、新官僚が中心だとは云へ、これに他の多くのものが、例へば軍部勢力のうちの一部と結びついてゐる。さらに、新官僚自身のうちにおいても、その上層から下層まで、その間にはかなりの差異があり、雜然としてゐる。右の思想はそのうちの下層、及び中層の一部によつて懷かれるものである。具體的には、中堅どころ並びにそれ以下の官公吏が代表者である。

これらにおいては、金融資本家に對する反感は强い。しかし、それのみではない。新に、勞働者農民階級へ働きかけようとしてゐる。その限りにおいて、ある程度まで勞働者農民の要求を代辯すると共に——すなはち一應の社會主義的

思想である――無産者運動の右翼に對して大いに好意ある態度を示してゐる。

日本主義の氾濫　我々はわが國のファッシズム的思想のうちの二つのものを擧げた――軍部的ファッシズムと、より純粹なる新官僚的ファッシズムとである。このほかに、わが國のファッシズム的思想のうちには幾多のものがある。まづ一般の國粹主義もこれに數へることができよう。勿論、國粹主義は從來から存在したものであるが、近年にいたり、前と同じ社會情勢に促がされて、その存在を大きくしてきた。今日多數存在するし、いろいろな機會に勢を振ふ右翼團體の根本思想は多くこれである。しかし、右翼團體ばかりでなく、小ブルジョア層の間においてなどは、本年度においては、一般に相當に浸潤し來つてる。本年度において、滑稽な形をもつてゞあるが、この思想を表したものとして注意をひいたのは、岡部子爵のメートル法反對運動と松田文相のパパ・ママ反對論とであつたらう。

國粹主義が勢力を得てきたのは、それ自身としてと同時に、復古主義と結びついたからであると見ることができよう。その復古主義は、これまた國民主義の表現であることは固よりであるが、それ以外に特別の意味をもつてゐた。すなはち、小ブルショア・インテリゲンツイヤ等の、將來に對する絶望からのひとつの通路たる意味である。小ブルジョアとインテリゲンツイヤは今日甚しい絶望的な氣分に囚はれてゐる。この原因は、小ブルジョアとインテリゲンツイヤとについて同じではないし、且つ複雜である。が、根本的には日本資本主義の經濟的行詰りである。いづれにしても、將來に希望をもちえない彼等は、ひたすら過去に眼を向けようとしてゐる。こゝから復古主義精神が生れてきた。

それゆゑ、本年度においては、わが國の過去の政治・經濟の制度といふのでなく、舊い文化に對する憧憬、研究の精神が昂つてきたことが見られる。文學上の古典、いはゆる日本趣味といふやうなものが愛好されてきてゐる。

このことは、出版、雜誌等においても著しい。全集としても『日本精神文化大系』(金星堂)、『國學者傳記集成』(日本出版社)、『日本繪卷物集成』(雄山閣)等が見られた。

統制經濟思想　最後に、日本のファッシズム的思想のひとつに統制經濟思想がある。いはゆる統制經濟思想は、必ずしも滿洲事變後の社會情勢によつて齎されたものではない。これによつて強められたとは云へ、すでにその以前から存した。加ふるに、軍部等の他の勢力によつて提唱されたものでない。軍部勢力は、後に、軍事的な形態における統制經濟を最も明瞭に主張したが、それより先き金融資本家の最も尖鋭なる部分が唱導してゐたものである。元來、統制經濟思想は、世界資本主義が置かれた世界恐慌の――切拔け策としての――產物である。わが國の統制經濟思想もこの同じものゝ表現にほかならない。いくらかそこに特色を求めるとすれば、日本の經濟的孤立によつて特に促がされたものにすぎない。

この意味においては、統制經濟思想は、本來の狹義のファッシズム的思想には屬さない。しかし、それは二重の意味において本來のファッシズムと相似してゐる。ひとつには、かゝる統制經濟思想は本來のファッシズムと同樣な形態の獨裁政治を必要とする意味において、いまひとつには本來のファッシズムが、イタリーおよびドイツにおけるごとく、その一定の發達段階において金融資本家と全く妥協するものであるといふ意味において。

統制經濟思想は、やゝ弱い形においての資本家によつて――例へば鄕誠之助（經濟、第一號）――或は多くの經濟理論家によつて――例へば小島精一、土方成美氏等――、或は一部の政治家によつて――中野正剛――、代表されてゐる。

そして、この統制經濟思想に對しては、マルクシストの側からの有力な批評も見られた（既出の向坂逸郎『資本主義「修正」論の擡頭』猪俣津南雄『ブルジョアジーの國家改造案』、また著書として向坂逸郎『統制經濟總觀』）。

陸軍パンフレット　いはゆる陸軍パンフレットの述べるところの思想も、少くとも表面においては、この統制經濟思想であると云ふことができる。

いはゆる陸軍パンフレットは政治的な觀點から異常な問題となつたし、またそれに價するものでもあつた(『國防と軍縮』の項參照)しかし、同時に、一般思想界の問題としても、充分に注目すべきものである。なんとなれば、それはわが國軍部の思想を、實に軍部の名において、始めて發表したるものにとゞまらず、日本の廣くファッシズム的勢力の根本觀念を示したと共にさらにこの……となるべき共通思想を與へんとしたものと見ることができるからである。

固より、陸軍パンフレットの述べるところは多くの曖昧さを殘してゐる。それは、一半は理論的能力の缺乏に基くと共に、一半は多くの事情によつて餘儀なくされたものであらう。これを見拔き、陸軍パンフレットの眞意とも云ふべきものを察することはさまで困難でない。

そのことは暫くおき、陸軍パンフレットについては次のごとき諸點が注意される、——

(イ)世界觀、人生觀としての『たゝかひ』の哲學、すなはち鬪爭主義の主張。

(ロ)國防第一主義、すなはち軍國主義的思想

(ハ)政黨政治への反對、なんらかの形態における獨裁政治の要求

(ニ)金融資本の制覇に對する反感、その意味において資本主義に對する決して根本的ではないがかなりの修正の必要の力說

(ホ)統制經濟思想

(ヘ)勞働者・農民、殊に農民層に働きかけようとしてゐること。

この陸軍パンフレットに對する批判も盛んであつた。急進自由主義者、マルクシストが一齊に論難したるの觀があつた。その主なるものを擧げれば、石濱知行『軍部の經濟政策』(改造、十一月號)、芦田均『諸外國は何と見る』(同じく)、

山川均『小冊子の大波紋』(同じく)、美濃部達吉『陸軍省發表の國防論を讀む』(中央公論、十一月號)、清澤冽『「第三黨」の出現』(同じく)等々。

中で注目すべきものは、美濃部、山川、石濱氏の批評である。美濃部氏は、民主主義の立場から陸軍パンフレットにおける非立憲主義を攻擊してゐる。山川氏は、陸軍パンフレットの思想が、その反プルジョア的な扮裝にかゝはらず、世界資本主義の現段階における日本ブルジョアジーの……ものであることを暴露し、石濱氏は陸軍パンフレットに盛られた經濟理論が支離滅裂である點を指摘してゐる。

民衆の間におけるファッシズム的思想の浸透　かくのごとくに、本年度において、わが國のファッシズム的思想は盛んである。それは、前年度或は前々年度と比べて、より盛んになつたといふことはあつても、決してより衰へたといふことはない。

しかし、ファッシズム的潮流は、盛んではあるが、インテリゲンツィヤの間には歡迎せられてゐないやうである。この事實は本年度において變りない。それは、インテリゲンツィヤの關心の對象であるやうな、評論界文藝界に、このファッシズム的思想を、多かれ少かれ明確に、表現したものは、本年度も見當らないことによつて察せられよう。勿論全く然ないではない。しかし、さういふものは文學の場合には通俗小說にとゞまつてゐるが、評論の場合には一定の限定された雜誌類以外には誠に寥々たるものである。

ファッシズム的思想は知識水準の低い層の間に擴まつてゐるものゝごとくである。例へば、先きの陸軍パンフレットなども、前述のやうに、思想界においては完膚なき批評を受けたが、いはゆる國民一般の間には相當に支持されてゐることが認められるべきであらう。

かゝるファシズム的思想の動きの一の現れは、年末近くなつての『維新』なるファッシズム的大衆雜誌の刊行となつ

て現はれてゐる。

この傾向がやがていかなる結果を示すかは昭和十年において最も興味ある問題であらう。」

3 宗教復興

一般思想界において、マルクシズムの退潮、ファッシズム的思想の弘通等よりも、本年度において、ある意味からは最も人々の眼を惹いたものは、宗教復興であつた。

宗教復興の淺由　本年度、突如として起つた宗教復興の聲は、その緣由は、本年の中頃近く、ラヂオの『聖典講義』なるものにおいて、友松圓諦氏が『法句經講義』を試み、次いで高神覺昇氏の『般若心經講義』が行はれ、これが歡迎を受けた。殊に、友松圓諦氏の講義は異常な喝采を博した。この歡迎を見て、出版業者が、これを出版を企てたところ、非常な賣れゆきを示した。そこで、友松圓諦氏等はジャナリズムの人氣者となり、その論文、著書等は引つぱり凧となり、これに關聯して、他の宗教書の刊行が行はれ、宗教に關する種々なる論議も生れた。かくして、宗教復興は形造られたのである。

その後、この勢はずつと繼續してゐる。まづ、出版においては前記二書のほかに、山邊習學『佛教の要義』(法藏館)井川定慶『宗教入門の知識』(非凡閣)淺野研眞『社會宗教としての佛教』(大雄閣)、玉置韜晃『觀音經禮讃』(日本放送協會、ラヂオ講義)、天岫接三『白隱禪師坐禪和讃』(佛教今鑑社、ラヂオ講義)、友松圓諦『宗教讀本』(日本評論社)、梅原眞隆『歎異鈔講和』(明治書院、ラヂオ講義)、友松圓諦『阿含經』(第一書房、ラヂオ講義)、勝平大喜『十牛圖講話』、飯田鑑隱『禪學讀本』(中央佛教社)、菅圓吉『宗教復興』(日本評論社)等々。全集としても『佛教聖典を語る叢書』(大東出版社)『白穩和尚全集』(龍吟社)、『佛教菩樂全集』(佛教聖藝協會)、『佛教聖典講義大系』(佛教聖典刊行會)等々がある。このほか、

に、舊來と同じ純學術的なる佛教および基督的に關する研究の類は、舊の如く刊行せられてゐるし、上に擧げられたものも決して全部を盡したるものではない。

雜誌、特に一般雜誌においても、宗教の問題は盛んに論じられるにいたつた。その一般を示せば次のごとくである。——友松圓諦『現代における佛教の意義』(改造、八月號)、『現代社會と宗教』(中央公論、八月號)、『佛教復興座談會』(文藝春秋)、大宅壯一『宗教インフレ時代』(改造、十月號)、岡本一平・かの子『三大寺管長貫主を訪ふ』(同、十二月號)、浮草阿闍梨『流行僧評論』(文藝春秋、十二月號)等々。

宗教復興に對するマルクシストの側からの批判は劇合に少い。大森義太郎氏『宗教復興』(改造、八月號、社會時評)、森戸辰男氏『宗教復興私見』(東朝、九・一〇・八—一二)その他である。これらのものにおいても、根本的な宗教の批判でなく、今日何故に宗教が復興してきたか、その意義は如何といふやうなことが專らである。彼等にあつて、原理的な宗教批判はすでに一應なされてゐると考へられてゐるのであらう。

佛教復興としての宗教復興　これの著書、論文が明白に物語つてゐる如く、今日喧傳される宗教復興は、實は、佛教復興にほかならない。基督教の如きは、この趨勢に多少刺戟されたところは見えるが(例へば、前の菅圓吉氏の著書)別に特に盛んになつたといふことはない。民間宗教は盛んである。殊に、本年においては、『ひとのみち』教團なるものが問題になつた。これは本部を大阪にもつものであるが、近頃は關東方面にも盛んになつてきてゐる。その信者は既に六十萬と云はれてゐる。しかし、その信仰個條は極めて簡單であり、儀式等も大したものもなく、宗教としての形態は甚だ曖昧である。むしろ、治病の御利益によつて人をひきつけてゐるものゝ如くである(前記、大宅・高津氏の論文はこれを扱つてゐる)。いづれにしても、かゝる種類の曖昧なる宗教の民間に行はれてゐることは、本年に限らず、以前よりして著しい現象である。それは、一定の原因をもつことは疑ふべくもないとしても、これをいはゆる宗教復興に數へ

ることはできないであらう。

いはゆる宗教復興が佛教復興であることは、今日の宗教復興の意味を示してゐる。すなはち、今日の宗教復興は、政治の分野において強く我々の眼をひくところの國粹主義、國民主義の勃興の隨伴現象である。佛教も、本來よりすれば、傳來物であるが、しかし長く日本の歴史のうちに織り込まれ、全く日本的なものとなつてゐる。國民主義、國粹主義があらゆる日本的なるものを持ち出してくる場合、佛教はそのひとつとして、當然に、擧げられるべきものなのである。人、或は、その理由よりすれば、佛教ではなく、神道の隆盛を來すべきことを思ふかもしれない。事實、祖先崇拜として。の神道は最近非常に盛んになつてきてゐる——神社の修建、神社に對する尊崇の昂まり等。しかし、神道は宗教としての色彩が薄いために、宗教復興としては佛教に地位を讓らざるをえないのである。

宗教復興の根源　さきに、今日の宗教復興が、むしろ偶然なる原因によつて招來されたことを述べた。しかり、これをもつて今日の宗教復興が專ら偶然的であるとすることはできない。反對である。そして、そのことは二重に確められる。第一に、宗教復興の準備現象ともいふべきものは、本年に限らす近年著しかつた。さきの種々の民間宗教の驚くべき氾濫などはそのひとつである。近年は、特に農村等にあつては、宗教的氣運は濃かつた。本年度における突如としての宗教復興運動はこれに形を與へたにほかならぬと見ることができる。第二に、假りに出發はラヂオ、出版等の偶然的なものにあつたにせよ、その後においては單に表面的なものにとゞまらず、民衆の間に相當根深くつき入てゐる。すなはち今日では決して偶然的なものでなくなつてゐる。

それならばなぜ、今日宗教は復興するか。國民主義、國粹主義によつて引き出されたものである點は、すでに觀た。これと同じやうな意味を宗教復興に對してもつものは、現代の爲政者の宗教奬勵である。數年前よりわが國においてマルクシズムが盛んになり、急速に都會のみならず農村に浸透し、やがて共産黨運動となるのを見るや、爲政者は一方に

おいて取締りを嚴重にすると共に、いはゆる思想善導といふことを試みた。そのいはゆる思想善導において、宗教が重視された。爲政者はあらゆる手段をもつて、人々、特に學生、一般青年をして眼を宗教に向けしむるべく努力した。新しく宗教普及の協會を作り、或は青年團、學校において宗教に關する講演を廣く行はしめる、或は宗教學校に對して從來よりも寛大な態度を取る等のことが行はれた。この爲政者の處置は、全的に成功はしなかつたにしても、相當の影響をもつたことは爭はれない。これが今日の宗教復興のひとつの根據をなしてゐる。

しかし、もとより、これらが有力に働くためには、民衆をして宗教を求めることに傾かしむるが如き現實の社會的事情が存しなければならぬ。しかもこれはあつた。すなはち、世の不安・行詰りの狀態である。そして、これの最も根本的なものは經濟的不安と行詰りであらう。わが國において不況は既に長く續いてゐる。軍需インフレによつてよし一部は賑はされてゐるにしても、一般の民衆の生活は極度に困難してゐる。就中、前途に對してなんらの光明を認めることができない。このことは、民衆をして現實の生活に對する關心の喪失、といふより餘儀なくも外に逸らさうすることを導いてゐる。經濟的のものゝ上には政治的、社會的不安と行詰りが立つてゐる。今日の日本の社會は、いかにも、なんとなく落着かない。非常に殺伐の氣が漲つてゐる。これは民衆をして脅えしめ、不安の感じをもたせる。一方には、疑獄事件の頻出であるとかその他、民衆が信頼してゐた人々或は方面における頽廢的の現象が多い。これは民衆をして現實の世界に對する絶望の氣持に囚はしめる。

知識の低い民衆の間に、宗教を求める氣持の起つてきたことは、かういふ事情によつて醸成されてゐるのである。この場合、現在の日本の民衆がはなはだ非科學的であるといふことは、さきに云つた邪教類を流行せしめる所以となつてゐる。

しかし、よい知識あるものにおいては、さらに、これまで勢力をもつてゐたあれやこれやの思想の行詰りが、さきの

ものに加へて、宗教的氣分の原因になつてをると云へよう。例へば、一時はマルクシズムが大きな力をもつてゐたが、そのマルクシズムの實際の動きたるプロレタリア運動が全く衰微してしまつたことは、人々をしてマルクシズムに對する信頼を失はしめた。しかも、自由主義は、いまは既に試驗濟みであつて、人々はこれにもまた纏る氣をもたない。それでは最近のフッシズム的思想はといへば、これに對してもまた懐疑的たらざるをえない。フアッシズム運動が有力には伸びないのみならず、人々は思想的に容易にフアッシズムに行きえない。こゝにおいて、人は全く絶望的たらざるをえない。そこで、宗教に向はうとするのである。

なほ、フアッシズム的思想について注意すべきことがある。いま云つたやうに、フアッシズム的思想は、少くとも今日の日本において、人々をひつぱりえないが、よしひつぱりえたとしても決して宗教的氣分と矛盾しない。非合理主義的であり、英雄崇拜的であるフアッシズム思想は宗教と充分に兩立するのである。

それはしばらくおき、かくのごとく今日の宗教復興が不安と絶望の産物であることは、いはゆる宗教復興が佛教復興であることからも見られる。佛教は、少くともその今日の形においては、最も消極的なる、最も非能動的なるものである。人はこゝでは、專ら儀式に頼つてゐればよく、精神を積極的に働かす必要はない。これは不安と絶望の氣持に叶ふ。これに反して、基督教は、わが國においては舊教は振はず新教が支配的勢力をもつてゐるが、新教はそのうちに初期資本主義的精神を宿せるものとして、積極的、能動的である。殊にわが國へは資本主義と共に輸入され、一層然りである。かゝる基督教はさきの事情に適しない。だから、基督教は復興しないのである。

知識階級と宗教復興　それでは、宗教復興は、今後、益々勢をうるであらうか。宗教復興が、上述の如く、決して偶然的でないかぎりでは、そのことは肯定されなければならぬ。とりわけ、一般民衆の間においては、決して直ちに退潮するといふやうなことはなからう。來年度においても、おそらく、勢を持續すると思はれる。

しかし、知識階級の間においてはどうか。これも、如上の關係よりして、一應宗教に走るものゝ續くであらうことは確かである。その意味では、宗教復興はこゝでも暫く支配的現象をなすであらう。たゞ、近代科學の洗禮を受けた知識階級が今日の宗教に滿足できないことは想像するに難くない。そこで、知識階級は一度は宗教に赴いても、こゝでもまた失望し引き返すであらうと思はれる。その意味では、宗教復興は盛んになりえない。よし宗教復興があるとしても、佛教、基督教等の所成宗教でなく、なんらかの新しい宗教、といふよりも何か宗教的なある新しいものへの信仰、それに對する求道としてゞあらう。

この關係を如實に示すものか、宗教復興は、すでに述べたところからも明かであるが、特に最近には、知識のより低い民衆の層、或は婦人に向ひつゝあることが見られる。創刊せられた『大法輪』なる雜誌は大衆雜誌の形をとつてゐるし、岡本かの子著『佛教讀本』(大東出版社)などは、その内容、婦人讀者に適したものであり、低調である。また、一般に雜誌にすれば、高級雜誌でなく、いはゆる大衆雜誌に宗教物の掲げられることが盛んである。

4　知識階級の動向

本年における知識階級の動向の意義　最後に本年の一般思想界において注意せられるのは知識階級そのものゝ動向であらう。これが思想界の問題として取り上げられたのは、本年度のおそくなつてからであつたが、多くの問題、例へば、いまの宗教復興等は、すでに述べたごとく、この知識階級の一定の動向の表れであつた。

わが國においては知識階級は以前よりして重要な意義をもつてゐる——その數も比較的には多かつた、いはゆる教育の普及の結果として。これが、從來は、知的勞働者(サラリーマン)としてどしどし吸收せられ、且又、會社、銀行、官衙等においてそれらの就職者は滯りなく昇進していつた。それゆゑに、別に知識階級の問題といふやうなこともな

かつた。しかるに、數年前よりして、まづ、知識階級の就職難、失業が著しくなつてきた。いはんや、その榮達の如きは問題にならなくなつてきた。これは日本經濟が既に充分なる知識人を吸收し盡してゐたところへ、經濟恐慌は經濟の規模を縮少することを命じたからであつた。

知識階級のマルクシズムに對する失望　この形勢は、勿論他の諸條件と相俟つて、知識階級の左翼化を招來した。まづ學生層より起つて、次いで下級サラリーマン、いはゆる自由職業者の間に左翼理論としてのマルクシズムに對する興味と關心は非常な勢ひで高まつた。三四年前のマルクシズム、殊にプロレタリア文學の流行はこの波に乘つたものである。

そして、日本共產黨の運動も、その實質に相寓する以上に、大きなものとなつて爲政者を驚かしたのであつた。

しかし、これに對する反動はまづその日本共產黨の失敗から起つてきた。日本共產黨が、かくてむしろ多く知識階級の黨となつた結果は、黨自身腐敗し。ギャング事件その他忌むべき多くの事件を起して漸く信賴を失つてきた。と共に、當局の猛烈な取締りによつて、一方においてはなんらの活動も出來なくされ、他方そのうちから轉向者の續出することによつて、遂に日本共產黨は文字どほり壞滅するに等しかつた。

そこへ、滿洲事件後、急激な社會情勢の變化が起つた。日本の社會は、軍國主義、保守主義、國粹主義の空氣をもつて滿たされた。マルクシズムはこの空氣に壓倒せられて、甚しく褪色せしめられた。この褪色には二つの理由が考へられる。第一に、根本的なるものとして、マルクシズムの實踐的な運動は、力强く、この反動的潮流に對してなんら有力に戰ふことができなかつた。戰ふどころか、力强い抵抗をすらなしえなかつた。第二に、言論の分野においても、當局の嚴重なる言論取締りのために、少しも華々しい活動を示すことができなかつた。この形勢は、滿洲事件後、ずつと續いた。そこで、以前マルクシズムを謳歌した知識階級はマルクシズムに對する信賴を喪つてきたのである。これは本年に

入つて漸く著しく眼についてきた。

知識階級の絕望　それならば、知識階級は今日他の思想に行きうるであらうか。自由主義はすでに時代性を全然もつてゐない。問題はファッシズムであるが、ファッシズムに對しては知識階級は同感できない。これはひとりわが國にかぎらず、西歐、アメリカの他の國々においても同じことである。知識階級はファッシズムのもつ非文化性、强權主義暴力主義を受け入れることができないのである。殊に、わが國の知識階級は、西歐、アメリカのそれと比べて、なほ進歩的である。それゆゑ、彼等は、よしマルクシズムに失望したとしても、ファッシズムに赴くこともできないのである。知識階級は行くべきところがない。

今日、わが國の知識階級は思想的歸趨に全く迷つてゐる。この結果は、本年において注目される二つの動向となつてゐる。一は、そのまゝ絕望的、自棄的になることである。そして、たゞ享樂の世界に走る。この傾向は知識階級のうちの學生層によつてまづ代表されてゐる。學生層の大部分は、娛樂としての映畫、スポーツ、ダンス、カフエー等に耽つてゐる。本年、これらに對する當局の取締りが嚴重になつた。先きに學生のダンスホール入りを禁じた當局は、次には喫茶店以外のカフエーに學生の出入することを禁じた。この當局の態度には最近新官僚の間に流れるナチス的嚴格主義が含まれてゐると云へ。當局がかゝる處置に出たことは、學生層のさういふ享樂的傾向が本年にはいかにも强くなつてきたことを意味してもゐるであらう。

學生層に限らない。本年における新聞社會面的事件としては上流階級の男女の不行跡問題があつた。これは本來上流階級の朽廢を語る意味をもつものではあるが、しかしまた一般の知識階級の享樂的態度を示唆する。

絕望の極は自殺である。本年は自殺者の增加が世の注意をひいた。その自殺者がいかなる階級、社會層に屬するものであるかはわが國においては未だ統計等によつて示されてゐないが、アメリカにおいては使用人（エンプロイイ、すな

はち、サラリーマン、從つて知識階級に屬する）に多いことが明かにされてゐる。或はわが國においても同樣のことが云はれるのではないかと思ふ。

最近の宗教復興が、また、かゝる知識階級の絶望に根を置いてゐることは既述した。

宗教復興と並んで虚無主義的思想の流行が文壇の一部に強く見られてきたのも本年である。後に觸れるところであるが（『わが國文藝』の項參照）、シエストフの評論が頻りにもてはやされた――シエストフは文壇においてのみならず思想界においても問題になつた、三木清『シエストフ的不安について』（改造、九月號）はそれである。シエストフの思想がはたして虚無主義的のものであるか否かは問題であるが、わが國において受け取られたのはさういふものとしてである。今日はまだ虚無主義を明白に唱導するものは出てきてゐないが、氣分としてさういふものが強く支配してゐることは疑もない。また、これは單に文壇の一角にとゞまつてゐるものではなく、知識階級全體の少くとも一つの有力な思想を代表してゐることは疑へない。

知識階級論の再現　かゝる狀況に面して、新しく知識階級が論じ始められたことは、蓋し當然であらう。年末近く。かなり多くの知識階級論が發表された――青野季吉『能動的精神の擡頭について』（行動、十一月號）、大森義太郎『現代知識階の困惑』（改造、十一月號）向坂逸郎『インテリと政治』（經濟往來、十二月號）、井原紀『知識階級に霧くもの』（行動、十二月號）室伏高信『知識階級は何故困惑するか』（維新、十二月號）『知識階級を語る座談會』（行動、十二月號）等々。

青野氏の論文は、最近知識階級について、知識階級たることを自覺し、それから再出發し進んでゆかうとする態度が現れてきたことを、若干の文藝作品について明かにしたものである。

その青野氏の對象としたやうな見解は『知識階級を語る座談會』において、春山行夫、舟橋聖一、多少違つた形において阿部知二等によつて述べられてゐる。それは、『知識階級といふのは今まで中間の階級で、……沒落階級である

といふ風に、みんな絶望してゐたですね、ところが、……中間的な階級としての知識階級といふものゝ自覺とか、またそこから究極化、極端化された理論を現實的に見なほすとか、修正するとか、さういふ風な思想が起きたから、新しく知識階級が問題になる餘地ができた……』いふやうに云ひ表されてゐる。これが實體においてどういふものであるかは充分には明白でないが（『文藝』の項參照）、ひとつの知識階級獨立論と考へて大過ないであらう。

大森氏の論文は、知識階級に關する一般論に出發して、現代日本の知識階級の困惑を指摘し最後に、現代日本の知識階級は進歩的氣持をもつてゐるのであるから、行動は最少限度に限つてもこれを生かしてゆくことが、困惑を切り拔ける所以であることを說いたものである。

知識階級の前途　知識階級獨立論、或は知識階級における『能動的精神』は、存在することは存在するにしても、廣汎なる知識階級の全層のうちでは極めて一少部分であり、他の大部分がこれを同じくもつてゐるかどうか、またこれに導かれてゆくかどうかは大いに問題であらう。のみならず、知識階級獨立論はまだ云はゞ消極的規定であつて、自覺したる後果していづこに至るべきかはなんら明白にされてゐない。

大森氏の說くところに對しては、さういふことは既に知識階級の經驗しきつたものであるとの批評が多く出された。よしさうでないしても、今日の狀態においては、大森氏の提案の如くにして、全體としての知識階級が一歩を動かすであらうといふことは極めて困難であらうと考へられる。

そこで、暫くは智識階級を支配するものは今日見られるところの絶望狀態であらう。そして、知識階級のうちの遲れた層は、多かれ少かれファッシズムに引きつけられてゆくといふことは、充分に考へられるところである。

從つてまた、來るべき昭和十年の一般思想界には、同じやうな無氣力狀態と混亂が支配するであらうことが云はれる。

B、世界文藝

1 總觀

全世界はすでにながらく經濟恐慌のうちにある。ありとあらゆる恐慌克服策が講じられてゐるにもかゝはらず、一九三四年にまた、世界は經濟恐慌に始まり經濟恐慌に終らうとしてゐる。そして、この結果は、深刻な戰爭の危機が全世界を覆つてゐる、中歐に、シベリヤに、太平洋にその危機はいまにも爆發しようとしてゐる。一方においては、獨裁政治がファッシズムとして、或はナチスとして、或は『ニューディル』として、全世界を席卷してゐる。これが、一九三四年の世界のすがたである。

この現實が世界の文藝に反映しない筈はない。と云つても、藝術は人里を遠い花園であり、それぞれの國々の古い傳統の上に生えてゐるからして、世界の文學を一括して、そこにさきの現實の反映を見出すといふことは甚だ困難、殆んど不可能に近い。しかし、それでも、多少の無理を冒せば、そこになんかしらの傾向を見てとることが全然できないでもなからう。

いはゆる純粹藝術小說の行詰り　現代において純粹藝術小說といへば心理小說として考へられる。この心理小說に對する疑惑が、本年度、芽を出してきたやうに思はれる。今日の日本文學に、最も親しみ深くもあれば影響の最も大きくもある外國文學たる、フランス文學、そのフランスでは今年は、題材の貧困が叫ばれてゐる。そして、それは從來の

方向すなはち心理小說を主とするものから新しい方向へ移らうとしてゐる際の困難を云ひ表してゐるものなのである。

ナチス・ドイツの若い作家達によつて心理解剖が嫌はれてきてゐるといふことは別に驚くに當らないとして、イギリスで、あのジョイスが、最近にはどうやら『意識の終局點』まできてしまつたと云はれるやうになつたのは、注意すべきことではあるまいか。

事實の探求　それならば、新しく、どこへ向はうとするのであらうか。それはまだ明確ではないと云はなければなるまい。しかし、こゝに心の內部からふたゝび外の事實に眼を向けようとするひとつの志向がある。

必ずしも本年に始まるものでなないが、傳記文學の流行は全世界にわたつて著しいものである。本年においては激しさを加へてきてゐるやうである。傳記文學は、もと、大戰後の悲慘な現實から「ふるき、よかりし時代」に逃避するといふ意味のものであつたであらうが、今日は違つてきてゐる。それは、今日では、困難なる時代に遭遇して英雄を待望するといふ心の現れであらうが、同時に歷史的事實に對する探求の意志のほどばしりでもあるまいか。

事實は、かく縱にばかりでなく、また橫にも涉獵されてゐる。作家達は爭つて、アフリカ、支那、メキシコ等々に赴いて、おびたゞしい報告文學を生んでゐる。その作家達はいはゆるモダニスト作家であるから、そこに獵奇の精神がはたらいてゐることは、否定できない。しかし、彼等はやはり事實を愛してゐるのではないか。

ナチスの爲政者は文學者に向つて、表現派や新卽物主義やをやめて、事實小說を生め記錄文學を出せと命じてゐる。

社會意識の强調　世界の今日のやうな模樣が、單に事實を探すといふのでなく、强く社會意識に目醒めることを文學に要求してこないとしたら、むしろ不思議であらう。果して、小說に、戲曲にさらには映畫においても、社會意識を盛つたものが續々現れてきたことは、これこそ最近の世界文藝の著しい傾向である。

その場合、最も苛烈な經濟恐慌に見舞れてゐるアメリカの文學にこの傾向が目立つてゐるのは當然であらう。しかし、

ひとりアメリカにとどまらない。イギリスにおいても、フランスにおいても、ジイドやフォルナンデスを始めとする藝術家のいはゆる左翼化はわが國にもすでによく傳へられてゐる。

おもしろいのは、プロレタリアの國、ソヴィエット・ロシヤにおいて社會意識の新たに要求されてゐることである。だが、これは四角な社會意識を乘り超えて、『工場と職場の鬪爭やデモンストレーションのほかに廣い現實』にまで社會意識を漲らせてゆけといふ意味である。

發るモダアニズム文學　しかし、かういふ世界的な流れの中にあつて、どこの國にも文學の食卓にはひとつふたつのモダアニズム文學の皿が置かれてゐることを見落してはならない。人は陰欝なる暗澹たる氣持を慰めるため、明朗華麗な味ひを必要とすることは事實である。

それにしても、繰り返していへば、世界文學をおまねく通じて見るといふことは困難である。それぞれの國について見よう。まづ、海を越えればすぐ近きアメリカの文學から始めるとするか。

2　アメリカ

傳記文學の流行　傳文記學の流行が最近に限る譯でないことは既に述べたが、アメリカにおいてもここ數年來の著しい風潮を爲してゐる。しかし特に今年度は非常な隆盛を示し、一人の歴史上の人物に就て三種四種もの傳記が競爭的に出版される有樣である。それはナチスに國を追はれた卓拔な傳記作家エミイル・ルードキッヒが『これは文學ぢやない。インダストリだ。』と呆れた嘆息を洩したほどである。

かく、戰後文學の一つの特徴としてイギリスに始つた流行が今海を越えて恐る可き勢で氾濫して居る事は興味がある。それがアメリカ過去の英雄的人物を多く描き乍ら、イギリスの戰後の文學が、さきに云つたごとく多く過去への追憶であつたのに對して、アメリカの流行の傳記文學は、多くそれぞれの歴史上の人物を英雄として祭り上げて居る。こゝに時代的な英雄待望の心理が見られる中で異色あるのは、『惡の女帝』であらう。亡命中のアレキサンダア大公が祖母キャザリンの生涯を、最もリヤリスティックに、むしろ現實暴露的に描いたものである。大公の文學的才能については既に定評があり、興味を以て迎へられた。また傳記文學ではないが、歴史的作物たる劇評家アレキサンダア・ウウルコットの隨筆集『ローマが燒けるまで』が非常によく賣れて、リオン・フオイヒトワンガーの小說『オツバーマン家』と並んでベストセラーズの中に數へられた。

いはゆるモダアニズム文學の清算　市場の文學から純文學へ目を轉じると、著しい現象はアメリカモダアニズム文學が、最近に於て、大いに清算されたことである。嘗てモダアニストの先頭にゐたアアネスト・ヘミングウエイは、國內作家に轉じて人氣を攫んだが、最近には『スクライブナアズ』のやうな大一般雜誌に書くことを始めたが、これは純文學の主流に棹さす人でなくなつたことを意味するものである、近作『勝利者は何物も得る所なし』その他多くのモダアニスト作家達が大雜誌、流行雜誌に進出して、ジヤーナリスティクに繁榮してはゐるが、それだけ純文學からは離れてしまつた。

モダアニスト作家の思想的動搖は、また、彼等の多くをしてプロレタリア文藝陣へと轉向の途をとらしめてゐる。ニユーヨークのプロレタリア雜誌『プラスト』に走つたウイリアム・カルロス・ウイリアムスはその例である。ジョン・ドス・パンスの最近の旅行記的エッセイ『あらゆる國々で』を見ても、被壓迫階級に對する彼の深い同情と資本主義に對する憤りとが讀まれる。

左翼文學の隆盛　ひとり通俗作家の轉向のみならず、アメリカ文學の主流が左翼化の傾向を示してゐることは爭はれない。アメリカでひろく讀まれたのみならず、諸方の國語に飜譯され世界的賣行きを示したアグネス・スメドレーの『大地の娘』もプロビンシヤリズムの作品にしても、その取るものは素朴な田舍のユーモアから、貧農の生活を描き出す

現實の直視へと轉じつゝあり、例へばジョージア地方の貧農の生活を扱つたアースキン・カルドウエルの諸作等はそれである。（彼の小說『タバコ・ロード』は最近戲曲化された）。

更に代表的な文藝雜誌に就て見ても、本年度の最も大きな動きは、アメリカ・プロレタリア文學において見出される。季刊『モダン・コータリ』（は昨年月刊『モダン・マンスリ』になつたが、今年その一週年記念に際して、マックス・イーストマン、曾てジョン・リード・クラブのメンバーであつたエドモンド・ウイルソン等をそのスタッフに加へ、全誌を擧げてファッシズムとアメリカに就いて論じた。『モダン・マンスリー』と並び立つ『ニュー・マッセズ』は益々發展してゐるが、これは勞働者に多く讀者を持つてゐるだけ一層刮目すべきものがある。

『ニュー・マッセズ』は從來の月刊文學雜誌から、この一月左翼的文化綜合雜誌へと飛躍し（その副產物としてニューヨークに『バルチザン・レヴュウ』、ハリウッドに『バルチザン』が生れた）、さらに大衆的方向に前進して、ゴールドの例の周到なる評論、最近とみに進境を見せたグランヴィル・ヒックスの論文を中心に、新しい働き手の獲得と、自由主義左翼の進步的作家、評論家への紙面解放に努めてゐる。四月の誌上に『アメリカよ』を發表した詩人クレイムボーグの獲得はその優なるものである。

これらを以て直ちに過去の弱點たる狹隘性を淸算したものと見ることは出來ないが、今後に於て日本の左翼文學が、このアメリカ・プロレタリア文學に學ぶところは決してすくなくあるまい。

地方主義文學その他　この二つのプロレタリア雜誌を除けば、アメリカの純文藝雜誌に見るべき動きは殆んどないと云つていゝ。たゞ最近日本でも多少論じられてゐるプロヴィンシヤリズム文學を代表するものとして『アメリカン・レビュウ』の活動が注目される。今年の評論を重要題目だけ拾つてみると、傳統と正統、アメリカ藝術と歐洲文化（三月）、保守主義の任務（四月）、自由と權威（十月）。これらを見ても察しられぬではないが、プロヴインシヤリズム文學はそ

の文學的聯結として漸く懷古趣味に落ちてゆきつゝあるやうである。それは曾てカルバートンによつて指摘されたとほりである。それは暫く措き、右の例としてダビッド・コーネル・デジョングは田舍のユーモアを描いてプロヴィンシヤリズムの前線に立つ新人であるが、今年は、オランダから移住した一家族の商業的成功の記錄を書き、地方的小說に過去を語りはじめてゐる。

最後に、聞こえたアメリカ作家達の消息として、ウイリアム・フオクナーの新しい短篇小說集『ドクタア・マアチノ』が、ニューヨークで出版され、既成大家のうちでは、シンクレア・ルイスが（ロイド・ルイスと合作ではあるが）、珍らしく南北戰爭時代に取材した戲曲の製作に力をそゝいでゐると傳へられてゐる。『ウイリアム・フオックス』を書いたアプトン・シンクレアは、本年政治方面に進出して、カリフォルニアから貧乏を根絕するといふスローガンを揭げてカリフオルニヤ知事の民主黨候補として起ち、一時優勢を傳へられて興味を懸けられたが、遂に落選した報はまだ耳新しい。

3　イギリス

マルクシズムとリベラリズム　アメリカからイギリスに移ると模樣は大分に異つてゐる。この國では、現在の世界的危機は意識されてはゐるが、それにも拘らずこれを超克する方向には向はず、却つてたゞ回避するといふ傾向を持つ。そして、この傾向は本年度に於て、行詰りの袋小路を更に一步踏み込んで行つたに過ぎない觀がある。對岸のアメリカにプロレタリア文藝陣の華々しい躍進があるのと對比すれば、まことに消極的である。

たゞ嘗つてロマンテイク批評家であり、今もなほ多分にロマンテイシズムを保存してゐるイギリスの批評家ジョン・ミドルトン・マリのコミュニズム轉向が眼をひく。コミュニズムと云つても、どこ迄もイギリス的コミュニズムである。彼によると『ヨーロッパ的マルクシズムは個性の自由を認めるが、ロシア的マルクシズムはかゝるものを認めず、ヒュ

ーマニズムの立場と相容れない』のである。すなはち、彼のはヒューマニズム的コミュニズムである。

マルクシズムとリベラリズムに關しては、イギリス文壇において、今年の夏頃『ニュー・ステーツマン』に約三ヶ月に渉つて論爭が交され、進歩的保守的色々の立場の人々が入亂れた。問題もいろいろ分岐してゐるが、イギリスの思想の母胎であるリベラリズムとしてマルクシズムを咀嚼し得るかどうかと云ふことが中心であつたらしく見受けられる。

昨年來マルクス『資本論』がエヴリマン叢書中三四位の賣行きを見せてもをり、イギリス知識階級の間にマルクシズムが新しく興味をもたれてゐることが知られるが文學の上にこの反映は未だ見出されない。現在イギリスの作家達はマリを左に、右にT・S・エリオットを持つて、その中間に殘された樣々な地位を占めてゐるといふことができようか。その、新カソリック主義の代表者エリオットは今年二月、ロンドンのフェバーから『異神を求めて』を上梓して文壇に大きな波紋を投げてゐる。內容は昨年彼がヴァジニア大學で試みた講演であるが、彼自身のモラルを說いてロマン主義的個人主義を攻擊してゐる。ついでにいへば、エリオットはリベラリズムを罪惡の補助的根源であると述べたのに對して、イギリスの評論壇の正統派たるアアサア・クキラ・クウチが論爭を試み、注意をひいた。これは現在のイギリス文藝思潮の主流とも云ふべきものがどの邊に低徊しつゝあるかを物語つてゐると云へよう。

純粹藝術派の動き　一方、ジェイムス・ジョイスを以て代表される『意識の流れ』的文學は、その主觀的な方法が漸く單調に陷り、行き詰りに面してゐる。これを避けようとしてあらゆる變化を求める努力は、言葉の新しい使用、新造、ますます離解なる表現となり、『ユリシイズ』以來の大作『ワーク・イン・プログレス』執筆中のジョイスは、ワンセンテンスに世界中の主な河川の名を織り込んだりしてゐると云ふ。

ジョイスが、かくのごとくに新く內なる心の世界を掘り續けてゐるときに、イギリス文學の他のひとりの藝術派の代表オルダス・ハックスレーは今年長い間の沈默を破つて『メキシコ灣の彼方』と題する旅行見聞記を發表した。グアテ

マラ、メキシコ等に永く住んで原始と文明との交錯した住民の生活をよく觀てをる。

これは、ジョイスと同じ、たゞ路を異にした現實回避の傾向を表すものであり、多くの若い作家、批評を憂鬱な人生描寫にひき込むものと云はれてゐる。しかし、ハックスレーがこれらの地方の癌とも云ふべき國家的感情のもつれからいつも國際聯盟に手を燒かせる地方的戰爭などを見てゐることは、ハックスレーのヒューマニズムを示したものと考へることができる。

D・Hローレンスも依然愛好されてゐる。我國でもその書簡集等が譯出されたりしてゐるが、ローレンス愛好者にとつては、メキシコに在住した故人の生活を回想する部分等も見逃し難いであらう。

イギリスのモダニスト作家　ジョイス、ローレンス、ハックスレー三人に代表される純文學の懷疑的な主流に對して、出世作『グッド・コンパニオン』の明朗な色調と機智と諧謔とを以て新しい旗幟を揭げたJ・B・プリーストリーは、モダニスト作家として一時はイギリス文壇の一轉機かと云はれたほどに反響を呼んだが、その後矢繼早やに旅行記等を發表しつゝ、殆んど通俗作家の列に落ちてしまつた。そして、今年もニューヨークで『イギリス旅行』を出してゐるが、以前の輕快さは最早見られない。

注目すべき女流作家の動き　大戰後イギリス文壇に登つた女流作家の數は夥だしいが、今年女流の側では、スーザン・マイルスの『橋を渡りゆく盲人』が見るべき長篇であり、八百頁を越え田舍の或る家族の三代に亘る生活史である。この小說を批評したE・B・ジョーンズによると、『かうした長篇は男の作家達の間では段々影をひそめて、忍耐强いこの種の女流作家に期待される。』

ショウとウェルズ　かく女性作家が進出してきたのは、現在のイギリス文學にどつしりしたリアリズムがなく、文壇中堅作家の多くは、大戰後の疲勞と幻滅の裡に彷徨しながら『人生の一片』に取材してゐるのがその機會を與へたもの

であるが、この中に戰前に圓熟期を持つた既成大家ショウやウェルズは、特に本年度の活躍を作品の上に見ることはできないけれども、一般の尊敬は嘗ての最盛時にも劣らぬほどに大きい、彼等は單に偉大なる遺物ではなく、新しいイギリス文學の時代が彼等の準備したものから今後逞しい新人達によつて現れるかも知れないのである。だが、尠くとも現に活動しつゝある人々によつてではないと云へよう。

詩、戯曲　終りに詩、戯曲方面を一瞥すると新作戯曲は今年も多く現れて上演されたが、久しく沈默してゐた老大家ジェームス・バリが三幕物喜劇を發表し、ノエル・カワアドは『風俗畫』をロンドンで上演した後、戯曲集『プレイバード』を新たに出した。非常な賣行きを見せたルイス・ゴールデイングの『マグノリア街』も作者とA・R・ローリン共同脚色で、本年戯曲化され、コクランによつて上演された。なほ、ゴールデイングは今年に入つて五百頁の大作『シルバアの五人娘』を書いてゐる。

詩壇ではエズラ・パウンドが今春『讀書のABC』を書き、先の挑戰的パンフレットを敷衍しつゝ、英文學の殆んど凡ての古典的大家に對する辛辣な逆説的批判を企てゝ反響を呼んでゐる他、リチャーズ『イマジネーション論』、サザアランド『詩の媒體』等の詩論がある。詩集にはウインダム・ルイス『一途の歌』がある。

詩人であり社會主義者であつたウイリアム・モリスの今年は生誕百年祭に當り、日本と時を同じくして故人を偲ぶ展覽會が盛大に催された。

4　フランス

反ファッシズムの運動　今日のわが國文壇を動かしてゐるものは、アメリカ文學でもなければイギリス文學でもなく、實にフランス文學である。

最近日本の文壇では、不安の文學が盛んに輸入されてゐるが、フランス本國の作家達は既にとつくに『逃亡の時代』を終へ、一九三四年、彼等の再建の途をさらに一歩進めてゐる。まづ、ジイド及びジイドを續つて行動するフランスの革命的インテリゲンチヤによつて宣揚されるコミュニズムの思想が、今年五月にフランス知識階級聯盟の實踐的な行動にまで踏み出されたのは、既に知る如く最も著しい出來事であつた。

これよりさき四月、『N・R・F』誌上、ラモン・フェルナンデスの『ジイドへの公開狀』がある。フェルナンデスは人も知る如く現在のフラスに最も期待される若き文藝評論家であるが、この『ジイドへの公開狀』は、最近フランスの前衛的知識階級のポジションとその動きを代辯するものであり、同時に現代フランスの文學者達がいかに積極的に社會的政治的關心を持ちつゝあるかを示すものである。

五月號の『N・R・F』誌上には、フェルナンデスの要求によつてこの反ファッショ知識階級聯盟の活動範圍についての紹介が掲載されてゐるが、それはまづ何よりも勞働者階級自身の利益のために一般社會情勢の嚴重な監視に當ることであり、また、これについて精細な報道をもたらすことを目的とするものである。

現在フランス文學の第一線に立つて活動しつゝある人々アラン、ロジエ、モーリス・マルタン・デュ・ガール、ウウジエヌ・ダビ、ブロック、ロマン・ローラン、ルネ・ラルー、ゲエノ、曾ては絶望の使徒であつたシュルレアリズムのアンドレ・ブレトンの名前など、かの勞働階級に送つた宣言書の署名者中に見出される。そこには當然各個人の思想的差異があり、ジイドの場合は彼の感情を養ふための方向とも見られるし（最近、ジヤン・ルウベルネは『改宗か？』と題したエッセイを『N・R・F』に發表し、ジイドにおけるコミュニズムへの共感を精密に分析してゐる）フェルナンデスのそれは内なる行爲に對する欲望の現れとも考へられるが、我々はこゝに、ダダやシュルレアリズムや脱出の文學を突き拔けた最も進歩的な作家達による思想的再建へのひとつの大きな歸趨を見るのである。

まことに、これらの人々の實踐的な迅速な行動は驚くべきものがあるが、たゞしかし彼等の現在の途がマルクシズム理論の肯定に立脚しつゝ、そのエスプリの出發をヒューマニズムの信仰に置くことは認めなければならぬ。のみならず、その動向がコミュニズムと云ふよりも反ファッシズムへのものであること、さらにそのうしろにドイツに對するフランス人の感情を數へなければならないのであらう。

本年度の主要作品　かうした歸趨の他に、嘗ての逃亡の作家達の多くは、現代風な世界放浪者ポール・モーランがその近作『優しいフランス』でもつて生れた土地へ還つて來た他、ヴァスコのジャドウルヌの云ふように『嘗ての脱出者達は今や旅行を職業化しつゝある』ので、彼等の多くがルポルタージュに就いたことは一つの結末であらう。このことは過去に隆盛を示した植民地文學への還元を想はせる(植民地文學は今年もまた數多く現れたが、本年度文學賞はモーリス・マルタン・デュ・ガルに與へられた)。それにしても、以前のやうな堅實さにさらに多くの近代的野性味を加へたものが現れるのであらうことが期待される。以前の追詰められた旅人、『獨身者』によつて今年度アカデミー大文學賞を占めたアンリ・ド・モンテルランはフランス文壇で特異な一人だが、その作品の健康さの裏には彼のカトリック的秩序がある事を見逃してはならぬ。フランスのカソリシズムは、不安の狀態を脱け出す一つの途として、今日のフランス文學に深く浸み透つてゐる。

だが、昨年マルロオがゴンクウル賞を射落し(その『征服者』が近頃邦譯された)、今年又多くのアカデミシアンを排除して、ルネサンス賞がドリュ・ラ・ロッシエルの『シャルロアの喜劇』に落ちたことは、最近のフランス文學の最も有力な方向が、彼等のもつ如き新しい行動主義の上にあることを何よりも明確に物語るものであらう。彼等の行動主義は反ファッシズム運動にも盛な活躍となつて現れたが、この二人にフェルナンデスを加へた若き三銃士こそ現在フランスに最も嘱望される人々であらう。

マルロオはなほ、パレスチナ地方へ旅行し、最近資料を獲て歸り、長篇『サバ』を書く豫定だと傳へられてゐる。

ほかに今年の主な作品としては、ポピュリズム文學の代表者ウウジェヌ・ダビの『極く新しい死人』、パリ文壇では今年ジイドよりも多く讀まれたといふモオロアの『幸福の本能』、フラソワ・モリアックの『日記』、マルセル・アルランの『生活者』、ジャン・ジオノの『世界の歌』、女流ではマルセル・チネールの傳奇小說『リムウザンの城』がある。それから、短篇小說が勢を盛り返すと云はれたのに對して、エドモン・ジャンルウ、マルセル・エエメ等の短篇集が示された。戯曲に新人ジャン・ヨウルが認められた。

探偵小說、大衆小說　今年は探偵小說が嘗てない隆盛さであるが、最近それが文學的小說に轉じつゝある。フランス探偵小說の開拓者ジョルジュ・シムノウンがこゝでも手腕を見せてゐる、大衆作家モウリスデコブラを始めとして、シャルドウヌ、クロワッセと今年はフランス作家が多く來朝した。映畫にもルナールの『にんじん』ヴイルドラックの『商船テナシティー』アントワヌ・ド・サンテクジュペリの『夜間飛行』等が來た。

昨年から今年へかけて、フランス文學の移植は目まぐるしばかりであつた。全集だけでもジイド、バルザック、プルウスト、古典としてモリエールがあり、單行本の飜譯に至つてはおびたゞしい數にのぼつた。

ロシア第一革命後の絶望的な空氣から生れたレオ・シェストフの悲劇の哲學が、はじめてフランスから輸入されて、盛んな流行を示したのも著しい出來事であつた。

このフランスと對蹠的な情勢にあるものはドイツである。そこで、次にドイツを見よう。

5　ドイツ

ナチスの文化政策　ナチスは最初よりして宣傳といふことに非常に力を入れてゐた。しかし、いままでは政治と經

濟に忙殺されて文化の方面にも充分には手を伸すことができなかつたやうである。それが、政治・經濟の領域で曲りなりながら落着いたので、いよいよ文化政策に進み始めた、まづ今年四月、『新國家におけるドイツ文化』と題する一書を出版したが、この卷頭にはヒットラア及び宣傳大臣ゲッベルスの、所謂第三帝國における文化と藝術に對する綱領風な論文が掲げられた。さらに文化局の規定の全部を載せて、著作局をはじめ七つの文化局が轡を並べてあらゆる文化領域のファッショ化へ猛烈な拍車を掛けた。越えて七月には、著作局は最初の宣傳行動として、『現代の出來事に對する六著』『ドイツ詩作の六著』を高壓的に選定發表した。

前者に屬するものはゲッベルスの『カイゼルの宮廷から國家の宮省へ』をはじめ、フアベル『鋤を高く振り上げて耕せ』、ハーゲマン『リヘリユウの政治的試錬』シュナイダー『我等のザール』、ジュヴルツ・フオン・ベルグ『社會主義的陶汰』、シュテーゲマン『世界の轉換』等。後者にリンケの『一年は山地をめぐる』、オイリンゲル『ドイツ受難劇』、ニイレンツ・ハーゲン『我々は一つの途をつくる』、ベントラーゲ『樅の樹影』、シュトラウス『天使の主人』、チュゲル『聖ブレーク』等の作品が擧げられ。題目から見てもわかるとほりに、その悉くがナチスの精神を反映し高揚するものであること云ふまでもない。

もう一つナチスの試みた宣傳方法にステファン・ゲオルゲ賞がある。多くの傑れた作家達が追はれた後のさびしい椅子を充たす爲にアカデミーによばれた詩人ステファン・ゲオルゲは昨年十二月死んだ。ナチス文學最高の榮譽を示すものとして、彼の名に因む國民賞が國民映畫賞と並んで今年設定されたのである。審査員の中にはナチスの忠實な闘士文藝院長ハンス・ヨーストの顔も見える。賞金は一萬二千マルク。今日のドイツの感動的な出來事に高度の藝術的表現を示した作品に與へられることになつてゐる。

ナチス文學の傾向　ところで、これらのナチス文學の最近の傾向とでも云ふべきものを取りあげるとするならば、

事實報告の形式をとる事實小說乃至報告文學が文壇に多く現れて漸く一つの傾向をつくりつゝあると考へられる。これが今年のドイツ文壇の主流であらう。特に、ミハエル・ブラウデインの長篇『世界は破滅する』は、この種のロマンとして相當の反響を呼び、作者自身も事實小說と銘うつて新しい形式を提唱してゐる。さらにこの傾向は宣傳省參事官ウイルフレッド・バーデ『ナチス突擊隊ベルリンを占領す』、ア・テーソエンバッハ『ナチス警備隊』にも強く現れてゐる。前者は赤色ベルリンをナチスの勢力下に導いた突擊隊の果敢な闘爭振り、後者はベルリン警備隊本部における共産黨員の機關銃襲擊を事實的に描寫してゐる。この二つはいづれもかなりの實行を示した。

新人の擡頭　かゝる狀態において、無名の新作家が今日のドイツ文壇に著しく現れて來たことは察するに難くないであらう。例へばヨゼフ・ミユールベルゲルがこの夏、小說『子供達と流れ』戲曲『ソレンシュタイン』を發表して認められた。血と土地との結合はナチス文學の合言葉であるが、この二作とも美しい南ドイツのボエメン地方に取材したものでソレンシュタインは正義と平和の爲に力盡きる迄闘ふ人として描かれてゐる。

既成大家の活動　既に名ある作家では、同じく南ドイツの勞働詩人としてナチス文壇に重きを成してゐるカール・ブレーゲルの小說『黃金の靴』を書き、大戰前からの古い作家ブレスベルは『トウルンとタキシスの角笛』を公にし、戰線文學で知られてゐるウエルナー・ヨイメルブルグは『織の如き法則』を書いた。いづれも極めて國粹意識的なものである。

追放作家の活躍　このやうに、なるほどナチス・ドイツは最近には多くの文藝作品を生んできてゐるが、しかしそれらはファシズム思想が濃厚に盛られてゐるといふ以外には文學的價値はあまり高いものでないと云はなければならぬ。文學的に價値あるものは、やはり、追放された作家達によつて生み出されてゐる。ナチスに追放された作家達は、周知の如く既にそれぞれ他國の反ファッシズム前衛の作家と結合して、漸く移民文學の出現を見ようとしてをる。彼等の機關

雜誌の代表的なものにアムステルダムで發行されてゐる『ザンムルング』がある。トーマス・マンの息子クラウス・マンが編輯に當り、主としてフランスのジイドを中心とする『N・R・F』の進歩的な作家達が後援してゐる。執筆者の顔觸れをみると、トルレル、リッサーマン、アルフレッド・デブリン、チル、フオイヒトワンゲル、ハインリッヒ・マンの他に、ジイド、ロマン・ローラン、エレンブルグ、オルダス・ハックスレーの名も見える。

今年アムステルダムで出版された追放作家の作品も尠くない。マックス・ブロードの『絶望しない女』、これは昨年書かれた小說だが、ユダヤ系ドイツ人をテーマとして問題的な作品であつた。その他、アーノルド・ツワイク、デブリン、バレリユウ・マーク、ヨゼフ・ロート等の作品が上梓された。

ハウプトマンがアカデミーに殘留してナチスに屈從した時その作家としての毅然たる態度を尊敬されたトーマス・マンはナチスが全世界から、優れた作家に對する不當な取扱ひを非難されたため、この非難を消さうとしてマンの作品だけをドイツで讀まれることを許したとも傳へられてゐる。なほマンは三部作『ヨゼフとその兄弟達』の二卷を既に完成した。他のひとりの偉大なる反ナチス作家、ヘルマン・ヘッセは概ね沈默を守つてゐる。

ザンムルングに活躍を續けてゐたヤコブ・ワッサーマンが死んで、遺作『ヨゼフ・ケルクホーベエンの第三の存在』がアムステルダムで出版された。さらにナチスに捕へられて牢獄にあつたルウトヰッヒ・レンは、この一月ついに死刑を執行されたと報ぜられた。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、これらの資本主義諸國が經濟恐慌に喘いでゐる中に、ひとりソヴィエット・ロシヤは、異常なる困難をしながらも、着々として發展の歩みを續けてゐる。それは決してソヴエツート側の自已宣傳にとゞまらず、他の國々からも認められてきたやうである。かゝるロシヤにおいては、文藝もまた、他と變つてゐると共に、非常に活潑である。

6　ソヴェエット・ロシア

ゴルギーとセラフイモウイッチの論爭　今年三月、ソヴイエット作家同盟の『文學新聞』紙上數回に渉つて、ゴルキー對セラフイモウイッチの激しい論戰が展開され、後にはアレキセイ・トルストイやブリボイ等も參加し、ソヴイエット文壇に小さからぬ波紋をひろげた。問題は現在のソヴイエットに最も期待される新進作家パンフイヨーロフの名作『ブルスキー』をめぐるものであつた。結局、これは作品中の用語の使用に關して現在のソヴイエット文學の缺點を指摘する意味において得るところがあつたやうである。

『ソヴイエット作家同盟規約』の發表　ついで、五月六日、ソヴイエット文學理論及び批評の指導的な表示として『ソヴイエット作家同盟規約』が、ブラウダはじめ文學新聞その他に公表された。この規約は何よりも今後のソヴイエット文學の動向を明白にするものだけに、極めて重要なるものである。この規約が社會主義リアリズムを確立したことは注意される。同月八日の『ブラウダ』は『社會主義的リアリズムはソヴイエット文學の根本方針である』と該規定の文字をそのまゝに題した論文を、その指導的批評家ユージン並びにファージエエフ共同署名の下に掲げた。

しかしこれらすべての出來事も、やがて來るべき、さらに大きな事實へのプロローグであつたと云へよう。

第一回全サヴエート作家大會　その大きな出來事とは全ソヴイエット作家大會である。期待された第一回全ソヴイエット作家大會は、全同盟的な熱狂と昂奮につゝまれて、世界文學の環視の裡に、去る八月十七日開催され、緊張に充ちた二週間の會期を經て次に記すごとき十分の所穫を收めつゝ、九月一日無事に終了した。

第二次五箇年計畫へと躍進するソヴイエットの文學に歷史的一段階を劃したと見るべきこの大會の面貌は、同時にまた、一九三四年のロシア文學の動向を何よりも明確に物語るものでなければならぬ。そしてそれを物語るものは大會に

おける各作家の主要な報告と討論であらう。報告はまづゴルキーの『ソヴイエット文學について』に始まる。これは明確な政治的立場と鋭い理論的分析の上に打建てられた最も具體的な綜合的な世界文學の發達史であつたが、こゝに一時ソヴイエット文壇を騒がしたロマンチシズムとレアリズムの問題ごとき僅か五六行で創作的見地から見事な解決を與へられ、またその社會主義的リアリズムも充分に具體的に明かにされた。

次に、カール・ラデックの報告『現代世界文學とプロレタリア藝術の諸任務』。興味あるのは、この報告の終りの部分において、社會主義リアリズムの生長と關連して、ジエームス・ジョイス創作方法が批判されてゐることであらう。ラデックによればジョイスの顯微鏡的創作方法は、資本主の崩壞に當面して出口を見出し得ない小ブルジョアの見地からの客觀主義であり社會主義的リアリズムはジョイスの方法に學ぶ必要がない。

キルポーチン等の『ソヴイエット・ドラマトウルギー』に關する共同報告は、ソヴイエット劇作家にとつて何を書くべきかは既に決定されてをり、いかにそれを書くかが問題であるとして、中心を形式の點に置いてゐる。なほ、同盟劇場及びクラシツク劇場の組織計畫が、別に大會において發表された。

詩についての報告はブハーリンによつてなされた。この報告は、ソヴイエット文學において最も立遲れてゐると見られる詩の領域に向けられたものだけに大會の興味を呼んだやうである。この報告中の現在のプロレタリア詩人に對する批判は問題になつた。スルコフ、ベードヌイ等のブハーリンに對する反對があつた。つけ加へれば、これらに對し、ゴルキーは適切な批判を加へつゝさらにソヴイエット詩人が新しい立場からロシア及び各民族共和國の民謡にまなぶべきことを慫慂してゐる。

この間、さきに組織委員會第三回總會に於て採用されたソヴイエット作家同盟規約の原案が少しばかり修正補足されて可決された他、『二つの五箇年計畫の事業と人々』といふ共同製作の計畫が發表された。

さらにこの大會に、アンデルセンネクセ、ルイア・ラゴンス、アンドレ・マルロオ、ジエルマネット、ブレーデル、トラー、ヨハネス・ベツヘルをはじめ、多くの西歐及び東洋の作家達が、單なる客としてでなく、彼等もまた大會の主要な事業であつた創作討議に參加した事實を特に記さなければならぬ。

作家とその活動　次に個々の作家の活動について少し記さう。

今日のソヴイエット文壇において最も偉大なる存在をなしてゐるのは、依然ゴルキーである。彼に對する支持はいよいよ盛んである。本年モスクワの劇場で上演されたものゝ半分はゴルキーの作品であつたと云はれる。

さきのセラフイモウイツチとの論爭も、結局、ゴルキーの云ふところが正しいといふやうに認められた。

ゴルキーは、今年、昨年の『エゴル・ブルイチヨフ』――これは今年新作物として上演された――に引きつゞいて、『ドスチガエフ』が革命直前の商人を取り扱つたのに對して、これは革命直後のインテリゲンツイヤを題材としてゐる。おそらく、次には、革命後から今日までのインテリゲンツイヤを描いて、合せて三部作をなすものであらう。

ゴルキーの活動は作品に限らない。第一回全ソヴイエット作家大會は實に彼によつて纒められたといふことができる。さらに、彼は、纖々蕾出してくる青年作家の指導に全身を捧げてゐる。

他の多くの作家の中では、ショローホフ、プリボイ、パンフイヨーロフの三人の活動が華々しかつた。ショローホフの『靜かなるドン』、『ひらかれた處女地』は依然として歡迎されてゐる。

パンフイヨーロフは、さきに擧げた『プルスキー』を書き續けてゐる。すでに數千枚を超え、今年はその第四部を出版した。ゴルキーは彼の表現の粗野であることを非難したが、その力強さと未來性とはあまねく認められてゐる。

『フシマ』の作者、プリボイの名は既にわが國においても親されてゐよう。彼は今年この作品を完成した、まだ發表さ

れてをらないか。

このほかに、アレクセイ・トルストイがその名作『ピヨートル大帝』の第二卷を書きあげたことも、今年の出來事として擧げられるべきであらう。『ピヨートル大帝』と並び稱されたものに『穴熊』の作者レオーノフの『スクタレーフスキー』がある。これは技術インテリゲンツイヤの勞働者階級への轉向を畫いたものであるが、單なるテーマ文學の臭氣なく、好評嘖々であつた。

本年のソヴイエット文學に目立つことは戰爭文學の擡頭である。日露關係の急迫に刺戟せられたものであらうか。ルビンシユタインの『サムライの道』はその代表的のものである。しかし、文學價値の高いものは出てゐない。

× × ×

アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤのほかに文學のないわけでは勿論ない。就中、中華民國、イタリー、スペイン等は充分見るべきものがある。しかし、その意義はさまで大きくないであらうから、こゝには省略する。たゞ、一九三四年度のノーベル賞はイタリーのピランデルロに與へられたことを記しておかう。

C、日本文藝

一 總觀

1 『文藝復興』第二年

『文藝復興』の事實　『文藝復興』は昨年叫び出されたものであつた。本年はその第二年目である。論勿、これが昨年始めて云はれたときにも多くの反對があつたが、今年においても反對者は多い。むしろ、反對する作家、批評家の方が多いほどである。それらの人々は、『文藝復興』といふやうな事實が何處にも存しないことを云つてゐる。確かに、『文藝復興』が叫ばれて年餘になるが、劃時代的な傑作が生まれたといふのでもなく、佳作が特に多く發表されたといふこともない。これに對して、『文藝復興』を主張する側の人々は、さういふことは速急に行はれるものでなく、藉すに年月を以てしなければないので、いま直ちに『文藝復興』を否定することは當を得るものでないと云つて、答へてゐる。しかし、それならば、さういふ將來における盛んな開花を人々をして豫想せしめる如き事實が今日あるかといへば、それも積極に且つ明白には指摘されてゐないやうである。

『文藝復興』の意味　それならば、『文藝復興』は全く否定されるべきかといふと、人々は、それにも躊躇してゐるものゝ如くである。なんと云ふことなく、數年前と比べて、文藝の復興したるやうに感じてゐる。さういふ氣分は漲つ

てゐる。そして、本年においてもこの狀態は變つてゐない。

では、その『文藝復興』とはどういふものであらうか。それは、第一に、文藝が他のもの、特に政治からの抑壓を脱して、その獨立性をとり戻したといふ意味である。さういふ意味で文學のための文學といふことが認められてきたといふことである。數年前におけるマルクシズム文藝理論の眞の主張がさうであるべきかどうかは別として、文學をして全く政治に從屬せしめてしまつたマルクシズム文藝理論の一般的支配は、はたしてこれがマルクシズム文藝理論の盛んなる擡頭、それに伴ふマルクシズム文藝理論の一般的支配は、はたるといふ見解を流布させたし、實際にも政治に從屬させた。しかも、この勢はひとりプロレタリア文學内に限らず、既成文學にも及んで行つた。同時に、文學はつまらないものであるといふ風に見なされるにいたつた。

しかるに、既に述べたごとくに、マルクシズムが退潮するに從つて、この考へが棄てられ文學は政治から解放され、獨目性を取り戻した。それと同時に、文學は決してつまらないものでないといふことが認められてきた、――今年二葉亭四迷の文學は男子一生の仕事でないといふ言葉がはたして正しいかといふやうなことも論じられた。かういふ意味では、『文藝復興』とは「文學のための文學」主義の『復興』であり、さうした立場の作品の、その價値の如何は、すなはち傑作であるかどうかは、別として、多く出てきたことである。そして、これは充分に事實として認められるところである。

第二に、『文藝復興』とは既成文藝の『復興』である。一時、ブルジョア文學はプロレタリア文學に全く壓倒されてゐた。表面的な現象をとれば、一般雜誌等において、前者は後者によつて全然驅逐されるに近かつたし、優れた作品も後者には甚だ少く前者に多かつた。しかるに、最近にはブルジョア文學が優勢になると共に、實際にも佳作がいくつか現れるにいたつた。これは事實である。特にプロレタリヤ文學が勢力をいたく衰つたことは明白すぎるほどの事實である。

繰りかへしていへば、かゝる一定の意味の『文藝復興』は事實として認められる。そして、この『文藝復興』は昭和

九年頃において、もう、のまゝ持續してゐた。

2　既成文學の動向

不安の思想の支配　本年の既成文學（ブルジョア文學）において、特筆に價するのは不安の思想の流行であつた。これは、最近の既成文學の本質のひとつを語るものとして、極めて根本的なるものでなければならぬ。

さきに述べたごとく、今日、日本の知識階級は不安・絶望の狀態にある。既成文學における不安の思想の流行は、これを失敍に表現したものにほかならないと見ることができる。

不安の思想の支配はシストフの評論の歡迎といふ形をとつた。シェストフの著書や論文は『悲劇の哲學』、『虚無よりの創造』を始めとして數多く譯出されたばかりでなく（選集の計畫すら生れてゐる、――改造社）、シェストフに關する論議は、正宗白鳥、小林秀雄、河上徹太郎を始めとして、甚だ盛んであつた。

シストフは、帝政ロシヤにおいて、反動期の知識階級の思想を表したものであつた。そのシェストフの流行は、今日の時代、知識階級、文學について我々に對して極めて暗示的であるといへよう。

不安の思想は、まだ具體的に作品に盛られて現はれてきてはゐない。しかし、それは文學技術的に困難であるといふことにもよるであらうし、むしろ今後に現れてくべきものであるとも云へよう。

廢頽的思想の擡頭　不安の思想と連るものは廢頽の思想である。この意味において、今年、永井荷風の『ひかげの花』（中央公論、八月號）が發表され、一部の非難はありながら（後述）、廣く喝采を博したことは注目に價しよう。『ひかげの花』は、妻の實芙行爲によつて生活する男とその妻を中心とし、さういふ世界を描いたものであつた。作者はこれをたゞ、むしろ好んで、描いてゐるばかりでなく、全編に廢頽の氣分を漂せてゐる。固より、かゝる態度は荷風に從

來から存するものであり、且つ、この作の現れたことはむしろ偶然とも云へないことはないが、これが一般の喝采を博したことは、意義をもつてゐる。さらに岡田三郎、尾崎士郎の今年の作にも同じ傾向が看取せられた。

本來プロレタリア作家であるが最近にはその色彩を甚だ弱くしてゐる武田麟太郎の諸作にも多少の批判は含まれてゐるけれども、かゝる傾向がないではない。彼は、『銀座八丁』(東朝夕刊、連載)、『螢の花』(中央公論、七月號)その他において、好んで社會の暗黒的側面、ダンサー、女給、その情夫、妾、且那といふやうな存在に眼を向けてゐる。

いはゆる轉向文學の發生　プロレタリアからブルジョア側に轉向したものゝ文學、いはゆる轉向文學なるものは、今年は大きな存在を示した。

これは、理想主義的なインテリゲンチヤがいつたんプロレタリア運動に參加しながら、現實の鐵壁にぶつつかつて挫折する。そして、『轉向』する。けれども、その智識は、彼等が從來抱いてゐた社會發展の一般的法則についての理解を捨て去ることは許さない。そこで彼等は、それにもかゝはらず從來の軌道を確信し得ざる或は直進し得ざることの原因を、それ自身の自我の中にあると考へる。そこで自我の解剖・分析を行つたといふ風のものである。村山知義の『白夜』(中央公論、五月號)窪川鶴次郎の『風雲』(同、十一月號)等はその代表的のものである。

外國文學の研究　不安の思想からどうにかして拔け出ようとしてゐるためとも考へられるし、また現在の日本の文學に甚しい不滿を感じてゐるからであるとも考へられるが、今年において外國の著名なる作家の研究が眼立つた。小林秀雄のドストエフスキー研究を始めとして、ジイド、D・H・ローレンス、バルザック、ゴーゴリ等々の研究が盛んに行はれた。

外國作家ばかりでなく、日本の過去の作家二葉亭四迷、國木田獨歩、岩野泡鳴等々の研究も行はれたが、これまた同じ意味のものである。

いはゆる能動的精神の主張　今年の後半期にいたつてはさきの不安を意識し、これから拔け出ようとする『行動主義』とか或は『能動的精神』とかの要望が、一部の中堅作家や新進作家の中に現はれて來た。舟橋聖一の『ダイヴイング』(行動、十月號)、芹澤光治良の『壜壺』(改造、十一月號)等は作品としてこれを代表するものである、評論においては一層喧しく唱へられて注意をひいた(『一般思想界』の項參照)しかし、この主張においては、まだ一般的抽象的な『行動主義』――『能動的精神』――實行的意志が要望されてゐるだけである。具體的にはつきりした方向は示されてゐないが、この派のうちの一人である阿部知二は『行動』十一月號の『「文學の指導性」座談會』において、『……もつと正直にはファシズムなんかに多少興味を持つてゐますね』と述べてゐる。さきの舟橋の作品にもこの氣持の現はれたところのあるのは見逃せない。

3　プロレタリア文學の新形勢

藝術主義の勝利　何より重要なことは、文學を政治から解放しようとする傾向がこのプロレタリア文學の内から強く生じてきたことである。

『日本プロレタリア作家同盟』(『ナルプ』)、はその理論の如何にかゝはらず、文學をあまりにも政治に屈服させてゐた。そのために、作家の創造的活動を窒息せしめたとなす一派が生れた。林房雄を先頭とした反對運動がこれである。この林等の主張に對しては、一方、それは誤れる政治主義に對して一切の政治の排斥を以て抗するものであり、實質的にはプロレタリア文學をブルジアの的なる純文學に解消せしめるものであるとの批評も出た。

しかし、とにかく『ナルプ』は、勿論他の事情も加つてゞあるが、解體するにいたつた。その後においては、これより先き林房雄、武田麟太郎等は小林秀雄、深田久彌、川端康成等と『文學界』を作つてゐたが、いくつかのグループに

分れ『文學評論』、『文化集團』、『文學建設者』、『現實』等の雜誌が出されてゐる。

これに對していはゆる『文戰派』は、『ナルプ』のかゝる政治主義に反對してきたものであるが、その意味で彼等は理論的勝利をえたのであるが、これもまた、一般のプロレタリア文學の衰微によつてその活動はあまり活發でない。僅かに機關紙『新文戰』が出されてゐるにとゞまるやうである。

勞働者生活を描いた作品の減退　作品において、本年度、まづ目につくことは勞働者生活を描いた作品の減退したことである。僅かに加賀耿二の『工場へ！』(改造、十月號)その他を見るのみ。わが國プロレタリア文學の初期において、多くの、中には甚すぐれた、かゝる種類の作品の出されたのに對して、極めて對蹠的である。

しかし、數が少いとはいへ、『工場へ！』を含めて、ほかにも例へば杉田ナヲ江の『養成工』(文化集團、十一月號)などの『文化集團』、『文學評論』、『文學建設者』の諸誌等に見える新進プロレタリア作家達が、以前の作家がむしろ古い勞働者を描くに傾いてゐたに對して、プロレタリア文學の基底たる近代的勞働者の日常生活の中からプロレタリア文學を發達させ始めてゐるといふことは、本年度における見逃すべからざる、しかもプロレタリア文學に對して積極的なる現象の一つである。

農民文學の繁榮　勞働者生活を描いた作品の減退に反し、農民生活を描いたものゝ增大とその表現技術と認識の深化ははなはだ特徴的である。

これは、直接的には、數年前より續き今年その一應の頂點に達した農村の窮乏の文學における反映と見られるのであるが、平田小六の長篇『囚はれた大地』(單行本)、短篇『蕈子』(文藝、五月號)『因作地帶』(同、八月號)、『めらはど』(改造、十二月號)、佐々木一夫の『沒落後』(文學界、一月號)本庄陸男の『土地』(文化集團、十一月號)等が、それを代表してゐる。

植民地文學の進出　植民地文學の進出も本年度の特徴である。張赫宙の植民地文學は、更に草刈六郎(朝鮮)の『青つゝ』(文化集團、七月號)楊逵(臺灣)の『新聞配達夫』(文學評論、十月號)等を後續させてゐる。

植民地民衆の環境と意慾とが彼等自身の表現によつて日本文壇に現はれたこと、殊に張赫宙の『ガルボウ』(文藝三月號)『葬式の夜の出來事』(文藝、八月號)等がその著實な觀察と素朴な精神とを以つて初期リアリズムの本格的相貌を現はしてゐること等は、特筆すべきであらう。

プロレタリヤ文學陣營の編成替え　本年度のプロレタリヤ文學陣には、誰が指導し號令するともなく、恰も自然法則によつての如く注目すべき陣營の編成替えが行はれてゐる。あるものはさきに見たやうに純文學に同和し、その代りには、いま云つたやうな新たな傾向によつて補充を受けてゐるのである。そこにプロレタリア文學全體としての相貌の變化をきざしてゐるのである。

4　雜誌創刊、長篇の流行

諸雜誌の創刊　さて、既成文學、プロレタリア文學を通じて『文藝復興』の現はれとしてか、本年は、昨年末から創刊された『行動』、『文藝』、『文學界』等の文學雜誌に加へて、『早稻田文學』『婦人文藝』等の雜誌が發刊された。『あらくれ』も毎月發行されるやうになり、頁數も增えた。また、改造社からは、『文藝復興叢書』二十卷が發行された。

長編小說の流行　長編小說を求める聲は從來から盛んであるにかゝはらず實現されなかつたが、本年にいたつては長篇小說がかなり盛んに現れてきた。島崎藤村の『夜明け前』(中央公論連載)等前年から引きつゞいてゐるものを別としても、横光利一の『紋章』(改造連載)、川端康成の『淺草祭』(文藝連載)、林房雄の『青年』(單行本)、淺原六朗の『青春の街』(經濟往來連載)、平田小六の『囚はれた大地』(單行本)石坂洋次郎の『馬骨團始末記』(改造連載)、等々をあげ

ることが出來る。

二　諸黨派、諸文藝雜誌の動向

1　プロレタリア文學の二團體の消長

『ナルプ』の解散　本年度における文學的諸黨派の動向において、まづ特記しなければならないのは二月二十二日に行はれた『日本プロレタリア作家同盟』(『ナルプ』)の解散である。

同盟が解體するか或は大方向轉換するかしなければならないことは政治的情勢の命ずるところであつた。しかし、これを公然の問題にしたのは昨年十一月號の『文化集團』に發表された林房雄の『プロレタリア文學再出發の方法』と題する提案であつた。林房雄はその頃既に川端康成、廣津和郎、宇野浩二、武田麟太郎、深田久彌、小林秀雄、豐島與志雄等と共に『文學界』を創刊し、事實上同盟と絶緣せる形を取つてゐたが、同盟幹部派に對して激しい言葉で論爭を開いた。この提案において林は、『日本プロレタリア作家同盟は、自滅をさけるために、根本的な再出發を行はなければならない』と前提し、次に同盟員作家の技術的發展のめざましさをあげ、『このやうな、高まり充實した現狀に對して、現在の作家同盟の枠は、もう古いのである。「不振」の原因は「外的の××」だけではない。この內容と形式の矛盾——作家同盟の指導方針、組織方針がプロレタリア文學の埒枠になつてゐるといふ事實をはつきり認めることから、同盟の再出發は行はれなければならぬ。……同盟の混亂と不振はたしかに發展現象である。成長した內容が古い「形式」の中で身をもだへてゐるのだ』となした。そして、再出發の具體的な方法として、『作家的實力をそなへたものは、すくなくとも、百人はあるだらう。この百人は、五つの雜誌をもつことができる。事實、それを持たうとする要求が、同盟內に、すでに一年まへから、あらはれてゐる。この要求を生かさなければならぬ。すなはち、誤解をおそれずにいへば作家同盟は、今、分裂すべきである。分裂して五つか十の作家團にわかれ、各々の團體が、活動機關としての雜誌をもち、おたがひに作品による競爭をはじめなければならぬ。』と提案した。

これに對して、翌月號の同誌に贊否の意見が掲載されたが、德永直、橋本英吉、神近市子等すべて贊成し、第三者の立場から『文藝』の里村欣三だけが、『これはプロレタリア文學の再出發ではなく、林の文學的野心の再出發とでも名づくべきものであらう。』と云つた。

かういふ情勢の中で、本年二月二十二日、ついに『ナルプ解體聲明書』が發せられた。

聲明書は、まづ政治狀勢が從來のまゝでの運動を不可能にしてゐることを述べ、その證據として、『我が同盟の絶對的多數の作家は現在の組織事業を事實上放棄し、合法圈內に於ける必要な活動の自主的な展開に向つてゐる。言ひかへるならば、我が同盟の活動的な作家たちは現在の情勢下に於ける舊來の活動形態に對して、機關紙の發行の擁護、同盟費の納入、組織活動遂行等の一切の義務を放棄することによつて、絶對多數を以つてそれへの不信を表明しつゝあり、指導部への不滿に對しても組織的方法による指導部の批判乃至改選への意見を放棄することによつて、事實上同盟組織を形骸にとゞめてゐる狀態である。』ことを指摘し、かゝる狀態からの脫け道としては、既に『作家がその主觀的條件に應じつゝ、本能的に拓いて行つた方法』——『發表機關を中心とする自主的な、合法的な、創作的研究的諸グループの形成』が注視されなければならぬと述べた。

さらに聲明書は、文學の方法について、社會主義的リアリズム的の方法が創作の指針でなければならないことを認めた。また、從來の同盟の活動方針について作家のエネルギーをサークルの組織的任務に於て消費させたことの誤りであ

つたこと等を告白した。最後に、『……かゝる見通しの下に、我々は光輝ある歴史をもつ日本プロレタリア作家同盟の解體を宣言する。このことはプロレタリア文學の放棄を意味するものではなく、今日の情勢に適應しない形式をやめて、プロレタリア文學のより高き發展に最も合理的な解決の途を拓くことである。自己の可能と限界との正確な認識の上に、今日最も妥當なる形式――發展機關を中心とする創作グループとしての活動にうつれ、このことこそ、新たなる情勢に於ける、更に前進的な文學運動の再組織に基礎を與へるものである。……諸グループは相互の高き文學的成長のために協力せよと結んでゐる。

かくて、既に發刊されてゐた『文化集團』の他に『文學評論』、『文學建設者』、『現實』等の諸雜誌が發行され、從來の同盟員作家はそれらの諸雜誌中心に分散するに至つた。そして今日に及んでゐる。

『文戰派』のその後　『ナルプ』がかくなつたに對して、プロレタリア文學運動の中心團體たる『文戰』は、昨年六月最後の分裂を行ひ、前田河廣一郎、葉山嘉樹、里村欣三等は『勞農文學』を發刊し、青野季吉、金子洋文、伊藤永之介等は『文戰』を持續して對抗して來たが、もと〳〵根本的な運動方針上の差異で分裂したものでなかつたゝめ、『勞農文學』と『プロレタリア作家クラブ』側が分裂の不利を悟つて合同を提議するや、本年二月四日合同大會を擧げるに至つた。合同宣言に曰く――『この新たる集團の力をもつてブルジョアジーの文學の全野に對して鬪爭を展開すると共にプロレタリア文學の一切の右翼的及極左的偏向と鬪爭し、特に文藝復興その他の美名によつてプロ文學の階級性を拔きとり、ブルジョアジーの文學の前に自己を賣りつゝある階級的〆×に對して徹底的に鬪爭せんとするものである。』

團體名は『勞農藝術家聯盟』、聯盟員は前記の六名の他二十三名、合計二十九名機關誌は『新文戰』。しかし、合同の實果はいまだ充分に擧らず、機關誌の發行等も不規則である。

2　純文藝の諸派

文壇の黨派　プロレリア文學の場合には甚だ簡單であるが、純文學、謂ゆる『ブルジョア文學』にあつては、これと異つて、黨派の存在が極めて曖昧である。三田派、早稲田派、ないし新潮派、文藝春秋派といふやうな云ひ方は存在してゐても、それらのものは文學的黨派としての實質を殆んど、あるひは全く備へてゐない。比較的黨派らしい恰好を備へてゐる『文學界』や『あらくれ』の同人組織にしても、かゝる組織の根本たるべき各同人の作家的傾向はまち〳〵であつて明確な文學上のイズムによつて集まつてゐるわけではない。だから、龍膽寺雄の『M子への遺書』（文藝、七月號）をきつかけとして文壇黨派が問題になつた場合にも、ある者は文壇に黨派あり、ある者はなしと云ふやうな工合で、問題の對象それ自身の存在がはつきりしないといふ有樣であつた。

『あらくれ』派　もし、文學的黨派を拾ひ出すとすれば、僅かに『あらくれ』と『文學界』との二つよりほかないであらう。『あらくれ』の會は昭和七年五月、德田秋聲を中心に德田一穂、中村武羅夫、岡田三郎、室生犀星、尾崎士郎、楢崎勤、阿部知二、舟橋聖一、榊山潤、井伏鱒二等を以て創立され、表紙無し十六ページの貧弱なパンフレットを『あらくれ』第一輯として發行したのに始まる。かくて、最初はたゞ德田秋聲を中心にしたといふだけで、この派の一定の文學上の態度といふものはなかつた。この顏ぶれでも分る通り、しかし、最近には、さういふものがいくらか明白になつてきたやうである。顏ぶれが示す如く、この派には以前の新興藝術派の中心人物が集つてゐる。そして、岡田三郎や尾崎士郎は人生派を以て任じた昔の『不同調』の同人である。さういふところからこの派には行動派或ひは生活派といふやうな色彩が強くなつて來た。そして、今年においては、この派の船橋聖一や阿部知二が『行動主義』、『能動的精神』の說を唱へた。

生活派と云つてもプロレタリア文學とは別な意味のものである。むしろ、プロレタリア文學に對する反感はこの派において強いやうである。今年、轉向文學の發生に際しても、岡田三郎は中村武羅夫等と共に、これに最も強く道德的非難を加へた。

『文學界』　一方、『文學界』は宇野浩二、深田久彌、川端康成、武田麟太郎、小林秀雄、廣津和郎、林房雄、豐島與志雄を編輯同人として昨年十月號から發刊されたものであるが、本年二月號から新たに横光利一、里見弴、藤澤桓夫の三名が編輯同人に加はつた。二月號以後暫く休刊し、六月復活號を出したが十月號から又休刊の狀態である。來、新年號より再刊されると傳へられてゐる。

『文學界』はさきの『文藝復興』をいはゞ旗印として集つたもので、その意味では『あらくれ』よりも黨派としての色彩がはつきりしてゐる。そして、文藝至上主義的傾向は相當に強く貫かれてゐる。しかし、舊『ナルプ』派、以前の反マルクス派の合同であるばかりでなく、さらに種々の相違があつて、決して純一ではない。

この派はプロレタリア文學に對しても誌面を開放し、今年も相當すぐれたプロレタリア作品が載つた。

3　諸營業雜誌における動向

『文藝』　營業雜誌についていへば、まづ『文藝』が海外文藝作家の研究に力を拂つたことが目立つ。三月號には前川堅市と桑原武夫のスタンダール研究、五月號には中山省三郎と神西清のプーシュキン研究、六月號には宇野浩二と小堀甚二のゴーゴリ研究、七月號には三木清、加茂儀一、吉江喬松のルネッサンス研究、八月號には茅野蕭々、堀口大學、工藤好美のロマンチック時代研究、九月號には大宰施門のモリエール研究等が發表された。古典文藝だけでなく、例へば新年號における芹澤光治良、川口篤のヂイド研究の如く、問題視されてゐる現代作家の紹介、研究にも多くの頁

を割いた。

『新潮』　これに對して、『新潮』においては『作家研究座談會』が注目される。八月號から連載し、國木田獨歩、田山花袋、岩野泡鳴、二葉亭四迷、森鷗外と、日本文學の古典作家を研究して日本古典の發掘に貢献した。

『行動』　『行動』も外國作家研究欄や近代ヨーロッパ精神研究欄などを設けて海外文化の吸收に資するところ少くなかつた。この雜誌には、さきの『あらくれ』派の人々が活躍した。

『行動』は十月號卷頭における室伏高信の『危機の文學』や、十一月號卷頭における矢部貞治の『青年に寄す』、十一月號における『「文學の指導性」座談會』などによつて文學專門の雜誌である以上に、ひろく社會的問題にも眼を配つてゐたが、最近その傾向は益々強く、むしろ一般雜誌にならうとしてゐる。さきの『行動主義』、『能動的精神』の說はこの雜誌に現れた。

『改造』及び『中央公論』の文藝欄　しかし、創作欄がもつとも權威を持つてゐるのは、依然として以上のやうな文學雜誌でなくて『改造』、『中央公論』の二大綜合雜誌であつたことは、今年も變らない。例へば、本年中でもつとも問題となつた横光利一の『紋章』と永井荷風の『ひかげの花』は、前者は『改造』に連載されたものであり、後者は『中央公論』の八月號に發表されたものである。

その他の綜合雜誌については、『文藝春秋』は今年も創作欄にあまり力を入れなかつたらしく、毎月二三篇を揭げてゐるが、大いに問題になつた作はない。『經濟往來』は創作欄をいくらか充實させ始めた。

三　文壇的諸事件

1　文壇の對社會的出來事

帝國文藝院設立問題　最近、政府が意識的に文藝政策に乗り出して來始めたといふことは、本年中におけるもつとも注目すべき文壇的出來事であつたらう。

その第一は、帝國文藝院の設立問題である。松本警保局長（齋藤内閣）を中心に直木三十五、三上於菟吉、菊池寛、山本有三等が集まり、一月二十九日の夜第一回の設立準備會を開いたといふことが新聞紙上に發表されるや、これに對する賛否の意見が諸新聞、諸雜誌の上にぞく〳〵現はれた。直木三十五が讀賣新聞紙上で設立の必要を力説したのは當然たが、正宗白鳥が東京朝日新聞紙上で、與謝野晶子が同紙婦人欄で、德田秋聲が『改造』三月號でそれぞれ反對の意見を明瞭にしたことは世人の注意を惹いた。しかし、文壇人大多數の意見は設立賛成であつて、例へば『文藝』三月號に蒐集されたこの問題に對する諸家の回答によれば、設立を可とするもの佐々木信綱、辰野隆、門外野人、川端康成、吉江喬松、杉山平助、岡本綺堂、中村武羅夫、長谷川伸、千葉龜雄、近松秋江、何れとも決定しないもの林芙美子、矢田挿雲、そして、反對のものは青野季吉、藤森成吉のたつた二人であつた。これを概括すれば大體プロレタリア作家と自然主義以來の老作家（德田秋聲、正宗白鳥等）が少數派として反對し、それ以外の大多數の作家が賛成したといふことができよう。そして、發企人側とこれに對應的に對立したプロレタリア作家側の意見を除外すれば、賛成者側の賛成意見は、大體檢閲制度の緩和に役立てやうとするもの、作家の生活保證機關たらしめやうとするもの、これによつて作家の社會的地位を向上せしめやうと企圖するもの等であるが、反對者側は却つてこれを以て純文學を毒するものと見てゐる。德田秋聲は云ふ、――『近頃の文藝院設立問題については、そこらに有識の人が澤山ゐるから、私などの濫りに喙を容れる限りではない。私はまた本家本元の佛蘭西のアカデミイ・フランセイズなどの組織や機能が何んな風になつてゐるかといふやうなことについても、更に知識がない。堀口氏のアポリネエルの詩の譯冒にはピカソのかいた翰林院大博士の禮服を著込んだアポリネエルのカリケチュアが載つてゐて、それを見ると我々平民には少々困りものだといふ感想が起る。』（『如何なる文藝院ぞ』、改造　三月號）……そして、德田秋聲は直木や三上が軍部と連絡のあることからファッショ文學の文藝院となる恐れがないでもないこと、よしさうでなくとも、直木、三上、菊池、山本といふ顔ぶれから見、更に今日の役人の文學に對する理解の程度から見て、大衆文學の文藝院となる危險があること、況んやそれに官憲的統制を加へることになれば、朗らかな藝術の發展を阻害することにならうといふやうな考へを述べてゐる。正宗白鳥、與謝野晶子の反對も、大體、同じ見解の上に立つてゐると言ひ得る。

文藝懇話會と物故文士慰靈祭　松本警保局長が内閣の更迭によつてその職を去つたゝめ、帝國文藝院そのものはついに實現するに至らなかつた。しかし、松本學は官界を退いて後もこの種の團體の設立に肝入りし、ついに民間團體としての『文藝懇話會』が創立されるに至つた。

今までのところ同會の仕事としては、九月に行はれた物故文士慰靈祭より他に見るべきものはない。祭られた物故文士は古河默阿彌、饗庭篁村、内藤鳴雪、廣津柳浪、森鷗外、二葉亭四迷、福地櫻痴、黒岩涙香、落合直文、村井弦齋、渡邊霞亭、齋藤緑雨、森田思軒、尾崎紅葉、正岡子規、夏目漱石、山口美妙、北村透谷、川上眉山、内田魯庵、國木田獨歩、德富蘆花、大町桂月、巖谷小波、田山花袋、高山樗牛、島村抱月、樋口一葉、岩野泡鳴、上田敏、大塚楠緒子、小栗風葉、柳川春葉、島木赤彦、有島武郎、直木三十五、横瀬夜雨、長塚節、小山内薫、石川啄木、芥川龍之介、若山牧水、葛西善藏、嘉村礒多、小泉八雲、三遊亭圓朝、塚原渋柿園、須藤南翠、押川春浪、蘇曼殊である。プロレタリア

作家たる小林多喜二が加へられてゐないといふことが、あちこちの匿名批評欄などで問題とされた。

慰靈祭は日比谷公會堂で行はれ、島崎藤村、德田秋聲を司會者として、現文壇の一流どころの他に江見水蔭、馬場孤蝶等をも加へて大講演會を催し、これをAKを通じて全國に放送した。硯友社の唯一の生き殘りたる江見水蔭が、硯友社の同人は國家のために文藝に携つてゐたのだと講演したのに對し、後から出た馬場孤蝶がこれを否定する等のこともあつた。

一方、同月二十日から二十七日にかけ、同じく文藝懇話會主催で物故文士の追慕展覽會が三越本店樓上で開かれ、物故文士の遺品が一般の人々に公開された。

この催しが行はれた後、東京日日新聞の『蝸牛の視角』や『文藝』の『五行言』等の匿名欄で、『文藝懇話會』の金の出所を明らかにせよとの要求が起つたが、役員の一人たる近松近江は、そんなことは要らぬおせつかいだと國民新聞紙上で應酬した。

菊池氏等の大演習參觀　さらに、政府筋と文士との接近の第二として、十一月一日より行はれた北關東における陸軍大演習に、菊池寛、白井喬二、吉川英治、佐藤春夫、三上於菟吉の五氏が招待された。その趣旨は、『一般民衆に軍隊の行動その他を理解して貰ふには民衆と最も密接な關係ある文藝家に先づ理解してもらふ必要がある』（十月三十日、東日）といふ點にあつた。招待に應じた菊池寛（東日）、吉川英治（東朝）、等はそれ〴〵觀戰記を發表した。

文士檢擧事件　しかし、これらとは全く反對に、今年は政府當局と文壇人とのいざこざもまたあつた。三月、菊池寛、廣津和郎、宇野千代、甲賀三郎、大下宇陀兒等が麻雀賭博の嫌疑を以て警視廳の取調べを受けた。幸ひ不起訴で龍頭蛇尾に終つたが、これに對して菊池寛等は大いに忿懣の意を表した。

2　文壇内の諸事件

龍膽寺の『遺書』事件　次に、文壇内の事件といふものを見ると、なんと云つても、『文藝』七月號に發表された龍膽寺雄の『M子への遺書』が大きな渦を文壇の内部に捲き起した出來事を擧げねばなるまい。この小說は、作品としてなんらすぐれたものではなかつたが、菊池寛とか中村武羅夫とか佐藤春夫とか、その他川端康成、楢崎勤といふやうな文壇の人々の實際の名前がふんだんに現はれ、しかもそれで文壇内部の朋黨關係、裏面的私行、代作等々が曝露されてゐたからして、問題は起らざるをえなかつた。反響は主として匿名批評の形で現れ、作者が被害妄想狂であるとかいふやうなことが盛んに云はれた。作者自身も、そのうちに、腰が碎けて問題の眞相ははつきりさせられなかつた。文壇といへども一つの社會集團である以上、それを藝術の照明燈で照らし出す文學は立派な社會批判の文學として成り立つ。要は描かれた事實が本當の事實であるかどうかにかゝつてゐるのであるが、それは闡明されないままでうやむやに終つた。

挿繪問題　中里介山と石井鶴三との間に、挿繪の著作權の問題について爭ひが卷き起され、ついに法廷にまで持ち出されて新聞紙上を賑はせた。『大菩薩峠』の挿繪畫家たる石井鶴三が、『大菩薩峠挿繪集』の展覽會を開いたり、またこれを出版したりしたゝめに、小說の作者たる中里介山がこれに抗議を提出した。理由は、この挿繪の考證や示唆は小說の作者が與へたものであり、從つてそれについての權利は小說の作者にあるといふのである。法廷においては一時和解が成立したが、石井の方で更にそれを拒絕したとも傳へられてゐる。

外國作家の來朝　年頭、フランスの大衆作家モーリス・デコブラが來朝して、東京日日新聞紙上に『日本の女性』を、『改造』三月號に『樺のマドンナ』を發表した（『世界文藝』、『フランス』の項參照）。八月には中華民國の作家魯迅の實弟で、現在北京大學に日本文學を講じてゐる周作人が來朝し、いろ〳〵な方面から歡迎された。また日本人の一外交

官とロシアの一女性とを主人公にした小說『黑薔薇』で賣り出したフランスの女流作家アレキサンドラ・ルウベ・ジャンスキーも、夕刊新聞『巴里ソワール』の特派員として來朝した。

諸文士逝く　直木三十五が脊髓カリエスのために二月九日帝大整形外科に入院し、同十四日腦膜炎の症狀で臭內科に移り、同二十四日午後十一時四分結核性腦膜炎のためについに逝去した。同二十六日大阪ビルで神式告別式擧行。『文藝春秋』は四月號を『直木三十五追悼號』とし、改造社からは『直木三十五全集』が發行された。つゞいて、同月二十七日午前七時には、前夜『早稻田文學』復活協議の席上で腦溢血を起し、そのまゝ自宅へ擔ぎ込まれた宮島新三郎が死去した。これより先二月には、佐々木味津三が肺炎で死んでゐる。平凡社から『佐々木味津三全集』發行さる。またその他、二月には詩人横瀨夜雨、四月には評論家土田杏村、戲曲作家瀨戸英一、五月には歌人中村憲吉が黃泉の客となり、十一月三日には物故文士慰靈祭で亡友の靈を祭つたばかりの江見水蔭が、四國の寒霞溪へ旅行中クルップ性肺炎で死んだ。

藏原の公判、土方與志等件等　舊『ナルプ』の指導者藏原惟人の公判は十月三日東京地方裁判所において開かれた。檢事は文化運動の影響によつて左翼運動に入つた者が五十パーセント以上に及ぶこと、その責任は被告一人で負ふべきものではないが大半は被告が負ふべきものであるといふ意味のことを述べて八年の刑を求めたが、判決は懲役七年(未決通算三百日)といふことになつた。治安維持法違反と出版法違反で三年の刑を宣告されてゐた山田清三郎も、八月二十五日に市ヶ谷刑務所に下獄した。シンパ事件で保釋中だつた林房雄も、十月二十二日に一年の刑を果すべく下獄した。

八月二十四日、さきの築地の首腦土方與志が全ソヴイエット作家同盟第一回大會に出席し演說を試みたといふことが日本の新聞に報道された。彼の演說は、傳へられたところによれば、日本プロレタリア藝術家の名を以てなされたもので、日本のプロレタリア文學は十有餘年の間ソヴイエット文學の影響を受けて來たこと、日本の勞働者並に作家はソヴイエットの建設事業に關心を持つてゐること、ソヴイエットの文學作品は日本に多數の讀者をもつてゐること、そして十二種のソヴイエット戲曲が飜譯されてをり、その大部分が上演されてゐること、さらに日本のファシスト文化組織の現勢及び左翼文化運動の現狀、小林多喜二の死等に關するものであつた。土方與志のこの行動は官邊より甚だ怪しからぬものとされ、遂に華族の禮遇を剝脫されるにいたつた。

四　本年度の諸作品

1　老、作家群

一般に通用してゐる老大家、既成作家、中堅作家、新進作家といふ作家の區別のし方は、老大家を自然主義時代を通過してしまつた作家、既成作家を自由主義華やかだつた大正文壇人、中堅作家をプロレタリア文學の勃興とほゞ時を同うして現はれた新感覺派や新人生派の人々、新進作家をプロレタリア文學興隆以後の作家といふ風に解釋すれば、例外や別格は勿論あるけれども、それ〴〵の範疇にはそれ〴〵の特徵があつて、必ずしも出鱈目な區別ではなからう。そこで、今本年度の數多い作家を紹介するにあたつて、主として便宜の上からではあるが、この老大家、既成作家、中堅作家、新進作家に分類し、それにプロレタリア作家、婦人作家の項を付け加へて述べてゆくことにする。

島崎藤村は相變らず長篇『夜明け前』の完成に專心してゐる。本年も豫定通り『中央公論』一月、四月、七月、十月の年四回發表を續行し十月號で第二部の十章に至つた。

永井荷風は百五十枚の中篇『ひかげの花』を『中央公論』八月號に發表して絕讃と攻擊の中に立つた。菊池寬は『文藝放談』で、『永井荷風の「ひかげの花」を讀んだが、荷風も年のせいか、隨分下手になつたと思つた。殊に(水戸の青年

に短刀で脅かされた）云々など、あれで時代への皮肉のつもりかも知れないが、たゞ微苦笑に價するだけである。それよりも、この頃はエロでなくとも、傾向が惡いといふ理由で、すぐ切り取りを命ずる警保局がなぜ、あんな世道人心を害し、しかも藝術的に何の秀れたところもない作品を、切り取りしないのが不思議である。淫賣をして安んじてゐる女、その女の男妾、凡そあの位、傾向の惡い作品はないと思つた。』と手嚴しく批評した。これに對して、正宗白鳥は、『あくまで日常性哲學に準據したもので、很抵に社會の秩序を破壞するやうな毒素を有つてゐるのではない。親の前で子の前で讀めないやうな卑猥な文字があるにしても、正面から怯まないで書續けたところは、多くの通俗小說、新聞小說の作家が、讀者の興味に媚びるため、卑猥な趣向をちらつかせてゐるやうな作者心理に比べると、遙かに藝術的であると私には思はれる。』と辯護した。

この二人の『ひかげの花』觀でも分るやうに、この小說は現代社會の新奇な廢頽面に作者が溶け込んでゐる作品であつて、作者はさういふ特殊な世界における特殊な人間性を、人間性一般と解釋し肯定してゐるのである。しかし、その表現のうまさといふやうな點からいへば、本年度文壇の傑作たることは喪はないであらう。

徳田秋聲は『金庫小話』（『文藝』一月號）、『霧』（『改造』九月號）、『稻妻』（『行動』十月號）その他數篇の心境小說を發表してなかなかの活動力を示した。一切の社會的制約や既成概念や道德世界から脫け出し、自己そのものを以て體當りで人生を味到しようとする心境はます〳〵冴えを示して來たと云へる。以上にあげた短篇三つは同じやうに自分の伴の愛人との交友關係を中心とする世界であるが、伴に對してもその愛人に對しても、またその愛人の伴以外の情夫に對しても、作者と思はれる主人公はいさゝかも既成の習俗的觀念に煩はされないで折衝するのである。むろん習俗的觀念だけでなく、選ばれた少數者の新らしい日常生活觀といふやうなものもこゝにはない。あるものは自己本然の心で世界を受け入れようとする、またさうすることに熟達した作者の心の論理だけである。

正宗白鳥は『藪睨み』（『改造』一月號）、『陳腐なる浮世』（『中央公論』九月號）、『無題錄』（『文藝』十一月號）等の諸篇を發表した。『藪睨み』は郊外のある質屋の財產をめぐる兄弟姉妹、その配偶者をも織りまぜての利慾心の蔓藤を描いたものであるが、末娘の肺病患者であるのだが、これに對しては、傳染を恐れて父さへ見舞ひに行くことが稀である。たゞ腦病患者の愚昧な長男だけがしげ〳〵見舞ふのであるが、それも看護婦に氣があつてのことだといふことを、最後に讀者は知らされることになる。『陳腐なる浮世』は、要するに地上の世界は陳腐なもの、本當に陳腐でない世界は墓の彼方であることを說いた談議的作品。これらの作品が示してゐるやうに、今年も正宗白鳥は昔ながらの作品を書きつゞけてゐる。これに對しては、一方その虛無的態度を喜ぶものがあると共に、他方では、概念的になつて來たといふ批評も出た。

近松秋江も『思ひのこし』（『改造』八月號）『人間哀史』（『行動』十一月號）、『山雨』（『文藝春秋』七月號）『母は歸らん』（同、十一月號）等、相變らず『苦海』系統の私小說を書いてゐる。その他**泉鏡花**の『斧琴菊』（中央公論、一月號）、**上司小劍**の『涙の踊』（『中央公論』七月號）がある。なほ上司小劍は『文藝春秋』に文藝時評を連載し、その老練の觀察と筆致を買はれた。最後に、純粹の作家ではないが、**生田長江**の『釋尊傳』（『改造』十一月號）が、以前からの彼の仕事の繼續として發表された。

二、既成作家群

昨年から本年へかけては、既成作家たちの返り咲きが特に目に立つた。一時後退してゐた志賀直哉、里見弴、久米正雄、宇野浩二、豐島與志雄、長與善郎、水上瀧太郎、瀧井孝作、牧野信一、廣津和郎、室生犀星、佐藤春夫等――これらのあるものはプロレタリア文學とモダン派文學の時代にも後退せず頑張り通して來たのであるが、――名前が雜誌、新聞等を賑はして來た。

志賀直哉は『日曜日』（『改造』新年號）、『日記帖』（同、四月號）等の私小說を發表した。『日記帖』のうまさはやはり

多くの人を感服させた。しかし、それほどに力の入つたものでなく、昔の作品におけるほどの氣持ちの張りはないやうである。そして、昔の人道主義はなくなつて、趣味と觀照の身邊世界だけが殘つてゐる。

里見弴の『馬鹿』（改造、一月號）は不良華族問題の一端を人間主義的立場から描いたものである。その後、病臥してゐたが、年末近く、『年中行事』（改造、十二月號）、『羽織の冠』（中央公論、十二月號）を發表した。

宇野浩二は『裏聞』（改造、六月號）、『懸問』（中央公論、六月號）、『人間往來』（同、十一月號）、『文學の鬼』（文藝春秋、十一月號）その他を發表したが、昨年の諸作ほどの好評はなかつた。たゞ、昔の私小說をだんだんに捨てて客觀小說に進み、いろいろな生活と性格のタイプを描き出さうと努めてゐる點が見られる。

豐島與志雄は『常識』（改造、二月號）、『椎の木』（經濟往來、二月號）、『千代治の驚き』（文學界、一月號）、『死ね！』（文藝春秋、二月號）、『父の形見』（行動、十月號）その他を發表したが、彼はやゝ探偵小說めいた技巧を用ひ、多く第二人稱の形式を取つて人間心理の裏面を開いて見せる點に新味を出してゐる。**長與善郎**の『背水』（改造、四月號）は善良な細君と若い看護婦との間を動く四十男の心理を描いた身邊小說だが、この小說の底にある性道德は普通の善良な男のそれであつて、極めて、常識的である。この他にも、『花束』（中央公論、十二月號）を書いてゐる。

水上瀧太郎の『貝殼』（中央公論、十月）は、故埼の末に爵位をさへ賣らうと考へるに至つた華族崩れと、昔は名妓だつたあばずれのその女房、成金の老未亡人、庭園と共に譲られその成金の邸内に起居してゐる老庭師、昔華族崩れに犯されたことのある老庭師の息子の嫁等の間の生活を描いたものだが、そして過去の殿堂の崩れて行く音をそくそくとして聞かせる作品であるが、川端康成はこれを東京朝日新聞紙上で『文壇の垣』の外の作品と評した。題材が新派めいてゐる點からもさう云はれたのであらうが、インテリゲンチヤの苦悩とか、現代文壇で流行し或は問題になつてゐるものを含んでゐないといふことが、この作品を『文壇の垣』の外に置いてゐるのであらうか。

久米正雄は『小鳥籠』（改造、四月號）、『冬日さす』（文藝春秋、新年號）等を書いたが、昔の身邊小說から進展を見せてゐない。

室生犀星は大いに働いて『鶴千代』（新潮、新年號）、『小さい町で』（文藝、新年號）、『洞庭記』（中央公論、五月）、『あにいもうと』（文藝春秋、七月號）、『チンドン世界』（中央公論、十月號）、『神かをんなか』（文藝、十月）、『神々のへど』（文藝春秋、十一月）等を書いたが、『神かをんなか』においては一人の男に忠實に仕へる數名の妾が神とされてをり、『神々のへど』では夫に內密で將棋り金を貯へる女、そしてそれを隱すために家庭內のいざこざをまき起す女が神々のへどとなつてゐる。さういふ『看學』の現はれて來たところに彼の變化が見られる。**廣津和郎**は『或エンゼルの死』（中央公論、新年號）、『四十四の秋』（改造、十月號）等を書いたが、『四十四の秋』では文壇に對する犧牲の羊となつた中年の文士志願者を描きつゝ、生活苦に身を削つて純文學に精進してゐる自分を悲しみ、『僞札作りよりも原稿作り』と僞語する大衆作家の豪奢な生活の方に生き甲斐を認めてゐる。**佐藤春夫**は『二少年の話』（中央公論、二月號）、『國性爺の使者』（文藝春秋、八月號）、『若者』（同じく、十月號）その他を發表した。**澤井孝作**は『山中釣遊』（新潮、一月號）、『Y君と僕と』（文藝春秋、三月號）その他、**牧野信一**は『月あかり』（文藝春秋、四月號）、『剃髮』（同、八月號）、『創作生活にて』（新潮、十一月號）、『鬼涙村』（文藝春秋、十二月號）等、**宮地嘉六**は『夜半の歌』（中央公論、十一月號）その他、**吉田絃二郎**は『先祖の家』（文藝、四月號）、その他**加能作次郎**は『息子の戀人』（文藝春秋、三月號）その他を發表した。

寡作家の**山本有三**も今年は『獨』（改造、十二月號）を發表した。この小說の物語は甚だ興味深いものである。——ある會社の小使をしてゐるお店もの上りの專造は、新聞の相場欄を見ては自分だけで賣つたり買つたりし、さういふ空想の中の儲けや損失の中に生き甲斐を見出してゐる。たまたまを、同僚の一人が自動車に轢かれ、それがもとで勞資の間が紛糾する。ところで、專造はたつた一人の現場の目擊者だつたので、勞働者側のあらゆる人間から『眞理』を述べること

を要求される。しかし、專造は過去のある經驗から、眞理の効用についての信頼を持つてゐない。その上彼は資本家側からも勞働者側からも獨立でありたかつたので、そして、自分の空想の世界での相場だけを樂しんでゐたかつたので、『眞理』を云ふことを最後まで拒絶する。すると、ある夜工場からの歸り道で、三人の人間に頭から風呂敷をかぶせられてぶんなぐられる。そして頭に大きな瘤が出來る。……『翌朝もいたみはさつぱり引かなかつた。彼は休まうかと思つたが、しかしこの位のことで缺勤するやうでは――工場にはいつてまだ半年にもならないのに缺勤するやうでは、成績にかゝはると思つた。彼はいたみをこらへて出掛けることにした。そして瘤を隱すやうにお釜帽子を横つちよにかぶつて霜を踏みながら工場へ出て行つた。彼は頭にひゞかないやうに出來るだけそろそろ歩いてゐた、痛い腰を引きずりながら。それでも朝の冷い風が帽子のあはひからすうつとはいると、不自然にふくれ上つたてつぺんのあたりが切れる疱丁でそがれるやうにひやりとした。』

作者の眞の意圖が何處にあるかはわからないが、この物語は資本家と勞働者の二つの階級の間に挾まれて惱む知識階級、或は人道主義者の姿を思はせる。いづれにしても、『生きとし生けるもの』や『女の一生』からはかなりのイデオロギー的變化が我々の興味を呼ぶ。

その他には、**久保田万太郎**の戯曲『好晴』(中央公論、九月號)、**眞山青果**の同『福澤諭吉』(改造、十月號)、等をあげることが出來る。

3 中堅作家群

本年度の諸作品のうちで最も注目をひいたのは横光利一の長編『紋章』であつた。これについては實に多くの批評があつた。例へば、青野季吉はこの小說は雁金なる人物において知識階級の實行的精神を表してゐると批評した。傑作として推賞する聲が大きかつたが、小林秀雄は『旺盛な發明力にともなふ饒舌である』といふ缺點を指摘してゐる。この小說は、雁金といふ實行家的性格の男と山下久内といふ懷疑家と對照させて描いてゐるのであるが、結末で、山下久内はビールを乾しながら昂然と云ふ、『自由といふのは自分の感情と思想とを獨立させて冷然と眺めることの出來る潤達自在な精神なんだ。雁金君なんか僕にとつちやたしかに敵だが、敵なればこそあの人の行動は、僕に誰よりも自由といふ精神を強く敎へてくれたのだ。僕は雁金君に負かされ詰めたけれども、結果としてはたうとう僕の方が勝つたのだ。』これによれば、作者は山下久内の勝利を描かうとしてゐるが、一方では作者は實行家たる雁金に實際の同情を寄せてゐるといふ戀島與志雄の批評もあつた。

しかし、『紋章』は、久内と雁金のどちらにも、勝利の判定を與へてゐない、と云つて兩者をそれぞれ肯定する第三の立場が『紋章』の立場であるといふこともできない、作者はさういふ結論を出してゐない。むしろさういふところに『紋章』の意味があると見ることもできよう。

この態度は、**川端康成**の『淺草祭』(文藝、連載)、『扉』(改造、十月號)、『通り魔』(改造、五月)などになると、『紋章』とはちがつた行き方で、作中人物の時々の心理の動き全體に及ぶのである。作者は殊更と思はれるほどなるだけ讀者に納得の行かぬやうな心理の動きを作中人物に起させる。『紋章』においては問題を、川端の作品に於ては性格及び心理の動きをどつち付かずにしてゐる、そして錯覺の藝術性といふやうなものが認められてる點で共通してゐるが、しかし川端の作品はより趣味的であり、部分技巧的であり、非思想的であり、非構成的であると云へよう。彼はその他にも『踊子』(文藝、四月號)、『あるかなきか』(同、一月號)、『現はれた女』(新潮、一月號)等の作品を發表してゐる。

尾崎士郎の『不安の季節』(改造、九月號)や『賢れた酒場』(文藝、三月號)等は、表現技術の普通で當りまへな點は川端など全くちがふが、それだけにまた平俗的である。**岡田三郎**の『なんぢやもんぢや』(行動、十一月號)、『雨降れ』(新

潮、一月號)、等は、尾崎と同じやうな行き方だが、作者の痴態的ポーズとでもいふべきものが尾崎より熟達してゐる。

その他**石濱金作**は『逃走記』(文藝春秋、七月號)、『一時代』(文藝春秋、十二月號)、『戀慕記』(行動、二月號)、『夢破れ』(新潮、十一月號)等を、**淺原六朗**は『青春の街』(經濟往來連載)、『ある時代の彼等』(新潮、一月號)、『父と子』(新潮、十一月號)等を、**中河與一**は『レドモア島誌』(文藝春秋、一月號)、『天付』(改造、四月號)等を、**關口次郎**は『憲一と雪枝』(文藝春秋、八月號)等を、**堀辰雄**は『物語りの女』(文藝春秋、十一月號)等を發表した。

4 新進作家群

芹澤光治良『蟲のついた大黒柱』(文藝、一月號)、『物慾』(行動、一月號)等、長篇『藤田家』の各部分、または『松柏苑』(改造、五月號)など本格的リアリズムの手法で時代史的意義のある作品を書いた。主觀の燃燒が足りないため通俗小說の臭味ありなどゝいふ批評を受けたが、例へば水上瀧太郎の『樹齡』などと比べて、それよりも性格の解釋においてより思想的であり、瑣末的な技巧においては『樹齡』より劣つてゐるが複雜な對象を複雜なまゝに描き出す大きな創作態度は、狹隘な身邊の描寫に閉ぢこめられてゐる日本文壇において異とするものもあつた。しかるに、彼の後半期の作品『鹽壺』(改造、十一月號)はやゝ遲つたところに行つた。この小說は、現在の日本の知識階級のあるものを扱つたものとして、注意せられた。杉といふ小說家がゐる。彼は『胸の病氣を楯に、何事にも、姑息に尻込みし、批判して逃げてきた己が辱しく、それにつけても、フランスの同じ文學者達を偲ぶのだつた。彼らは例の巴里騷動を契機として、結束して社會的な不正義に對する行動に移つたと聞く。その中に擧げられる作家には、フランスに留學してゐた頃、豪奢なサロンで會つたブルジョア小說家もある、病弱な評論家もある。あの人々は、みんな理智や思想が足柳にならず、社會的な「憤り」を怒つたのであらうが、さて、自分たち日本の作家は、社會の片隅に追ひ詰められて、作品をもつて

ゐる、社會に働きかけることができずに、躊躇してゐるやうな狀態である——』といふ風に內省したり、またイタリー人がムッソリーニの行動的性格に惚れ込むことに同感したりする男である。同じ溫泉に、この杉の內省から分泌されたやうな氷川神吉といふ無意志的、非行動的な男が來てゐる。ところで、こゝに秋山といふ國家主義的代議士があつて、彼は健康な肉體と旺盛な實行的意志を持つた男である。彼ら三人は知り合ひになるが、氷川神吉は秋山代議士の細君が來たことに嫉妬に似た感情を覺えるほど秋山に惚れ込む。彼は杉に云ふ——『君は小說家だから解つて呉れるだらうが、僕は秋山さんに壓倒されさうなのに對して、なんとかぶつつかつて行かないぢやゐられないんだ。それが、男と女なら身を委せて闘つて行くつてこともあらうが、男どうしではどうにもならないんだ。僕は苦しくて、もう我慢出來なくなつた。』そして彼は考へる、『自分は毎日秋山さんの影で滿足してゐた。……さう、いつも一緒で、それで幸福だつた。そこへ夫人が現はれた。その後も、この生活には時間表の如く狂ひがないが、自分は變つた。夫人を嫉妬するのではない。自分は秋山さんの影から拔け出て、自分を眺め、秋山さんを仰いだのだ。すると秋山さんにのしかゝつて行くものが欲しくなつた、秋山さんにぶつつかり、秋山さんを自分に攝取したかつた、それでなければ、なんでもない二人ではないか。……』

秋山代議士は『紋章』の雁金八郎であり、氷川神吉は山下久內よりやゝ下層のインテリゲンチヤに屬する。杉は『紋章』における『私』とほゞ共通するやうにも考へられる。たゞ『紋章』では、作者は山下久內の主觀的勝利感にも同意してゐないし、さうかと言つて雁金八郎の實行的性格にも同意してゐないが、しかし『鹽壺』では一應、明白に秋山代議士の實行的性格が肯定されてゐる。さういふ意味で、違つたところもあるが、舟橋聖一の『ダイヴイング』と相通ずるものがある。芹澤はその他にも『異邦人』(行動、三月號)、『グレシヤムの法則』同じく、十二月號)等を發表した。

舟橋聖一の『ダイヴイング』は、一般國際狀態や一般國內狀勢を書き並べたといふストライキングな衣裳をもつてゐ

る。作品そのものとしてよりも、行動にまで身を起さうとしてゐる現代インテリゲンチヤの氣持を表してゐるといふ意味で、一部から大分問題にされた。しかし、その行動への衝動そのものはやはり漠として目標がないものである。或は『墜落』が潛情的であるのに對し、これはより多く激情的であるといふことが云へるかも知れぬ。彼はその他に『眠る女』(行動、一月號)、『征服者』(同、一月號)、『匂ひのやうに』(同、四月號)等を書いてゐる。**阿部知二**は『地圖』(行動、四月號)、『征服者』(同、一月號)、『山上』(文藝、五月號)等を發表してゐる。これら彼の作品は生命力の躍動に乏しい。そういふ意味で彼の作品はもつとも書齋的である。しかし、その彼がファシズムに心を惹かれてゐると云つてゐることはさきに述べた。それは彼の作品にはまだ現れてきてゐない。しかし、ファシズムが大衆文學の封建的なものよりも、却つてかういふところから發生するといふことも必ずしも考へられぬではない。

特に今年の新進作家の注目すべき作品としてはプロレタリア派以外から出たすぐれた農民小說たる**和田傳**『村の次男』(改造、三月號)をあげねばならない。彼が農村の耕地不足に重要な問題を見出したこと、そしてその耕地不足が小作農の間に小作地の奪ひ合ひを起し、それによつて小作農はますます窮迫し、地主はますます利益を得てゐることに、目を付けたことは、農民生活に對する綜合的な寫實主義とでもいふべきものの現はれであらう。再役して下士になつて恩給をあてにするか、徵兵に不合格の場合は自ら地主の代理となつて同じ小作人の田を取り上げて小作地を得るか、二つに一つよりない村の次男の妻は、具體的であると同時に普遍的である。さういふ村の次男三男は日本國中に散在してゐる。都會の工業は資本主義の限界點にぶつつかつてゐて彼らを吸收する餘地がない、と言つて國外に出ても苦力と同じ生活は出來ないのである。これは時代の苦惱の本質に觸れる問題であつて、テーマの深さだけについて云つても、見應へのあるものである。しかし、『數の井』の田を强奪しなかつたことが、すなはち信平が同じ小作人作市の田を取上げるに忍びなかつたことが不幸の原因であるとする母親の言葉——あれで最後を結んだことには多くの疑問の餘地があると云へよう。

本年度は非常に多くの新作家が出た年である。まづ縣賞入選作家からあぐれば、『中央公論』の『葱と花と馬』の伊東祐治、『深夜』の小山いと子、『改造』では『半生』の大谷藤子、『油麻藤の花』の酒井龍輔、『文藝』では『少年の果實』の竹森一男、『新潮』では『地方都市風景』の岡崎秀穗がある。婦人作家については後で一括するが、**伊東祐治**、**酒井龍輔**、**竹森一男**、**岡崎秀穗**についていへば、この四人の新人の以上の作品は暗合したやうに思春期の青年の心理を描いてをり、しかも作品との間に距離をおかずに書いてゐる。勿論、これは作者自身が丁度その頃の青年である關係でもあるので、例へば『地方都市風景』の作家は十九歳、『葱の花と馬』の作家は二十三歳、『少年の果實』の作家は二十四歳と言つたぐあひであるが、しかし『油麻藤の花』の作家は既に三十六歳の壯年者である。だから必ずしも年のせいばかりとは言ひ切れないので、後繼文壇には何か眼前の荒々しい生活を避けて、思春期の牧歌的な氣持ちに浸り度い、ないし思春期の回顧に藝術を見出し度いといふやうな氣持ちがあるのだらう。或は讀者一般の側にかういふ要求があるとも云へよう。むろん少年時代の生活を情緒に耽らないで突つ放して書く、冷酷に客觀化するといふやうな小說もあるが、いまあげた新人の作品はさういふものとは全然ちがふのである。

『油麻藤の花』は流石中年期に達した人の作品だけあつて、部分々々には一番確かな眼が發見される。作品の色も單色ではない。しかし、この作は至るところで手ごたへのある現實の端々——農民生活の深刻な現實にぶつつかるのであるが、しかし作者はどこまでも一元的に少年の眼で周圍を見てゐて、さういふ現實に第三者としての作者の視點から取つ組むことを避けてゐるのが注意される。『地方都市風景』は、地方の都市のおだやかな動きを書いたものである。かれと云ひこれと云ひ、後繼文壇、少くとも純文學の熱心な作者と並びに讀者の精神生活を知ることができる。それから非常に繊細であること、『少年の果實』と『葱の花と馬』の場合は更に心理主義的に幻想的であること、作品が器用にとゝのつ

てゐること、社會意識、生活意識が薄いこと、さういふことも特徴である。

いま、新人に現實回避傾向が共通してゐると云つたが、さう云へば今年少らず名聲を博した**石坂洋次郎**の『お山』(改造、四月號)、『馬骨團始末書』(同、十月號)續篇『豆吉登場』『肉の悲しみ』にも一種の現實回避の傾向があると云へないことはない。しかし、それは、前記の新人たちのものとは全然性質を異にするものである。彼が回避してゐるのは都會的纖細であり、都會の神經衰弱である。むろん、實社會上の葛藤からも逃避してゐるが、しかし、彼は畏怖して逃避してゐるのでなくてより情熱的なもの、より力強いものを求めてゐるのである。『お山』は山嶽の力と古來からの祭禮のしきたりのバーバリズムの中に情熱的な童話を感じたもの、『馬骨團始末記』は地方都市の封建的な空氣と近代的な空氣との繰ぎ合はせ、洋服を着たちよん髷のかもし出すユーモアを表現したもの。この作は文壇ではあまり評判はよくなかつたが、人間の表裏を描いて性格描寫に成功してゐるところがあることは認められる。たとへば、教頭の細君たるヒステリーの智識的女性などさうである。表現にも自信を以てどし〳〵型を破つて行くところ、魅力がある。どこに新しい社會性があるかと言へばそれまでだが、この作品の重點を生活認識といふ點におかずに遊びといふ點におけば、充分精神上の糧となる遊びを爲してゐる。生活認識といふ點から見ても、それほどリアリティの薄い作品でない。彼は『三田文學』に連載してゐる『若い人』も評判がよいし、その他『壁畫』(文藝春秋、一月)等をも發表した。

深田久彌も純文學の智識階級的神經衰弱性、やをら立ち上るにも懶いポーズと風貌とを伴ふ傾向に反對する作品を書いてゐる。『青猪』(改造、六月號)がそれであつて、彼は石坂のやうに山嶽や蠻族中學生にではなく、個性の強い冒險的な勞働者の中にいはゆる純文學世界への反對物を見てゐる。その點では石坂の作品よりも近代的進歩的だとも云へるが、しかし、ユーヂン・オニールの『毛猿』のやうな陷穽に落ち込む危險もないではない。『小賣店』(文藝、一月號)では、ずつと變つて、勝氣な獨身の女店主の典型を、一切の裝飾なしに單純な筆で書いてゐる。彼はこの他にも『母と子』

(文藝春秋、四月號)、『通信』(行動、十月號)、『一家系』(文藝、九月號)、『事件』(文學界、七月號)等を發表した。

武田麟太郎は東京朝日新聞に『銀座八丁目』を連載した。彼は謂ゆる『市井事もの』に自己の境地を見出し、本年度にもつとも油の乘つた作家の一人であつた。『いきほひ』(新潮、十月號)、『無知』(行動、十月號)『誤解』(文藝、九月號)、『血のつながり』(文學界、六月號)、『屋根』(同じく、九月號)、『文士』(經濟往來、三月號)、『陷穽』(中央公論、一月號)『微の花』(同じく、七月號)、『消費』(改造、一月號)等多數の作品を發表した。**片岡鐵兵**は『組合はせ』(文藝春秋、二月號)、『ダンスホール』(文藝、十一月號)、『陋巷』(中央公論、六月號)等を發表した。

龍膽寺雄が『M子への遺書』で問題を起したことは前に書いたが、彼はその他に『土曜の夜』(行動、四月號)等を發表した。**檜崎勤**は『梨花』(行動、一月號)、『女優』(同、四月號)、『やくざもの』(同じく、八月號)等、**福田清人**は『中央線沿線』(文藝、七月號)、『郊外の人』(文學界、一月號)等を、**伊藤整**は『傷痕』(新潮、十月號)、『斑點』(行動、四月號)『撫でられた顔』(文藝、九月號)等、**井伏鱒二**は『喪章のついてゐる心懷』(行動、二月號)、『講習會實記』(文藝、三月號)、『饒舌』(同、九月號)、『青ケ嶋大概記』(中央公論、三月號)、『りべるて座』(同、九月號)、『頓生菩提』(改造、十二月號)等、**榊山潤**は『をかしな人達』(新潮、十月號)、『友情について』(行動、十月號)、**徳田一穂**は『瑕ある海』(行動、一月號)、『年賀狀』(同、五月號)等、**神西清**は『見守る女』(同、一月號)、『流鶯門』(同、四月號)等を發表した。その他、本年度の新人に**丹羽文雄**、**中谷孝雄**、**亀田三郎**、**宮城聲**、**栗田三蔵**、**田中正光**、**田村泰次郎**、**柳原利次**、**那須辰造**、**三上秀吉**、**近藤一郎**、**坂口安吾**、**小田嶽夫**、**阪本越郎**、**山下三郎**、**永松定**、**北小路功光**、**中山義秀**、**竹中郁**、**丸岡明**、**庄野誠一**、**寺崎浩**、**中村地平**、**尾崎一雄**、**森本忠**、**徳田戯二**、**古澤安二郎**、**井上友一郎**、**兵本善矩**、**上林暁**、**倉島竹二郎**、**藤原伸二郎**、**飯島正**、**淵川騏**等がある。

中谷孝雄は『三十歳』(改造、二月號)で、**丹羽文雄**は『象形文字』(改造、四月號)『贅肉』(中央公論、新人號)で、

宮城聰は『樫の芽生え』（改造、八月號）、『故郷は地球』（東京日日新聞連載）で注意を惹いた。『中央公論』新人號で紹介されたものに『生き甲斐の問題』の**平川虎臣**がある。詩人**北川冬彦**は小說に方向轉換して、『秘關のある風景』（中央公論、五月號）『曠野』（行動、一月號）等を發表した。

東京日日新聞の新人推薦小說には、里見弴の推薦による前記の宮城聰の作品の他に、川端康成推薦による**佐藤碧子**の『女性の出發』、横光利一の推薦による**森敦**の『酩酊船』、中村武羅夫推薦による**矢田部至**の『理想派の人々』、菊池寛推薦による**澤田眞雄**の『競爭』がある。

要する一九三四年は非常に澤山な新人の出現した年であつて、しかも、それが諸雜誌、諸新聞によつて計畫的に行はれた年であつた。前記の東京日日新聞の計畫と言ひ、或ひは『中央公論』の臨時增刊新人號の試みと言ひ、例年のことではあるが『改造』、『文藝』の懸賞小說募集、同じく『新潮』のそれ、その他『文學界』や『行動』による努力的な新人の紹介がそれを示してゐる。戲曲家として働いた新人には、**岩田豐雄**、**阪中正夫**、**田郷虎雄**がある。岩田の『朝日屋絹物店』（改造、三月號）は好評を受けた。

5 婦人作家群

既成婦人作家としては、野上彌生子、中條百合子、宇野千代、平林たい子、林芙美子、窪川稻子、岡田禎子、圓地文子、松田解子等がある。

野上彌生子は『ノツケウシ』（文藝、五月號）、**中條百合子**は『小祝の一家』（同じく、一月號）等、**宇野千代**は『色ざんげ』（中央公論連載）等、**平林たい子**は『三階の姉妹』（新潮、一月號）『春』（改造、四月號）等、**林芙美子**はもつとも多產で『山中歌合』（改造、十一月號）『鶯』（同、一月號）『すがた』（行動、二、三月號）『田舍言葉』（文藝春秋、八月號）『散

文家の日記』（同、三月號）等々、**窪川稻子**は『牡丹のある家』（中央公論、六月號）等、**岡田禎子**は、戲曲『蟹』（改造、六月號）、『乙女等の詩篇』（行動、十一月號）、『珍客』（新潮、十二月號）等、**圓地文子**は同戲曲『白蟹の良人』（文藝、二月號）『あらし』（新潮、十一月號）、**松田解子**は『大鋸屑』（文藝、三月號）等を發表した。

婦人作家においても、本年度は非常に新人出現の夥しい年であつた。まづ懸賞當選で現はれた作家から云へば、『半生』（改造、八月號）の**大谷藤子**、『深夜』（中央公論、一月號）の**小山いと子**、『無風帶』（同、新人號）の**石川錦子**がある。懸賞當選以外で實力を認められて出て來たものに『梅の花』（文學界、八月號）『常次の土產話』（文藝、九月號）等の**仲町貞子**、『歡迎會』（文藝、十一月號）の**平林英子**、『白痴』（文藝、三月號）の**阿部ツヤコ**、戲曲『十年祭』（新潮、十二月號）の**住藤道子**、『部屋』（行動、三月號）の**戸川エマ**等がある。また、同人雜誌に作品を發表して注目を惹いた婦人作家に、『沙漠に花ひらく』（現實文學、十一月號）の**富本陽子**がある。

既成婦人作家にはプロレタリア派が比較的多い。中條百合子、平林たい子、窪川稻子、松田解子等の他、野上彌生子、圓地文子等も一時その派に傾いてゐた。林芙美子も一時はさうであつた。そしてこれは必ずしもプロレタリア文學運動の流行のせいばかりではなかつたので、日本における婦人の獨特な社會的地位が彼女たちを急進自由主義的たらしめ、プロレタリア運動に接近させるためでもあつたのである。

ところで、本年度文壇に現はれた新婦人作家達を見ると、プロレタリア作家として現はれてゐる新人は殆んどない。たゞ平林英子だけがプロレタリア派の新婦人作家だが、しかし新らしく文壇にデヴューした『歡迎會』は、おそらく味方の陣營にあまり歡迎されぬものだらう。しかし『歡迎會』にしろ、ないし大谷藤子の『半生』富本陽子の『沙漠に花ひらく』等にしろ、突き込んで婦人の運命、または自己の身邊だけでも考へる作品には、男性作家と異る社會意識がおのづから浸み出てゐる。プロレタリア派內部で認められた新作家に**杉山ナヲ江**、**藤島まき**の二人がある。

6 プロレタリア作家群

深刻な反動期の情勢が、謂ゆる轉向文學なるものをプロレタリア文學運動の中に作り出したことは、既に述べた。それは、作品を擧げれば、**村山知義**の『白夜』(中央公論、五月號)、『歸郷』(改造、七月號)**立野信之**の『友情』(中央公論、八月號)**島木健作**の『癩』(文學評論、四月號)、『苦悶』(中央公論、十月號、(**藤澤桓夫**の『世紀病』(同、二月號)、**窪川鶴次郎**の『風雲』(同、十一月號)等がそれである。

＊ブルジョア文學の中心テーマがインテリゲンチヤ問題だつたことは前節に書いたが、この傾向はむしろプロレタリア文學の方から作り出されたものであつたとも云ふことができる。なぜならば、プロレタリア文學運動に參加してゐたインテリゲンチヤの大部分が、轉向を餘儀なくされた事實、そしてそれが彼ら自身の手で文學作品として表現されたといふことが、文壇にインテリゲンチヤ問題の渦を卷き起した直接動機だつたからである。

轉向文學のあるもの、――『癩』や、『盲目』『苦悶』は立派な藝術的價値をそなへてゐる。――これを一應轉向文學に數へたが、實は、これらは轉向の心理を描くと共に、いかにしても轉向しない闘士を併せて描いてゐるのであつて、その意味では轉向文學ではない。いまこゝに『苦悶』を取りあげれば、――石田と佐伯とは同志だが、佐伯は自己がどうしてもこの運動に堪えられないことを石田に訴へたことがある。その時、石田は佐伯を激勵して彼を翻意させたが、その後石田自身が轉向して出獄し、許された範内の進歩的な仕事として歴史研究のグループに加はり、そこで良心の慰安を求めながら妻帯もして、さゝやかな片隅の幸福を味つてゐる。さういふ風にして二年の年月が經つて後、突然佐伯の姉が訪れて來て佐伯の死を知らせる。佐伯は轉向を肯んぜずして獄内で狂死したのである。石田は佐伯が死んだ四國の刑務所を訪れ、教悔師に會つて佐伯の死んだ時の狀態を聞く。また彼は佐伯の姉から送つてよこした生前の佐伯の手紙

によつて、彼が最後まで自分を信頼し愛してゐたことを知る。石田は佐伯を殺した者が自分であると感ずる。といふのは、一度逃避を考へた佐伯を再度陣營につかせたのは彼だから、しかも、その彼は、現在『少ないけれどもあたゝかい交友、わくやうな快談、つゝましい家庭、讀書、かるいつかれ、流れるやうなレコードのメロデイ』に浸つてゐるのである。それ以來、深い自責が彼を苦しめる。シネマを見ても、光る銀幕を見ながらふと彼は考へる、佐伯はたうたうトーキーなどゝいふものも知らずに死んだと。研究會に出席しても、そこのメンバーが皆佐伯を、責めてゐるやうな氣がして、以前のやうに快活な議論など出來ない。彼は自己の生活の虚僞に堪えられなくなつて、つひに東京を去り、田舍へ歸る。――作者は最後に石田が運動に立ち戻ることを仄めかしてゐる。この作品においては、表現も虚飾なく澄んでゐる。作中の人物の心理のはこびになんら無理がない。轉向文學として甚だすぐれてゐる。作品としてこれ以上のことは蛇足である。以後の問題は文學の世界から出て政治の世界にはいるべきだ――さういふ感じを與へる作品である。

本年度プロレタリア文學の中心が農民文學（貧農を描いた文學）にあることは前に書いた。『文化集團』に連載され、後單行本として完成された**平田小六**の長編『囚はれた大地』は、觀察の廣さ深さと主觀の强さとをかねそなへた作品である。『童子』『凶作地帶』『めらはど』になると、一つは短篇のせいでもあらうが、この作家の描寫力は更に鍛冶されて來てゐる。殊に『めらはど』は都會の醸業婦姉妹を描いてなほ農民文學たることを失はぬところ、新時代のリアリズム小説だと云ふべきだらう。**佐々木一夫**の『沒落後』も、農民自身の觀察から生れたプロレタリア的な農村小説として出色であり、作家的手腕も達者ではないがすなほである。彼はその他に『旱魃後』（文化集團、一月號）を發表してゐる。開墾地農民の生活を描いた**本庄陸男**の『土地』も眞實味と藝術味のあるものであつた。

文壇的に一番活動したのは**林房雄**である。彼は長篇『青年』を完成した他、『文藝』にも『N男爵の平凡な半生』を連載した。その他『ハムレットの母』（改造、一月號）『父と子』（同、十一月號）『波』（文藝春秋、十月號）等を發表した。

『青年』は毀譽褒貶相半ばしたが、抒情詩的魅力の強さはなんと云つても否むことが出來なからう。その他、營業雜誌の誌上に發表された、プロレタリア文學作品をあぐれば、**葉山嘉樹**の『鳥屋の一夜』(改造、二月號)『山谿に生きる人々』(同、十月號)、**藤森成吉**の『餓鬼』(同、四月號)『女優達』(文藝、十一月號)、**細田民樹**の『犬吠崎心中』(中央公論、三月號)、**金鶴清**の『裡の町』(同、四月號)、**德永直**の『冬枯れ』(同、十二月號)、**本庄陸男**の『白い壁』(改造、五月號)、**岩藤雪夫**の『嵐の朝』(文藝、十一月號)、**荒木巍**の『砂の上』(文藝、四月號)『夏』(改造、九月號)等がある。

一般に從來强さを目がけてゐた前記の作家達は、深さを目がけなければならない時期に逢着して作家的立場がぐらついてゐる感じである。中で、本庄の『白い壁』は新らしい足場に安定を見出しかけてゐるし、藤森成吉の作品も足並が崩れてゐない感じがする。

加賀耿二の『工場へ!』が、プロレタリア文學の再出發の地歩を示してゐることは前に書いた。紡績女工の勞働生活を書いた**杉山ナヲ江**の『蚕成工』その他の勞働者新人作家の作品が、『工場へ!』と同じ意味で注目さるべきであることも前に書いた。しかし、本年度プロレタリア文學の重要な特徴の一つが、勞働者生活を描いた作品の減退にあることは、これも既述したところであるが、否めない。これは、直接的には國内狀勢の然らむるところだが、日本のプロレタリア文學に對して前途の指標を與へるべきソヴイエットの最近の作品が、殆んど農村を描いたものばかりで、工場勞働者を描いた傑作が現はれて來ない、少くとも飜譯されないといふことも原因してゐると思はれる。

7 新聞小說

この章の最後として、本年度中における都下五大新聞の連載小說を表にして示す、——

大衆小說

女人曼陀羅	吉川英治(東朝)	嘲の獵人	牧逸馬(〃)
水戸黃門	大佛永郎(〃)	街の暴風	三上於菟吉(東日)
雪之丞變化	三上於菟吉(〃)	貞操問答	菊池寛(〃)
弘法大師	直木三十五(〃)(釋迦齋)	愛の非常線	淺原六朗(讀賣)
血煙天明陣	國枝史郎(東日)	紺の泥靴	佐藤紅綠(〃)
歸去來峠	白井喬二(〃)	戀愛人名簿	小島政二郎(〃)
相馬大作	直木三十五(三上於菟吉)(讀賣)	明色	細田源吉(都)
大菩薩峠	中里介山(〃)	女子祭	戸川貞雄(〃)
御傳地獄	國枝史郎(〃)	世紀の青空(懸賞)	羽澤純(報知)
丹下左膳	牧逸馬(〃)	華かな戰車	加藤武雄(〃)
天明旗本傘	長谷川伸(都)	愛情の價値	吉屋信子(〃)
突つかけ侍	子母澤寛(〃)		
松村金太郎	〃(〃)	**純文學小說**	
霧牛平	野村胡堂(報知)	銀座八丁目	武田麟太郎(東朝)
曉を行く(懸賞)	佐宗雅生(〃)	泣蟲小僧	林芙美子(〃)
現代通俗小說		花嫁學校	片岡鐵兵(〃)
三家庭	菊池寛(東朝)	夏菊	谷崎潤一郎(東日)
花咲く樹	小島政二郎(〃)	貨物船の夢	尾崎士郎(〃)
		舞臺裏	岡田三郎(〃)

昇降機　高橋　保（〃）　理想派の人々（中村武羅夫〃）　矢田部　堅（〃）
裸木　貴司山治（〃）　饒　爭（菊池　寛〃）　澤田眞雄（〃）
女性の出發（川端康成推薦）　佐藤碧子（〃）　續人生劇場　尾崎士郎（都）
故郷は地球（里見　弴〃）　宮城聰（〃）　我が歌に翼ありせば　檜崎　勤（〃）
酩酊船（横光利一〃）　森　敦（〃）　愛と飢　下村千秋（〃）

五　評論界の動靜

1　『文藝復興』論

一九三四年度の評論界は『文藝復興』の檢討、ないし文藝復興說の批判から始まつた。

『新潮』新年號は佐藤春夫の『文藝復興の機運について』、青野季吉の『文藝復興の機運によせて』、廣津和郎の『嘘をつかないでいゝ文學』を並べて、『文藝復興についての考察』欄を卷頭に据ゑた。佐藤春夫は文藝復興の機運なるものを全的に否定した。『先日文藝春秋の座談會に召されて出てみると同じやうな題目について話し合ふのであつたが……同會の筆記は今手許にないから一々吟味はしないがプロレタリア文學の外面的壓迫に因る不自然な沒落から一時休養中であつた中老作家の再活動の開始やら二三の文學雜誌の創刊などが、主要な題目になつたのを記憶してゐるだけである。しかしプロ文學の沒落が何故に文藝復興の機運であらうぞ。むしろ文藝の壓迫された一現象にしか過ぎぬではないか。休養中だつた作家の再起これは祝賀すべき現象には相違ないが見方によつては新人に人無きを證する一例ともならうか。……純文學雜誌と稱するものゝ創刊の事實はあまりに非文學的に傾きすぎた雜誌のみ多すぎる今日、大衆文學もどうや

ら行き詰りらしいから純文學雜誌もやり方によつては一つ位は存在する餘地があらうかといふ見解が出版界の二三の玄人筋の間で偶然一致したのであるまいか。……同人雜誌の氾濫は事實である。しかしこれとても見方によつて今日の商賣雜誌がいかに文學に冷淡であるかを證明するだけのものにしか過ぎないだらう。文藝の野に遺賢無くなつてこそ文藝復興とも呼ぶべきであらうと考へてゐる僕には同人雜誌の隆盛期を文藝復興的現象と見ようとする青年の意見は、滿員電車の行列を見て交通の不備を論ぜずに交通の發達を說くが如き皮肉な逆說としか感ぜられなかつた……』。

青野季吉は第一義的意味に於ては否定するが、第二義的な意味では肯定した。すなはち『第一義的に言へば、新らしい文學が興隆し、めざましい文藝復興が望まれるためには、それの擔ひ手たる新らしい階級の「根」がなければならない。……この第一義的な觀方からすれば、こゝまで來た日本の文學において、かりにも文藝復興など云ふことが言ひ得るものではない……』しかし、第二義的な意味では、文藝復興の機運の動いてゐることが肯定される。『……第二義的と云ふのは曩にも一寸說明したが、一般に文藝や新らしい文學といふものを第一義的な場合のやうな大いさにおいて、重味において、受取らないで、文壇の波動を基準として卽現象的な觀方からそれを受取るのである』。この見地からすれば、第一に日本で純文學と云はれてゐる心境的・私小說的・心理主義的小說は、『このファッショの氣流の中にあつても存在し得るばかりでなく、かへつてこの氣流によつて助成されると觀るべき理由がある』。第二にはこの反動狀勢の中においても、『多かれ少かれ進步的な、文化主義には自由主義ブルジョアジーとその文學者の存在である。……この階級層とその文學者とが存在する限り、文壇的な基準において、純文學の再起、謂ゆる文藝復興をはかることによつて、自己の文學的欲求の伸長を求めることは自然である』。第三に、『一方では大衆文學が新講談に墮落するか通俗歷史文學として固定するかして、その固有の俗文學性を暴露したことであり、他方ではプロレタリア文學が文學外の强制によつて決定的な退却を餘儀なくされたことである。この特殊條件が加はつて來た場合、これまでも常に曖昧と大衆文學に反擊し、公然

とプロレタリア文學に背を向けて來た謂ゆる純文學の保持者層が、自らの純文藝的要求の實質を檢討する餘裕もなく、ほとんど反射的に純文學の再生、文藝復興を口にして來るのは、これも極めて自然である…。およそ右のやうな基本的な條件及び特殊的な條件のある以上、第二義的な意味で純文學が多かれ少かれ隆盛を示し、その限りにおいて謂ゆる文藝復興の見られるであらうことは豫想され得るのである…』。

廣津和郎は、『再び嘘を吐く必要のない文學が認められて來た』といふ意味において、文藝復興の機運を承認した。彼によれば、從來『キング的ジヤーナリズムの目的意識』が文學を變形させて來た。『以前純文學だけしか載せなかつた高級雜誌が探偵小說や大衆小說を載せるやうになつたのもそのためである。また二三年前のナンセンス派、モダン派など、といふものも、低級ジヤーナリズムに媚びるタイコ持文學であつた。しかるにこの時代に、俗つぽい低級文學のために、片隅に引つ込んだ純文學に代つて、かうしたジヤーナリズムの惡傾向と戰ひつゞけ、「眞面目な文學」の旗を守り立てたのは、實際プロレタリア文學だつたのではないか』。ところで、そのプロレタリア文學は、『それが文學として形をとゝのへるためには、次第に既成文學（彼等の所謂ブルジョア文學）のよき部分を學びつゝさへもあつた。それと共に、既成文學は人生觀の上に、社會觀の上に、たとひ表面は對立した形を取りながらも、内心はプロ文學から學ぶべき多くのものを持ち、反省させらるべき多くのものを持つてゐた。――かくして兩者のよきものには、一つのはつきりした共通點があつた。それは「眞實」――文學として「眞實な文學」といふ點だつた。…文學が本來に立戻つて來つゝある、とは確に云へる。前人未踏の世界を示すとか、新らしい人生觀、新らしい藝術觀が擡頭するとかいふ事は、後日の問題として、文學が文學の本來に立戻つて來たといふ意味で、「純文學復興」といふ言葉を使ふならば、この言葉は確に使つて差支へないと思ふ。』純文學から低級ヂヤーナリズム性が驅逐され、プロレタリア文學から功利的（政治的な）目的が排除される時代が來たといふ認識、そこから廣津は文藝復興の機運を認めたのである。

『文藝』の六月號では、山本實彥が『文藝復興』といふ見出しで自己の見解を發表した。彼は『この問題は騒がしばかりで、結局出版屋や文壇の或一部の野心的計畫の現ばれに過ぎない。蟹と思つたら、このごろの作品につきいゝものを擧げて見よ』といふ反文藝復興論に對して、『文藝復興の聲が一方に擧ると、二タ月や三月もたゝぬうちに、文壇の大家や、中老までが、とび出して來て、その證據はいかに。いゝものはないぢやないかなどと、詰め寄らるる態度は、赤ン坊が生れた、その赤ン坊はどう生育するかも見きはめないで、すぐにチットも嬉くないぢやないかと斷定するのと同じ類で、無思慮、無分別もはなはだしい。』と批判し、出版事業家としての彼の長期的な計畫と努力とをあげ、『私どもは少くとも、さうした遠大の計畫のもとにすべてをすゝめて行くのであるが、それを尻の穴の小ささを發輝して、目前にいい作品が生れぬとか、偉大な作家が出來ぬとか云ふのは、何と云ふタワケタ氣短かな言ひかたであらう。もしも彼等の云ふ通りであつたら、半歲も文藝復興の運動がつづけば、十人のゴールキーやドストエフスキーが生れてくるのは何でもないことのやうに受取られる。』とたしなめた。

これらが『文藝復興』に關する代表的見解であつた。

2　政治と文學の問題の再論議

『ナルプ』の解散といふ具體的な情勢における具體的な出來事は、まづ『ナルプ』内における尊部派と反對派との間において、文壇全體にもこの問題を波及せしめ、嘗て最も喧しく論じられた政治と文學の問題を、今年再論議せしめることゝなつた。

その具體的現れとして、『改造』四月號には林房雄が『政治か文學か？』を發表し、『文學界』八月號では『政治と文

學の問題』座談會が開かれ、『文藝』九月號には龜井勝一郎が『政治と文學』を書いた、等々。

林房雄によれば、人間には政治家的タイプと藝術家的タイプとの二つの性格的タイプがある。作家がまづそのことを自覺し、次に『第一に、文學もまた自己の社會的義務を遂行する強力な手段であり得ること、第二に、自分は作家以外の資格においては「無用者」であるかもしれないが、作家としての資格においては、他のいかなるものよりも劣らず有用者であるといふ自覺』を得、『作家と政治家とが、おのおのその與へられた分野において、最善をつくすといふこと』、それが『久しく評論されてゐた文學と政治との統一』であるとした。

龜井勝一郎によると、政治と文學の問題は『才能の問題でもなく、性格の問題でもない、……にある智識人のやゝこしい良心の問題である』。『政治と文學といふ問題を、その概念の説明によつて區別づけやうとする綺麗事や、この問題を政治文學といふ範疇内で研究しようとするペダントや、創作方法上の問題にのみ還元する仕事など、さういつたものは一切御免蒙り度い。僕はこゝにプルジョア文學とかプロレタリア文學とかいふ概念的差別をさへ撤回していゝと考へる。階級的自覺といつたものゝ以前、云はゞその原始的狀態に、何ものにもわづらはされることなき純粹な良心の鼓動だけをまづ聞かうではないか。……マルクス主義を知らうと知るまくと、むしろ率直にして……良心の上にまづ問題をおかねばならぬ』。『騷擾軋轢の中に日を送ることは詩人を殺すと、ゲエテの叡智はまさに至言でないか。それを知りはつきり打算してみて、それでも尙一度』は騷擾軋轢の中に行く藝術家の行爲は發狂である。しかし、『そこを平然とのり越えて行くものは藝術家ではない。そこに目をつぶつて平然としてゐられる奴も藝術家ではない。そこに身を處し、さいなまれ、悲鳴をあげるものがほんとうの藝術家なのだ。』『政治か文學かと、それを問ふ如き心は、けつしてけつして幸ひあるものゝ心ではない。まことに二兎を追ふものゝ痴愚だ。臆病者の懷疑だ。藝術的氣質としての政治慾とは、眞實政治への憧憬にはじまつて政治からの逃亡に終る、そのくり返される循環線であらう。只、その上をさ迷ふことが、

どうにも出來ない時代の良心なのだ。』だから龜井によれば、政治と文學の問題も、どうも解決の出來ない時代の迷路なのだ。

『文學界』の座談會には、次のやうな會談が注意されるゝ——

小林（秀雄）　政治か、文學か、といふ問題でまで政治といふ概念が、普通言はれてゐる意味の政治といふ概念に比べて非常に深刻になつてゐると思ふ。……今日われ〳〵のいふ政治といふ言葉には一種のアスピレイションがあるからだ。之迄の世界觀と違つて來て、これからの世界觀があつたら人類は幸福になるか、ならんかといふ大きな自覺に卽したアスピレイションが政治といふ言葉に含まれて居らなければ文學者の間に問題は起り得ない。……そこで僕が政治か藝術かといふことを問題にしなくてならぬ場合には、政治の意識を大きな人間の良心の中迄政治といふ意義が今の時代にも入つて來た、そこにこの問題の中心がある。だから今のプロレタリア文學に於て政治的意識といふものを如何なるサークルを作るべきか、如何なる組織をすべきかといふ、實際的問題にばかり直ぐ結び付けてゐてはいかぬ。僕はさういふ意味でもつて、政治といふものはプロレタリア文學から決して離すことは出來ぬといふことを承知するよ。だけどさういふ解釋は觀念論的でいかん。あくまでもサークルだとか組織だとか實際行動上の實際的意識のみに政治問題を解釋するなら、今政治的意識といふものは破れてるぢやないか。その破れてるものに、何故君達は戀々とするか……。

青野（季吉）　いま僕は小林君の意見を聞いて、それは君の問題にしてゐるやうに、政治は立憲制とかさういふものでなくて、もつと深刻な意味がある。しかしプロレタリア文學におけるところの政治といふ問題は前からの問題で、おそらくそんなに狹く理解したことは一遍もなかつたと思ふんだ。……さういふ問題は、日本のプロレタリア文學は前からやつてるよ。さうして幾多の失敗もしたけれども、利益もあつたと思ふんだ。……僕の結論は、小林君達がいま政治と文學との關係に興味をもつたことが何を意味するか、それを考へることから出發することなんだよ。

これらの議論に見られるとほり、今年政治と文學の問題が再論せられたについては、以前の場合のマルクシズムの公式の主張とその反對といふよりも、突込んだ具體的な處にまで進んだことは認められる。しかし解決はやはり與へられてゐない。從つて、おそらく何かの機會に、この問題はいくたびか論じ直されることであらう。

3 轉向の非難と釋明

轉向の事件が、すでにいくたびか述べたやうに、基た人の眼をひいたものであつたから、評論界においてこれに關する論議が盛んに起つてきたのは當然だつた。後半期に入つて、まづ岡田三郎が讀賣新聞に、林房雄が同じく同紙上に、金子洋文が朝日新聞紙上に、板垣直子が『行動』に、小堀甚二が『新潮』に、大宅壯一が『文藝』に、杉山平助が『新潮』に、その他等々が意見を發表した。

板垣直子の『文學の新動向』と杉山平助の『轉向作家論』とは、問題を人物論と道德論の立場から論じてゐる限りでは、共通してゐる。二人とも轉向作家の過去と現在の良心を問題にする一方、杉山は大石内藏之助やキリストはさらにあるものではないから、まあ大目に見てやれと寛大ぶりを示し、板垣直子はルドウイッヒ・レンや小林多喜二を轉向作家と對照して轉向作家をはげしく非難した。岡田三郎と金子洋文は、同じく轉向後の態度を中心問題としたが、前者が問題を藝術家一般としての態度に限つたのに對し、後者は政治的態度にまで言及した。小堀甚二『轉向派作家の政治的虛僞』において、この問題を機會に政治的プログラムの再吟味の必要を說いた。大宅壯一の『轉向讃美者とその罵倒者』は、轉向批判の批判だ。彼によれば、最も正しく轉向を批判する立場にある者は、現在では明らさまに言へぬ立場にある者である。それ以外の彼自身も、或る程度轉向してゐる者や、彼がいち早く戰鬪的マルクス主義から脫落したとする青野、金子、前田河等の批評や、自己の自制力に誇りを感ずるに至つてゐる杉山の如きリベラリストや、從來左翼から

攻擊されてゐた中村武羅夫、岡田三郎等の犬養的罵倒やは、さういふ立場にある以上、それが如何なる內容の批評であらうとも、既にその立場の故に誤つてゐるといふのである。林房雄は讀賣紙上の『轉向作家の辯』で、岡田三郎や板垣直子の批評から同僚を擁護し、君達は始めから轉向しようにもしようのない日向水みたいな存在ではないか、と酬いた。

4 リアリズムの問題

文學の方法の問題としては、昨年頃から論じられてゐたリアリズムの問題が本年度も論壇の重要トピックを爲した。種々なる評論があつたが、『新潮』七月號と『文學界』九月號はそれについておのおの座談會を催しこの問題を徹底的にしようとした。しかしこの問題の至難であることから云つて當然ではあるが、これもまた充分な解決を見なかつたやうである。なにより、リアリズムなるものが何物かについて、ほとんど各人各說の觀があつた。例へば『文學界』座談會においても、まづ『簡單に言へば僕は現實といふものがどこまでが現實で、どこまでが非現實か解らないといい。』(川端)といふやうなぐあひで、從つて『泉鏡花なんてリアリストかね』(深田)といふ質問に對して、『さうとも言へるね。さうでないとも……まあこれは大變面倒なことになる……』(小林)といふ答へが與へられてゐる。そして、『僕は、リアリズムの精神といふ問題ね、タトへば小說に扱ふ人間の場合でも扱ふ人間の內部にも入つて行くんです。同時に自分自身の內部にも入つて行かうといふ、さういふ精神ぢやないかと思ふですがね。……エンゲルスが、その人がどういふ思想を持つて居つて、もし本當のリアリズムの作家ならリアルな眞理が現はれるといふ意味は、さういふ對象の精神の中へ自分が入つて行くと一諸に自分の精神へ入つて行くといふ場合ぢやないかと思ふですね』(青野)、『さうだと思ふ』(森山)と言つてゐる。さらに、『……たとへばドストエフスキーなんといふもの丶、作品——僕はあまり知らんけれども、僕の知つた範圍では、「惡靈」にしても「白痴」にしても、あゝいふ主人公の中へ入るとともに自分の中へ入つて行く、そ

こにいゝものがあると思ふんだな』（青野）といふやうな意見も出されてゐた。

リアリズムの問題は、プロレタリア文學においては『社會主義的リアリズム』の問題として論じられた。そして、この社會主義的リアリズムについての議論では、『文學評論』四、五、六月號で行はれた森山啓と川口浩との論爭がもつとも重要である。川口浩が『日本的現實』におけるプロレタリア文學のリアリズムとして『否定的リアリズム』を提唱したことは、そのこと自身の正否はともかく、リアリズム一般についても考察の示唆を與へるものだ。それに對して、森山啓は社會主義的リアリズム論で對抗してゐる。抽象的思索よりも可視的現實からのインスピレイションを主とするリアリズム的創作方法に取つて、果してソヴェットと日本との間に同一の創作方法を設定し得る可能性がありや否や、これはなか〳〵興味のある問題である。

× × ×

大衆文學排擊論も本年度の評論壇のひとつの題目だつた。岡田三郎、林房雄等がそのチャンピオンだつた。

昨年末から文藝批評無用論などがあつたにも拘はらず、本年度は非常に月評の流行した年であつた。毎月各新聞が競つて作品月評を掲載した他、文學雜誌、綜合雜誌の誌上でも殆んど毎月それが掲載された。

また匿名批評も大いに暴威をふるつた。朝日の『豆戰艦』、日々の『蝸牛の視角』、讀賣の『壁評論』、都の『大波小波』に加ふるに、『文藝』にも『五行言』、『改造』にも『文壇寸評』が掲載されるやうになつた。『文藝春秋』の『文藝春秋欄』、『新潮』の『スポット・ライト』も相變らずである。

改造
第十七卷
第一號
附錄

昭和九年十二月十八日 印刷納本
昭和十年一月一日 發行

編輯兼發行人 山本三生

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京市芝區新橋七ノ一二 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43)二一二一・二一二三・二一二四

本誌と共に特價壹圓

改造社發行・新刊重版書

濱田恒一著
貿易政策論
定價 二・三〇 送料 ・一四
世界資本主義發展の見地より、世界貿易及び貿易政策を分析し更に日本貿易の現狀等に論及す

猪俣津南雄著 踏査報告
窮乏の農村
定價 一・三〇 送料 ・一〇
是ぞ總行程三二〇〇粁に亙つて全國の代表的窮乏農村を行脚して得たる貴重なる實情踏査記。

阿部勇著
日本財政論 租稅
定價 四・五〇 送料 ・二二
斯學の新鋭阿部教授が心血を濺いだ學的業績。近刊される大内教授の公債篇の姉妹卷である。

鈴木茂三郎著
日本財閥論
定價 一・八〇 送料 ・一四
組上の巨大財閥四十有餘。現代日本の資本機構と勢力分布はこの一卷に展望されて餘す處なし

文學博士 高田保馬著
マルクス經濟學論評
定價 二・七〇 送料 ・一六
勞働價値學說、地代理論、資本主義經濟の變轉機構に關する見解、資本蓄積理論等を嚴正批判

コローヴィン著 米村正一譯
過渡期國際法
定價 一・八〇 送料 ・一〇
國際法を科學的に理解せんとする人、新國際法理論の新解釋を知らんとする人の讀むべき書。

高橋誠一郎著
重商主義經濟學說研究
定價 五・〇〇 送料 ・二二
經濟學說の研究に於てはその造詣の深さに於て本邦唯一の稱ある教授の重商主義學說の全體系著者はマルクシズム貨幣理論の最高權威者。貨幣に關する實際と理論の兩面を克明に展開した

カウツキー著 向坂・岡崎譯
貨幣論
定價 二・二〇 送料 ・一六
新興經濟學の立場に立つて編纂された新經濟學辭典として好評數十版を重ねたもの。殘部僅少

改造社版
改訂 經濟學辭典
特價 二・五〇 送料内 ・二二 鮮滿臺 ・六二

改造社發行・新刊重版書

滿鐵經濟調査會編
滿洲經濟年報
定價 一・八〇 送料 ・一四
目滿經濟ブロックの結成は今や急速に進展し我々の期待と注視は正に此一點に集中されねばならぬ秋だ。本書は世界的權威の「滿鐵調査會」が最新の資料を基礎に編輯したる正確無比のもの

滿鐵經濟調査會編
滿洲經濟年報 一九三四年版
定價 一・八〇 送料 ・一四
正確なる全國的資料を基本とした日本農業問題解決の重要文獻本書は植民地農業問題を特輯。

日本農業研究會編
日本農業年報 二輯
定價 一・二〇 送料 ・一〇

日本農業研究會編
日本農業年報 三輯
定價 一・五〇 送料 ・一〇
貴重なる農村問題研究資料として實證を博したる本年報は農村に最も關係深き米穀問題を特輯す

日本農業研究會編
日本農業年報 四輯
定價 一・五〇 送料 ・一〇
日本に於ける最初で唯一の年報にして農村經濟の大支柱をなす蠶糸業問題に集中して特輯す

文藝家協會編
文藝年鑑 一九三三年版
定價 三・〇〇 送料 ・二二
近代的で實際的な萬遺憾なき編纂と努力を傾注して成る日本文藝界全貌把握の年鑑、各文藝部門の傑作、文藝家團體、雜誌社、新聞社、文藝家住所、出版法規等を網羅した一大文壇總覽

文藝家協會編
文藝年鑑 一九三四年版
定價 三・〇〇 送料 ・二二

猪俣津南雄著
インフレーションの基礎理論
定價 ・八〇 送料 ・〇八
「インフレーション」を口にしながらその眞の理論を解するもの稀し。懇切な批判と解說をみよ

佐々弘雄著
人物春秋
定價 一・五〇 送料 ・一〇
人物論の水準を高めたといはれる佐々氏の名批評集。紙上に躍動する偉人有名人の横顔!!

改造社發行・新刊重版書

川端康成著	川端康成集 第一卷	定價 二・三〇 送料 ・一四	現代の我が純文壇を背負つて立つ川端氏の隨筆批評集。文學の本質を指標する珠玉の書である
横光利一著	横光利一集 第一卷	定價 一・八〇 送料 ・一四	一作毎に蟬蛻の妙境を脱し、而も孜々として倦まざる著者が自負自選せる神品十篇を收む。
横光利一著	紋章	定價 二・〇〇 送料 ・一四	長篇時代將來の先驅を爲す問題の長篇小說。現代のインテリゲンツアに示唆を投げる作品。
高田保著	有閑雜記帳	定價 一・三〇 送料 ・〇八	都會文化の中から生れた最初の隨筆集で、考現學讀本とでも言ふべきもの、近代人のよきアミ
有島生馬著	有島生馬全集 全三卷	價各 二・五〇 送料各 ・二二	南歐風の詩情豐かな作風にユニイクな存在を我文壇に誇る生馬氏の全作品。集高雅な豪華版。
廣津和郎著	風雨強かるべし	定價 二・〇〇 送料 ・一四	現代階級不安の諸相を傾向的に描いた問題作で、藝術的長篇小說時代の先驅的作品。
池谷信三郎著	池谷信三郎全集	定價 三・二〇 送料 ・二二	最も藝術的な好長篇小說望鄕、花はくれないを始め短篇小說、戯曲隨筆批評等の全作品を網羅
林房雄著	青い花束	定價 一・五〇 送料 ・一〇	行くとして可ならざるなき著者の才筆の本領の現はれで著者の所謂戀愛小說の第一作である。
芹澤光治良著	明日を逐うて	定價 二・〇〇 送料 ・一二	作家的良心とその酷烈なる精進を經て今日の地位にある著者の傑作集で明日への藝術の指標書

逆 B-51

Printed in Japan

昭和九年十二月十八日印刷
昭和十年一月一日發

終